

一〇 日本軍歐洲派遣ニ関スル交渉一件 六二八

一一 独領太平洋諸島占領一件 六六五

一二 本邦ニ於テ各国ノ兵器軍需品調達關係一件 六八〇

一三 雜件 七〇六

一 奥匈国軍艦「カイゼリン、エリザベット」号一件 七〇六

二 独国駆逐艇「エス」九十号捕獲一件 七二五

三 日本軍艦葫蘆島寄港一件 七三五

四 独国ノ西比利亜鉄道破壊陰謀一件 七四三

五 独国軍艦「ガイエル」一件 七四六

附録 日本外交文書大正三年第三冊日附索引

事項一 歐洲開戦一件

一 六月二十八日 在奥匈国西臨時代理大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

奥匈国皇儲同妃兩殿下暗殺ニ関スル件

第四九号

奥匈国皇儲及同妃殿下六月二十八日午前「ボスニヤ」州
Sarajevo 市ニ於テ兇漢ノ狙撃ニ逢ヒ兩殿下共薨去アラセ
ラレタル旨只今宮内省ヨリ確聞シタリ

当日兩殿下歓迎式場ニ臨御ノ途中自動車ニ爆裂彈ヲ投シタ
ル者アリシモ皇儲ハ腕ニテ之ヲ避ケラレ第二ノ自動車ニ当
リテ爆裂シ随員及公衆中ニ多数ノ負傷者ヲ出タセリ然ルニ
式後右負傷者御見舞ノ途上一中学生ノ狙撃ニ遭ヒテ重傷ヲ
負ハレ御手当中何レモ薨去アラセラル右ニ関シ皇儲殿下特
種ノ地位ニ鑑ミ 天皇陛下御弔電ト共ニ帝国政府ヨリモ弔
電御送然ルヘシト思考ス

二 六月二十九日 加藤外務大臣ヨリ
在奥匈国西臨時代理大使宛(電報)

奥匈国皇儲同妃兩殿下薨去ニ付弔意申入方ノ件

第二五号

貴電第四九号ニ関シ帝国政府ノ深厚ナル弔意貴官ニ於テ可
然奥匈国政府へ申入レラルヘシ

三 六月二十九日 在奥匈国西臨時代理大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

奥匈国皇儲同妃兩殿下暗殺ノ詳報ニ関スル件

第五〇号

往電第四九号ニ関スル詳報左ノ如シ

「フランツ・フェルデナンド」大公殿下ニハ今回「ボスニ
ア、ヘルゼゴビナ」兩州ニ於テ举行ノ陸軍演習御統裁ノ為
六月二十五日統監部所在地「ボスニア」州 Bad Hildze へ
御来著二十八日午前十時同妃殿下御同伴同州首府「サラゼ

ボ」ニ入りテ歡迎式ニ臨御ノ途上 Cabrinovitch ト称スル印刷職工爆裂彈ヲ投シタルカ殿下ノ自動車ヲ掠メ隨員ノ自動車附近ニ落チテ爆発シ隨員陸軍中佐一名其他民衆二十余名ヲ負傷セシメタリ歡迎式ハ予定通り遂行セラレ式後市内御見物ノ手筈ナリシカ此レニ先チ前記負傷武官御見舞ノタメ衛戍病院ニ向ハルル途上更ラニ Princip ト称スル中学生殿下ニ向テ短銃發ヲ發射シ其ノ一彈大公殿下ノ咽喉部ニ他ノ一彈妃殿下ノ腹部ニ命中シ現場ニ於テ何レモ人事不省ニ陥ラレタルヨリ直ニ州政府ニ導テ御手当申上タルモ遂ニ薨去セラレタリ

兇行ノ動機運累ノ範圍等ハ未タ判明セサルモ新聞ノ所報ニ依レハ兇徒ハ二名トモ塞爾比人種ニ属シ「ベルグラード」ヨリ爆彈ヲ得タルコトヲ自白シタル由ニテ「ボスニア」地方ニ多数住スル塞爾比民族ノ排塊熱ニ起因セル政事の犯罪ナルコトハ疑ナキカ如ク予テ周到ナル注意ノ中ニ系統的準備ヲ整ヘタル形跡アリ皇帝ニハ病後ノ御保養旁遊署ノ為前日 Ischi 離宮ニ御転地アリシカ兇變ノ為六月二十九日維納ニ還幸アリタリ各新聞ハ幸テ哀悼ノ誠意ヲ披瀝シ皇儲ノ高貴ナル性格ヲ叙スルト共ニ其軍事上ノ努力ノ多大ナリシヲ稱揚シ今ヤ塊洪国ハ有事ノ日ニ必要ナルヘキ活力ノ源泉

五 六月三十日 在塊洪国西臨時代理大使ヨリ加藤外務大臣宛

塊洪国皇儲同妃両殿下暗殺ニ関シ詳細報告ノ件

塊公第九三号 (七月十八日接受)

塊洪国皇儲「フランツ・フェルデナント」大公及同妃「ソファ・フォン・ホーヘンベルグ」両殿下カ六月二十八日「ボスニア」州演習地ヨリ同州首都「サラエボ」へ行啓ノ際同市ニ於テ兇漢ノ為暗殺セラレタル件ニ関シテハ往電第四九号及第五〇号ヲ以テ不取敢及報告置候処更ニ其ノ詳報及新聞論調等左ノ通り及報告候間御査閲相成度此段申進候

敬具

一、皇儲ノ「ボスニア」州行啓

皇儲「フランツ・フェルデナント」大公ニハ「トリエス」ト「モリ海路 Metkovich」ニ向ハレ「ヘルツェゴヴィナ」州首都「モスター」ヲ巡見ノ後汽車ニテ六月二十五日演習本營地タル「ボスニア」州 Bad Hilde ニ着セラレタリ今回皇儲ノ「ボスニア」州行啓ノ動機ハ六月二十五、六、七日ノ三日ニ亘リ同州「タルチン」地方ニ舉行セラレタル第十五、第十六兩軍団ノ演習ヲ統裁スルニ在リ官辺ノ説明ニ依レハ右演習ハ特ニ何等具体的戰鬪準備ヲ意味スルモノ

ヲ失ヘリト痛悼シ塞爾比民族ノ熱狂的行為ヲ憤ル意ヲ洩ラシテ塊洪国帝室ハ愈々隆盛ニ国家ノ結束ハ益々鞏固トナルヘキコトヲ説キ老帝ノ御心情ヲ拝察シテ御同情ニ堪ヘサルコトヲ述ヘツツアリ

四 六月三十日 加藤外務大臣ヨリ在本邦塊洪国大使宛

塊洪国皇儲同妃両殿下薨去通知ニ対シ回答ノ件

人送第四九号

以書翰致啓上候陳者昨日附第四九七号貴翰ヲ以テ貴国皇儲「アルンデュック・フランソア・フェルディナン」殿下並ニ同妃殿下本月二十八日「サラエヴォ」ニ於テ毒手ニ罹ラレ薨去相成候旨御通知ノ趣敬承驚愕痛嘆ノ至ニ不堪候我皇帝兩陛下ニハ此ノ凶事ニ対シテ深ク御哀悼被為在直ニ貴国

皇帝陛下ニ対シ御弔電御發送被遊候右訃音ハ已ニ在塊洪西臨時代理大使ヨリ電報有之依テ同臨時代理大使へ帝國政府ノ深厚ナル弔意ヲ貴国政府へ伝達方及電訓候此段回答旁本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

ニ非スシテ其ノ主タル目的ハ同州ノ山岳地方ニ於テ大部隊ノ行動ヲ試練セントスルニ在リトイフ、妃殿下ハ皇儲ノ遠遊ニ際シ行ヲ共ニセラルルヲ常トセルカ今回モ亦此好機ニ於テ同州ノ風光ヲ賞シ首都「サラエボ」市ヲ觀シト期セラレタル如ク演習中妃殿下ハ Bad Hilde ノ本營ヨリ毎日「サラエボ」市ニ自動車ヲ驅リ寺院学校等ヲ訪問セラレタリ

二、兇行ノ模様

六月二十八日朝皇儲ハ妃殿下ト共ニ自動車ニテ Bad Hilde ノ本營ヲ發シ「ボスニア」州首都「サラエボ」市ニ行啓、十時同市庁ノ歡迎式ニ臨御次テ市中御見物ノ上「ボスニア」州政府ニテ午餐後汽車ニテ本營へ還啓ノ計画ニテ市長及州行政委員自動車ニテ前驅シ次ノ自動車ニハ右方ニ大公妃左方ニ大公坐乗前坐ニ「ボスニア・ヘルツェゴヴィナ」總督 Potiorek 大将陪乘シ自動車ノ所有者タル自動車俱樂部部長 Harrach 伯運転手ト共ニ前方ニ坐シテ市庁ニ向ヘリ、人道ニハ歡迎ノ群衆充満シテ両殿下ノ万歳ヲ唱へ警衛ノ手配ハ遺憾ナク行ハレタルモ尚ホ万一ノ變ヲ慮レテ自動車ハ幾分高速度ニテ駛走シタリ然ルニ大公ハ視察ノ便宜上速力ヲ緩ムヘキコトヲ命セラレ「アッベル」河岸街ヲ徐行

シタリ時ニ自動車ニ極メテ接近シタル右側ノ人道群集中ヨリ一物体ヲ投ケ又ハ発射シタルモノアリテ大公ノ背部ヲ掠メテ飛去リタルカ幾許モナク同一場所ニ於テ兩殿下ノ乗車ニ向ヒ爆彈飛来シ須臾ニシテ其後方ニ爆発シタリ兩殿下及陪乗者ニハ被害ナカリシモ此際後車ニ搭乘シタル「ボスニア」軍司令官副官 Von Merizzi 中佐他一名輕傷ヲ負ヒ附近公衆中ニモ多数ノ負傷者ヲ出シタリ、兩殿下ハ其儘市庁ニ入り歡迎式典ハ予定ノ通り進行セシカ式後兩殿下ニハ前記不穩ノ状況ニモ拘ハラズ予定通り市内巡覽ヲ希望セラレ特別警護ノ必要ヲ進言セシモノアルモ殿下ハ之ヲ排シテ警備其他ノ手配ヲ其儘継続スヘキ旨命セラレ途上先ツ負傷武官見舞ノ為衛戍病院ニ行啓ノ筈ニテ往路同様自動車ヲ駆ラレ只万一ノ變ヲ惧レテ道順ヲ變更セラレ上記 Harrach 伯ハ自動車ノ左側踏板ニ立テ身ヲ以テ兩殿下ヲ庇護シタリ然ルニ途中ニテ道筋ニ就キ行進ヲ生シ自動車ハ其速力ヲ緩メ右側人道ニ接近シテ徐行シタルカ其ノ途端ニ於テ右側人道ヨリ二発ノ銃声起リ自動車ハ停止シタリ陪乗ノ總督ハ兩殿下カ下カ正坐セラレ低声ニテ交話セラルルヲ認メ何等ノ異變ナカリシコトヲ知りシモ、状況ノ危険ナルニ鑑ミ市中巡行ヲ止メ直ニ州政庁ニ向フヘキ様運転手ニ命シタルカ幾許ナラ

ルビア」民族主義ヲ愛シ埃洪国ノ貴顯ニ對シ危害ヲ加ヘントスルノ志ヲ懷キ今回皇儲ノ巡啓ヲ好機トシテ兇行ヲ敢テシタルコトヲ明白シ是亦近頃「ベルグラード」ヨリ「サラエボ」ニ来レル形跡アリ

四、皇帝維納還幸

埃洪国皇帝ニハ病後ノ御保養旁例年ノ通り御避暑ノ為六月二十七日上埃地利州「インシュル」離宮ニ行幸アリシカ翌二十八日正午凶報ノ接到ト共ニ維納還幸仰出サレ二十九日早曉發轅、午前十一時過「シェンブルン」離宮ニ還御アラセラレタリ

皇帝ニハ御高齢ノ上殊ニ病後御静養中ノ事進今回突然ノ兇報ニ接セラレ御健康上憂フヘキ所少カラサル様察セラレタルカ還幸後侍医ノ公表セル所ニ依レハ無限ノ御哀痛ニモ拘ハラズ御健康ハ充分満足スヘキ状態ニ在リテ目下特ニ顧慮申上クヘキ必要ナキカ如ク還幸後親シク各高官ニ謁ヲ賜ヒ御葬儀百般ノ準備ヲ指導アラセラレタリ

五、凶變ニ對スル埃洪国ノ新聞論調

凶變ニ就キ拳国ノ震駭ト共ニ当国新聞ハ一方哀悼ノ誠意ヲ披瀝シテ故皇儲ノ盛徳ヲ頌シ凶變ニ對スル失望ヲ愴フルト共ニ他方兇行カ「セルビア」種族ノ陰謀ニ出テタル疑アル

スシテ大公妃ハ人事不省ニ陥ラレ次テ皇儲ノ口部ヨリ多量ノ出血ヲ認メ初メテ大事ノ發生ヲ知りタリ自動車ハ急行シテ政庁ニ入り大公妃ヲ階上ニ奉送スル間ニ於テ大公モ亦車内ニ仆レ人事不省ニ陥ラレタリ庁内ニテハ直ニ兩殿下ニ御手當ヲ加ヘタルモ効ナク大公ハ約十五分後大公妃ハ其後數分ニテ孰レモ絶命アラセラレタリ

二発ノ短銃弾中一彈ハ大公ノ咽喉部ニ命中シテ頸動脈ヲ貫通シ他彈ハ自動車ノ側部ヲ貫キテ大公妃ノ右腹部ニ命中シタルモノニシテ孰レモ致命ノ御負傷ナリ

三、犯人ノ素性及兇行ノ動機

兩殿下ノ往路ニ於テ爆彈ヲ投シタル兇漢及ヒ短銃ヲ以テ狙撃シタル兇漢ハ孰レモ現場ニ於テ逮捕セラレ群衆ノ為ニ虐待セラレタルカ取調ノ結果爆彈ヲ投シタルモノハ Nedeljko Cabrinovic (二十一歳)、ト称スル印刷職人、短銃ヲ發シタルハ Gavro Princip (十九歳)ト称スル中学第八年生ニシテ共ニ「セルビア」種族ニ屬シ「オルソドックス」派ノ教徒タル「ボスニア」州民ナリ

兇行ノ動機ニ至リテハ未タ明カナラサルモ Cabrinovic ハ最近マテ塞国「ベルグラード」ニ在リ皇儲暗殺ノ目的ヲ以テ同所ヨリ爆彈ヲ得タルコトヲ明白シ Princip ハ予テ「セ

コトヲ推論シテ憤慨ノ意ヲ洩シ埃洪国ノ一大損失ニ相違ナキモ「ハプスブルグ」ノ帝家ハ是ニ因リ弥々隆昌ニ国家ノ結束ハ益鞏固ナルヘシト論シ民族軋轢ノ害毒ヲ説キテ「セルビア」民族ノ排埃思想ヲ非難シツツアリ

「フレムデン・ブラット」紙ハ「ハプスブルグ」帝家ト密接ナル關係ヲ有スル吾人埃国人ハ過去ニ於テ辛酸ナル經驗ニ乏シカラス埃国ノ将来ヲ意味シタル壯齡ノ皇太子ハ夙ニ逝キ万人ノ親愛ヲ鍾メタル皇后「エリザベット」ハ「ゲンフ」ニテ狂漢ノ兇刃ニ仆レタリ然ルニ今ヤ運命ハ吾人ニ斯カル重大ナル打撃ヲ与ヘタリ皇儲カ滿五十年ノ誕辰ヲ祝シタルハ僅ニ半歳前ナルニスノ高貴ニシテ完全ナル人格ハ既に幽明界ヲ異ニスルノ人トナリ了セリト痛悼シ殊ニ皇儲カ陸海軍ニ貢獻セル所ノ多大ナルヲ称揚シテ其ノ英邁ナル軍人的技能ハ埃洪国ノ重鎮ニシテ他年決戦ノ秋ニ際シ遺憾ナク發揮セラルヘカリシモノナリトナシ演習ニ際シ遂ニ其ノ義務ニ仆レラレタルハ哀悼スルニ余リアリトナセリ「フライエ・プレッセ」紙モ亦皇儲ノ薨去ニ因リ埃洪国ハ其ノ活力ノ源泉ヲ喪ヘリトナシテ失望ノ意ヲ洩シ天運高齢ノ皇帝ニ幸スル寡キヲ慨クモ兇變ト共ニ帝室ト國民トノ連鎖ノ弥々鞏固ナルヘキコトハ以テ幾分慰ムルニ足ルトナシ塞爾

比民族主義ニ論及シテ若シ塞国ニ於テ埃洪国ノ蠱害ニ罹レルヲ説クモノアラハ埃洪国ハ「ボスニア」ノ寸地ダモ塞国ニ割クヘキ程虫蝕セルモノニアラサルコトヲ答ヘント欲スルモノニシテ今次「ベルグラード」方面ヨリ来ル弔問ハ一種ノ苦味ヲ帯ヘルト覺ユト論シテ塞爾比民族ノ制御シ易カラサルヲ歎シ尚語ヲ転シテ縦シヤ重大犯人ノ檢覈ハ峻烈ニシテ陰謀ノ根蒂ヲ剷絶スルノ必要アルモ之カ為ニ塞爾比種族ノ宗國タル塞国トノ關係ヲ難澁ナラシムヘキ措置ハ勉メテ之ヲ回避スルノ要アルコトヲ切論シテ感情ヲ政治ニ加味スルノ危険ナルヲ唱道セリ

六 七月二日 在独国篠野臨時代理大使ヨリ
加藤外務大臣宛

埃洪国皇儲同妃両殿下ノ暗殺ニ関スル独逸新聞紙論調ノ要旨報告ノ件

公信第一一九号 (七月二十一日接受)

埃洪国皇位継承者タリシ埃国「フランツ・フェルデナンド」大公殿下及同妃殿下カ六月二十八日「ボスニヤ」首府「サラエヴォ」ニ於テ暗殺ノ奇禍ニ罹ラレタル事件ハ同盟塞爾比ノ庄迫ノ政策ヲ把持セルモノトシテ知ラレタルカ故ニ大塞爾比主義者ノ為ニ当面ノ標的ト目セラレ遂ニ今回ノ不幸ヲ見ルニ至リタルモノナリト論述セリ

右為御参考及報告候 敬具

七 七月二十三日 在埃洪国西臨時代理大使ヨリ
加藤外務大臣宛

埃洪国皇儲暗殺後ニ於ケル埃塞兩國ノ關係ニ関シ報告ノ件

埃公第一一一号 (九月一日接受)

「サラエボ」市ニ於ケル埃洪国皇儲及同妃暗殺事件ノ顛末ハ客月三十日附埃公第九三号ヲ以テ及報告置候処其後同事件ニ関スル犯罪捜査ノ進行ト共ニ陰謀ノ計畫地カ塞爾比本國ニ存スルコト明白トナリシ結果埃洪国論ノ沸騰甚シキト共ニ塞国ニ於テモ亦排埃思想ノ増進ヲ来シ兩國ノ關係ハ時ト共ニ漸ク險惡ナラントスル状況ニ立至リ候ニ付テハ其後ノ経過大要左ニ及報告候 敬具

目次

一、陰謀系統

二、埃洪国政府ノ態度及輿論

国ニシテ且ツ君主国タル独国一般ニ對シ激甚ナル棟衝ノ感動ヲ与ヘ社会民主党ニ属スルモノヲ除キ全国新聞紙ハ埃国皇室及埃洪国今回ノ大不幸ニ對シ深厚ナル哀悼ノ意ヲ表スルト同時ニ右暗殺ノ動機ヲ以テ政治的理由ニ帰スルニ一致シ殊ニ保守派及中央派ノ新聞ニアリテハ之ヲ以テ単ニ無政府党若クハ社会党ニ属スル兇漢ノ暴挙ニ非スシテ政治的組織的陰謀ノ遂行ナリト推断シ陰謀ノ策源地ヲ以テ塞爾比ノ首都「ベルグラード」ナリト認定シ埃洪国当局者カ嚴密ナル探究ニ依リテ真個ノ禍源ヲ闡明スルノ要アリト德憑セリ但シ塞国政府カ右陰謀ニ直接干与スル処アリトハ敢テ推測セサルモ陰謀ノ背後ニ塞国有力者ノ潜在セルコト疑ナシトハ独国新聞紙ノ最初ヨリ推説シタル所ナリシカ最近ノ電報ニ依レハ査問ノ結果塞国ノ某少佐モ共謀者ノ一人トシテ指摘セラルルニ至レリ

而シテ斯ル陰謀ノ何故塞国ニ発源セルカニ関シテハ巴爾幹戰爭後塞国ニ於テハ国民的自覚ヲ奮起シテ所謂「大塞爾比」ノ思想勃興シ「ボスニヤ、ヘルチェゴビナ」ハ勿論南「スラブ」族ノ住スル埃国南部地方ヲ結合シテ大塞爾比國ヲ建設セントノ運動ヲ生スルニ至リシカ将来ノ埃洪国皇位ニ登ルヘカリシ「フランツ・フェルデナンド」大公ハ從來

三、塞国政府ノ態度及輿論

四、列強ノ態度及輿論

一、陰謀系統

「サラエボ」暗殺ノ脈絡カ奈辺ニ通シ犯罪ノ範圍カ如何ナル程度ニ達セルヤハ官憲ニ於テ事件ノ審理中嚴ニ秘密ヲ守レルヲ以テ容易ニ之ヲ窺フヲ得サルモ現状ニ於テ逮捕セラレタル犯人二名及其後ニ逮捕セラレタル連累者ニ於テ爆彈其他ノ兇器ヲ塞国首都「ベルグラード」ニ於テ入手シ且最近迄同市ニ在リシコトヲ既ニ自白セルハ事實ニシテ皇儲暗殺ノ陰謀カ「ベルグラード」ニ成立シ犯罪ノ首謀者カ同市ニ在ルコトモ亦之ヲ疑フノ余地ナキモノノ如シ而シテ審理ノ進行ト共ニ爆彈供給者カ塞国官吏ニシテ同人カ所謂大塞爾比主義ノ鼓吹ヲ目的トセル秘密結社 Narodna Odbrana ト密接ナル關係ニ立テルコト、同人ノ周囲ニハ尚ホ幾多ノ共謀者アルコト等漸次明瞭トナリ「サラエボ」兇行ノ系路ハ「ベルグラード」ニ通シ塞国ノ一部人士ヲ其首魁トセルコト最早疑フヘカラサルモノノ如シ

由來塞爾比本國人竝ニ「ボスニヤ」「ヘルツェゴヴキナ」兩州及埃洪兩國ノ南部諸州ニ瀰漫セル塞爾比民族中ニハ多年來所謂大塞爾比主義ノ思想ヲ抱懷セルモノ頗ル多キコト

ハ既ニ世人ノ識ル所ナルカ該主義實現ノ方法ニ関シテハ其ノ主張必スシモ一ナラス、之ヲ大別シテ二トナスヲ得ヘシ、其ノ一ハ現ニ墺洪国ニ於テ「ハプスブルグ」王朝ノ治下ニ在ル塞爾比種族「クロアチエン」種族等ヲ糾合シテ同民族ノ宗国タル塞爾比王国ノ主權下ニ立タント欲スルモノニシテ「ボ」「ヘ」兩州其他附近塞爾比民族ノ棲息地ヲ塞国ニ併合セシムルコトヲ目的トスルモノナリ他ノ一ハ墺洪国内ニ在ル塞爾比種族ヲ統一シテ一大勢力ヲ樹立シ墺洪兩國連合ノ基礎タル現兩族主義 Dualismus ヲ変革シテ之ニ塞爾比種族ヲ加ヘタル三族主義 Trialismus ヲ「ハプスブルグ」王朝ノ治下ニ確立セントスルニ在リテ必スシモ墺洪国ノ現領主權ヲ変改セント期スルモノニ非ス是等兩主義ハ其ノ当面ノ目的ニ於テ如上ノ差アルモ孰レモ塞爾比民族繁榮ノ故史ヲ偲ヒ民族の覺醒ヲ呼号シテ墺洪国ノ施政ニ反對スルモノニシテ共ニ墺洪国不斷ノ憂患ヲナスモノタルハ論ヲ待タズ殊ニ前者ハ其ノ理想トスル所ノ遠大ナル丈運動モ亦激烈ニシテ其ノ行フ所ノ手段モ亦多ク惡辣ナルモノノ多ク同派中ノ過激ナルモノニ至リテハ此主義ノ当面ノ障礙タル墺洪国ノ君主其他ノ有力者ヲ仆シテ自家ノ主義ヲ宣揚シ乘スヘキ機会ヲ捕捉セント欲スルモノアリ、彼ノ千九百十

テ断ニス墺洪国ノ行動ヲ疑ヒツツアル塞国ノ上下ニ及ホセル反響異常ニシテ為ニ同国及兩州ニ種々ノ臆説ヲ生シタルハ怪シムニ足ラス而シテ此機ニ乘シテ弥々人心ヲ刺戟シ排墺思想ノ鼓吹ニ努力シタルハ上記大塞爾比主義派殊ニ二州其他ノ併合ヲ期スル過激派ノ新聞紙ニシテ「サラエボ」刊行ノ同派新聞「ナロット」紙カ皇儲同市行啓ノ日ニ當リテ何等歡迎ノ辭ヲ掲ケス故ラニ當日カ恰モ「アムゼルフェルド」會戰（千三百八十九年塞国「ラツァール」王カ土耳其ニ對シ獨立ヲ企テシ際ノ戰爭）ノ紀念日ナルヲ利用シテ該戰爭ニ関スル論説ヲ掲ケテ排墺の言辭ヲ弄シタルカ如キ其ノ著シキ一例ニシテ暗殺後ニ於ケル塞国各新聞ノ排墺論調ノ如キモ亦如何ニ其ノ平素排墺運動ニ努メツツアルヤヲ例証スルモノナリ

斯ノ如キ事態ノ裡ニ熱狂セル大塞爾比主義者ノ一部カ「ベルグラード」ノ秘密結社ノ使喚ニ依ルカ又ハ其ノ援助ノ下ニ陰謀ヲ構ヘ會々警備ノ緩ナリシニ乘シテ兇行ヲ遂行シ得タルハ事後ニ於テ之ヲ見ル寧ロ怪シムニ足ラサルモノアリ

二、墺洪国政府ノ態度及論調

七月二十八日「サラエボ」ノ兇變アルヤ同市及「ボヘミヤ」州各地方ニ於ケル「クロアチア」種族（スラブ族）及

年墺国皇帝ノ「ボ」「ヘ」兩州巡幸ニ際シ不軌ヲ企テタル塞爾比族兇漢アリシコトハ猶ホ人耳ニ新タナル所ニシテ其ノ後ト雖モ州總督ニ對シ危害ヲ加ヘント試ミタルモノアルコト再三ニ止ラス、而シテ民族主義ノ強烈ナル発露ニ基ク最近ノ巴爾幹戰爭ニ於テ塞国カ戰捷ノ結果膨脹ヲ遂ケ得タル事實ハ現ニ墺洪国臣民タル塞爾比民族大多數ノ民族の抱負ヲ増進セシメタルコト多大ニシテ上述大塞爾比主義ノ唱道ニ有利ナル形勢ヲ馴致シタルヲ以テ其ノ運動ハ時ト共ニ激甚ヲ加ヘ地方官憲ノ無策ナルニ乘シテ益々其ノ勢力ヲ扶殖スルヲ得タリ、而シテ最モ此主義ノ鼓吹ニ熱中セルハ「ボ」「ヘ」兩州ニ在ル塞爾比派ノ地方新聞ニシテ常ニ激越ナル論調ヲ以テ人心ヲ刺戟シ墺洪国官憲ノ暴戾ナルヲ慫ヘテ輿論ヲ喚起セント努メ同主義ノ地方政治家及塞国首都ノ秘密結社ト連絡ヲ通シ其ノ援助ノ下ニ熾シニ活動シテ排墺熱ノ鼓吹ニ努メツツアリタリ

今次「ボ」「ヘ」兩州ニ行ハレタル陸軍演習ニ関シテハ當局ニ於テ何等特殊ノ目的ヲ有スルモノニ非サルコトヲ主張セルモ塞国ノ接壤地方殊ニ所謂大塞爾比主義者ノ着目シツツアル「ボ」「ヘ」兩州ニ於テ演習ヲ行ヒ特ニ全軍總監タル皇儲之ニ親臨シテ統裁ノ任ニ當レルコトハ神經過敏ニシ回教州民ノ排塞運動勃發シ「サラエボ」「モスター」其他二三ノ地ニ於テ塞爾比種族州民ノ店舗、住家等ノ襲撃、破壊セラルルモノ少カラス該種族ノ州民ニシテ其ノ生業ヲ捨テテ奔竄スルモノアルニ至リ「ボ」「ヘ」兩州ハ頗ル不穩ノ状態ニ陥リシカハ州總督ハ「サラエボ」及近傍諸地方ニ戒嚴令ヲ施キテ秩序ノ維持ニ努メ無辜ノ州民ニ對スル迫害ヲ防遏スルノ手段ヲ講シタルヲ以テ秩序ハ幾許モナク恢復ヲ見ルニ至レリ

墺洪国中央政府ニ於テハ各新聞其他刊行物ヲ嚴ニ戒飭シテ過激ナル言論ヲ防止シ国論ノ沸騰ヲ緩和スルニ努ムルト共ニ他方、只管「サラエボ」事件ノ搜查審理ヲ急キテ其ノ捜査ノ範圍ノ如キ頗ル広汎ニ亘リ連累ノ嫌疑ノ下ニ逮捕セラレタルモノ既ニ数十名ニ達スト伝ヘラレシカ該審理カ一段落ヲ告クルト同時ニ犯罪ノ首謀地タル塞国ニ對シ直ニ嚴重ナル交渉ヲ試ミテ首謀者ノ所罰ヲ要求スルト共ニ塞国ニ於テ将来国内ノ排墺運動ヲ嚴ニ抑圧スヘキ充分ナル保証ヲ求め此機ニ於テ墺洪国ノ領土權ヲ脅威スヘキ塞爾比種族ノ運動ヲ根滅セント期スルモノノ如ク昂憤セル輿論ノ後援ニ依リテ時宜ニ依リテハ或ハ断乎タル措置ニ出テントスルヤノ形跡アリ

奥国議會ハ「バーメン」州治問題ニ関スル「チエツヒ」、
 独逸両民族ノ葛藤ニ坐シテ本年春以来休会中ナルモ洪国議
 会ハ会々開会中ニシテ下院ニ於テハ各政党側ヨリ奥洪国政
 府カ此際執ルヘキ措置ニ関シ各種ノ質問続出シタルカ首相
 「チツサ」伯ハ之ヲ明言スルヲ避ケ七月二十日ニ至リ奥、
 塞兩國間ノ關係ハ近ク之ヲ闡明解決スルノ必要アルコトヲ
 述ヘ政府ハ先ツ平和的手段ニ依リ事件ノ解決ヲ計ルノ希望
 アルコトヲ告ケタルカ次テ二十三日更ニ質問ニ答ヘテ今ノ
 時機ニ於テ政府ノ態度ヲ言明スルノ國家ニ不利ナルコトヲ
 懇ヘテ其ノ公表ヲナスノ時期ノ遠カラサルコト及目下和戰
 ノ見込同等ナルコトヲ陳ヘテ本件解決ノ機ノ近ク切迫セル
 コトヲ暗示シ形勢ノ転タ緊張セルヲ想ハシメタリ
 七月初旬ニ於テハ奥洪国政府ノ態度頗ル冷静ニシテ皇儲ノ
 宛變ト共ニ還幸セラレタル皇帝ハ七月七日ヲ以テ再ヒ「イ
 シュル」ノ行在所ニ行幸セラレ奥洪各国防大臣及參謀總長
 「コンラード」男等軍事当局ニハ各暑中休暇ヲ賜ハリテ地
 方ニ旅行シタルモノ多ク國論ノ激昂甚タシキニ似ス頗ル緩
 漫ナル形勢ヲ示シ只其間ニ於テ閣議ノ開會、外相ノ「イ
 シュル」謁見、洪国首相ノ再三維納ニ出張セル等少カラス
 世人ノ注意ヲ喚起シタルニ止リシカ其後時日ノ経過ト共ニ

隣友好ノ關係ヲ全ウスルノ必要ナルヲ説キテ塞国ノ反省ヲ
 促シ又塞国新聞ノ擾然タル排奥的論調ニ對シ一々応酬スル
 ノ煩ヲ避ケント欲スルモノノ如シ只二三軍人派ノ機關紙カ
 終始開戦論ヲ主トシテ政府当局ノ態度ノ曖昧因循ナルヲ攻
 撃シツツアルハ奥国新聞中ノ例外ヲナスモノト見ルヘシ
 之ニ反シ洪国新聞ニ至リテハ極テ露骨ニ塞国上下ノ態度ヲ
 攻撃シ其不遜ナルヲ責メテ對塞国積年ノ憂患ヲ此際一挙ニ
 払拭シ去ル為一戰ノ必要ナルヲ論スルモノ多ク近年軍備擴
 張ニ依リ洪国財政ノ困難、商工業界ノ不振等其源ノ悉ク巴
 爾幹殊ニ對塞国關係ノ円滑ナラサルニ胚胎スルヲ説キテ一
 度實力ニ依リ塞国ヲ圧伏シ長期ノ平和ヲ謳歌スルノ日ノ近
 カランコトヲ希望シツツアリ

三、塞国政府ノ態度及輿論

奥洪国ノ國論カ沸騰シテ一齊ニ塞国カ排奥主義、大塞爾比
 主義ノ運動ヲ看過シ動々モスレハ之ヲ助長セント企ツル形
 跡アルヲ非難シ其結果ノ及フ所終ニ今回ノ重大事件ヲ突発
 スルニ至ラシメシ塞国ノ非違ヲ鳴シツツアルニ對シ塞国政
 府ノ態度ハ頗ル冷淡ニシテ奥洪国ノ圧迫ノ早晚来ルヘキヲ
 予期シツツアル如キモ國交ノ紛糾ニ就キ何等介意スル所ナ
 ク只管国内ノ政争ニ忙殺セラレツツアル觀ヲ示セリ而シテ

上述洪国首相ノ言明ノ如ク形勢ノ險惡ナルヲ示スニ至レ
 リ
 暗殺ノ事變ニ当然伴フヘキ「ボ」「ヘ」兩州ノ行政組織ヲ
 改革シテ排奥運動ヲ抑圧スルコト及二州行政当局者ノ更迭
 等ニ関シテハ中央政府ニ於テ未タ何等ノ成案ナキモノノ如
 ク徐ニ措置ヲ講シテ善後ノ計ヲ匝ラサント期スルモノノ如
 ク察セラレ
 「サラエボ」事件ノ突発ト共ニ奥洪兩國ニ於ケル國論ノ沸
 騰ハ其ノ極度ニ達シ政府ノ態度ノ緩漫ナルヲ責ムルノ声高
 ク加フルニ塞国ノ輿論カ滔々トシテ排奥的傾向ヲ帶ヘルニ
 驅ラレテ奥洪国新聞ノ論調ハ頗ル過激ニ亘リ塞国新聞ノ奥
 洪国攻撃ニ熱心応酬シ同國文明ノ程度低クシテ政治上ノ陰
 謀絶ユルノ時ナク且ツ大塞爾比主義ノ如キ妄想ヲ濫ニ鼓吹
 シテ隣邦ノ治安ヲ紊ラントスルノ傾向アルヲ激烈ニ攻撃シ
 歐洲禍乱ノ淵源ノ塞国ニ存スルコトヲ指摘シテ頗ル猛烈ナ
 ル論調ヲ弄シタリ然ルニ時日ノ経過ト共ニ奥国ノ新聞ハ官
 憲ノ注意ニ依リ漸ク論鋒ヲ一転シテ一齊ニ稍冷静ナル態
 度ヲ以テ奥塞兩國間ノ惡關係ヲ一掃シ多年ノ確執ヲ闡明解
 決スルノ必要アルコトヲ論シ「サラエボ」事件取調ノ終結
 ト共ニ提出セラレヘキ奥洪国ノ何等要求ヲ速ニ容諾シテ善

政府筋ノ言論ハ常ニ奥洪国ノ輿論ヲ激発セシムルニ足ルヘ
 キ過激ノ傾向ヲ帶ヒ責任アル官吏ニシテ暗殺事件ヲ是認セ
 ント欲スルカ如キ口吻ヲ洩スモノアリ其ノ最モ著シク奥洪
 国ノ上下ヲ痛憤セシメタルモノハ塞国首相「パシッチ」カ
 独国新聞「ライプチゲル・ノイエステ・ナハリヒテン」ノ
 一通信員ニ對シテ試ミタル談話ナリトシテ同紙（七月十七
 日）ニ掲ケタル所ニシテ同首相ハ奥洪国ノ言論カ一齊ニ塞
 国政府ノ秘密結社、排奥主義者等ヲ取締ラサルヲ攻撃セル
 ノ理由ナキヲ論シテ其ノ当局カ国外ノ民族ニ對シ注意ヲ加
 フルノ違ナキコトヲ説キ在洪国塞爾比民族ノ虐待ハ既ニ何
 等痛痒ヲ感セサル程聞クニ狂レタルモノニシテ塞国政府ハ
 今次ノ對皇儲陰謀ニ加担セルモノニ非サルモ時代カ塞国ニ
 有利ナル様進行シツツアルヲ知ルト論シテ暗ニ「サラエ
 ボ」ノ兇行ヲ是認シ其ノ塞国ノ為ニ有利ナリシコトヲ諷示
 シタリ右首相ノ談話ナルモノハ数日後ニ至リテ訂正セラレ
 タルモ為ニ塞国政府ニ誠意ナキ徵証ナリトシテ頗ル奥洪国
 ニ惡感ヲ与ヘタルハ事實ニシテ塞国政府機關紙其他各新聞
 ノ論調ノ過激ナルコトト競合シテ一層奥洪国ノ輿論ヲ激昂
 セシメタリ塞国政府ノ態度上述ノ如ク冷淡ニシテ動々モス
 レハ國論ヲ煽揚シテ其ノ排奥熱ヲ一層昂進セシメントスル

傾向アルト共ニ塞国一般ノ輿論モ亦頗ル不謹慎ニシテ各新聞ノ如キモ其ノ所屬ノ如何ヲ問ハス挙テ塊洪国ニ論鋒ヲ向ケ二三兇漢ヲ出セル為ニ二州ニ在ル無辜ノ塞爾比亜民族ヲシテ暴民ノ迫害ヲ被ラシメ官憲ノ無能ナル為一時無警察ノ状態ニ陥レルヲ非難シ其ノ排塊の論調ハ時ト共ニ激烈ニシテ塊洪国ノ老大為スナキヲ嘲リ其ノ綱紀ノ弛廢シテ亡國ニ瀕スルノ状アルヲ指斥シ甚シキハ塊洪国皇室ノ内事ニ涉ルコト迄指摘シ官憲ノ取締ノ寛ナルニ乘シテ塊洪国ニ對スル極度ノ誹謗罵詈ヲ試ミタリ

政府機関紙「ストウルズ」ハ一度国内新聞ニ警告シテ徒ニ悪声ヲ放ツノ害多クシテ塞国ノ地位ヲ困難ナラシムルニ過キサルヲ説キタルモ何等ノ反響ヲ見ス其過激極端ナル排塊の論調ハ時日ノ経過ト共ニ毫モ減退セサル有様ナリ

四、列国ノ態度及輿論

塊洪国皇儲ノ薨去ニ對シテハ列強共ニ深甚ナル同情ヲ表シ一齊ニ塊洪国皇室ノ一大不祥事ナリトシテ哀悼ノ誠意ヲ披瀝シタルモ本事件ニ伴フ政治的關係ニ至リテハ利害ノ異ル所列強ノ立場モ亦スシモ同シカラサルモノアリ、独国ニ至リテハ同盟ノ關係上塊洪国ノ立場ニ同情シ其ノ早晚塞国ニ對シ執ルヘキ措置ニ對シ精神上ノ援助ヲ辞セサルノ態度

ノ希望ヲ容認スヘキモ若シ塞国ノ内政ニ干渉シ又ハ其ノ獨立ヲ毀損スルカ如キ態度アルニ於テハ直ニ相当ノ行動ニ出ツヘキコトヲ留保スル旨ヲ機関紙ヲシテ發表セシメ暗ニ塞国ヲ庇護セント欲スル色アリ随テ塊洪国ノ行動ニシテ塞国ヲ圧迫シ其ノ獨立ヲ毀損セントスルノ嫌アルニ於テハ露国ノ行動ハ未タ今日ニ於テ容易ニ測知スヘカラサルモノアリテ塊塞兩國ノ關係ハ一転シテ塊露ノ交渉ヲ喚起シ終ニハ全歐ノ治平ヲ危クスルニ至ルノ懸念ナシトイフヘカラス

仏国ニ至リテハ其ノ態度未タ容易ニ判知シ難キモノアルモ新聞ノ論調ハ稍激烈ニ塊洪国ヲ非難シ正ニ露国ノ言ハント欲スル所ヲ言ハントスルノ色アリ

三国協商国中英二至リテハ露国又ハ仏国ト其趣ヲ異ニシ誠実ニ歐洲ノ平和ヲ冀望シ常ニ穩健ナル態度ヲ以テ均勢ノ維持ニ努ムルノ方針ヲ有スルコトハ巴爾幹戰爭ノ終始ヲ通シテ渝ラサリシ所ニシテ今次ト雖モ右ノ方針ヲ異ニスヘキ理由ヲ見サルヲ以テ若シ今後形勢ノ転向スル所塊塞兩國間ノ確執ニ止ラス延テ塊獨對塞露四國間ノ葛藤トナルニ於テハ均勢維持ヲ標榜シテ其間ニ斡旋スルノ舉ニ出ツヘキコト之ヲ疑フニ余地ナシ英國政府ノ機関紙ト目スヘキ「ウェストミンスター・ガゼット」紙(七月十七日)ハ塊洪国カ

ヲ示サントスルモノノ如ク殊ニ独国政府ノ機関紙北独日報カ七月十九日ノ週報ニ於テ塊洪国ノ要求ニ對シ塞国ノ急速ニ讓歩シテ重大ナル事態ノ發生ヲ防止センコトヲ切望スル旨ヲ述ヘ歐洲全局ノ利益ハ塊塞兩國間ノ葛藤ノ地方的ニ局限セラレシコトヲ要望スルモノナリト論セル如キハ本件ニ對スル独国政府ノ意思ヲ反映セルモノト見ルヘク即チ塊洪国ニ對シテハ同盟国トシテ絶対ノ精神的援助ヲ与フルト共ニ第三国ノ来リテ此ノ葛藤ニ容嘴シ事端ヲ滋クスルノ危険ヲ説キテ之ヲ兩國間ニ局限スルノ意ヲ洩シテ暗ニ露国ヲ牽制シテ塊洪国ヲシテ其ノ欲スル所ヲ行ハシメント欲スルノ念アルコトヲ示スモノト見ルヘク随テ同紙ノ所論ハ同盟国ノ友誼ノ表徴ナリトシテ頗ル塊洪国ニ好感ヲ与ヘタリ

將タ伊国ニ至リテモ本件ニ直接ノ關係ナキモ塊洪国側ニ立チテ無形ノ援助ヲ与フルニ吝ナラサルヘキヲ示シ新聞論調ノ如キモ極メテ塊洪国ニ有利ナル傾向ヲ示シツツアリ

三国同盟側ノ態度右ノ如クナルニ對シ三国協商國殊ニ塞国ト因縁淺カラサル露国ハ陽ニ塊洪国ノ立場ヲ是認シ傍觀ノ態度ヲ裝フモ塞国ノ屈伏ハ同時ニ巴爾幹ニ於ケル「スラブ」族ノ太宗タル露国ノ勢力ニ對スル打擊タルヲ以テ常ニ深甚ナル注意ヲ以テ塊洪国ノ行動ヲ監視シ或程度迄塊洪国

塞国トノ關係ヲ闡明センカ為何等要求ヲナスヘキコトヲ是認シ塞国ハ須ク塊洪国ノ求ムル所ヲ諒トシテ之ヲ容ルルニ吝ナラサルヘキ必要アルヲ説キ露国カ塞国ヲ庇護シテ到底保持シ難キ態度ヲ固執セシムヘキ何等正当ナル理由ナキコトヲ論セリ、而シテ同時ニ独国ハ必スヤ独逸「スラブ」兩族ノ衝突ヲ防止スルニ全力ヲ傾注スヘキヲ以テ事件ヲ塊塞兩國間ニ局限セントスル協同的斡旋ヲ試ムルノ日アルヘシト説キテ暗ニ塊洪国ヲシテ其ノ欲スル所ヲ行ハシムルト共ニ露国ノ之ニ容嘴スルヲ独国ト共ニ阻止セント欲スルモノノ如シ其他「タイムズ」紙ハ塊洪国ノ同盟国カ同國ノ要求ノ妥当ナルヘキコトヲ之ニ忠告スルノ必要アルト共ニ三国協商国ハ露国ト密接ナル關係ニ立ツ塞国ヲシテ塊洪国ノ妥当ナル要求ヲ充分公正ニ満足セシムヘキコトヲ勸告スルノ義務アリト説キ「デーリー・グラフィック」モ亦塊洪国ニシテ塞国ヲ膺懲セント企ツルトキハ露国ト雖モ晏如タル能ハサルヘシ然レトモ塞国ハ単ニ露国ニ恃ム所アリテ其ノ挑発的行動ヲ敢テスルモノニシテ露国ノ一警語ハ克ク戰禍ヲ除去シ得ヘシト論シ共ニ露国ニ依リテ塞国ヲ屈セシメント期スルモノノ如シ

八 七月二十五日 在露国本野大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

埃洪国ノ对塞国最後通牒交付ト露国ノ態度ニ関
スル件

第三八七号

埃洪国皇太子暗殺ノ共謀者タル塞爾比人ノ処分ニ関シ埃国
ヨリ塞爾比国ニ対シ嚴重掛合タルモ今日ニ至ル迄塞爾比国
ニ於テ何等埃国ニ満足ヲ与フヘキ手段ヲ執ラサリシヲ以テ
埃国ハ七月二十三日「アルテマタム」ヲ塞爾比ニ交付シ四
十八時間ヲ期シテ回答ヲ求メタル所右ニ関シ露国政府ハ七
月二十五日公報ヲ以テ露国政府ハ本件ニ付頗ル憂慮シ其
成行ニ注意ヲ怠ラサルト同時ニ埃国塞爾比衝突ノ場合ニハ
露国ハ之ヲ傍觀スル能ハサル旨声明セリ又本件ニ関スル当
国新聞紙ノ所報ニ依レハ七月二十四日ノ閣議ノ結果露国ハ
未タ前記埃洪国ノ「アルテマタム」ノ内容ヲ詳カニセサル
ヲ以テ塞爾比国ノ回答期延期方ヲ埃洪国ニ申込タル由ナ
リ

一〇 七月二十五日 在埃洪国西臨時代理大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

埃洪国ノ对塞国国交断絶ニ関スル件

第五七号

往電第五六号ニ関シ公報ニ依レハ塞爾比政府ハ七月二十五
日午後六時回答期限前ニ埃洪国政府ノ不充分ナリト認ムル
回答ヲ与ヘタルニ付在塞爾比公使ハ直ニ同国ヲ引揚ケ塞爾
比国王政府ハ首府ヲ去リ且ツ全軍ニ対スル動員令ヲ發セ
リ

一一 七月二十六日 在露国本野大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

埃塞两国關係ニ対スル歐洲各国ノ態度ニ関スル

件

第三九一号

往電第三八七号ニ関シ七月二十六日在露国大使田付ニ語
ル所左ノ如シ
本件事態ハ頗ル重大ニシテ露埃開戦ハ延イテ全歐洲ニ互リ
開戦ノ虞ナントセス尤独逸国ノ本件ニ対スル態度如何ニ依
リテハ全歐洲開戦ノ不幸ヲ避クルコトヲ得ヘシト考ヘラル

九 七月二十五日 在埃洪国西臨時代理大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

埃洪国ノ对塞国最後通牒交付ノ件

第五六号

埃国皇儲暗殺ニ関スル犯罪調査進行ト共ニ陰謀ガ塞爾比一
部人士ノ計画ニ成レルコト判明セシヲ以テ埃洪国ハ七月二
十三日午後六時塞爾比ニ対シ同国政府カ各種ノ排埃運動ヲ
認容シタル事実ヲ挙ケテ国内ノ排埃運動ヲ容認セス之ヲ抑
圧スヘキ旨ノ政府ノ保証ヲ与フルコト其他今回ノ陰謀ノ加
担者ノ逮捕及ヒ処罰等十一條ノ要求ヲ提出シ其最後通牒タ
ルヘキ意味ヲ以テ之ニ四十八時間ノ回答期限ヲ付セリ右ニ
対スル塞爾比ノ態度ハ未タ明カナラサルモ露国ハ本件ノ發
展ニ注意スルモノニシテ「インディフェレント」ノ地位ニ
止マルヲ得ザルコトヲ声明セリ尚埃国政府ハ在塞爾比公使
ニ右期限迄ニ要求ニ応セサル場合ニハ直ニ同国ヲ引揚クヘ
キコトヲ命セリ

露国ハ今ヤ埃国動員ノ場合ニハ直ニ露埃国境ニ十四個師団
ノ動員ヲ命スヘク決心セリ露埃開戦ノ場合ハ無論露国
ニ与スヘキモ英国ノ態度ニ至リテハ未タ之ヲ詳カニセス又
伊国ハ此際埃国ヲ援ケ得ヘシトハ信セラレス現ニ埃国力最
後通牒ヲ發シタル前ニ其ノ内議ニ与リタルハ独逸国丈ニ
シテ伊国ハ毫モ与リ知ラサリシト云フ事態頗ル切迫セリト
雖モ未タ全ク平和維持ノ望ナキニ非ラス左レハ目下折角露
国駐劄伊国大使ト協心熟議ヲ重ネ専心平和ノ維持ニ尽力シ
ツツアル次第ナリ尤モ埃塞两国外交官ヲ引揚ゲタリト雖モ
平和ニ関スル協議進行中ハ決シテ開戦ノ不幸ヲ見ルニ至ラ
サルヘシト思考ス

一二 七月二十六日 在独国船越臨時代理大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

埃塞两国關係ニ対スル独国ノ態度ニ関スル件

第七七号

埃塞两国外交關係愈々七月二十五日ヲ以テ断絶スルニ至リ
タル処本件ハ第三国ノ態度如何ニ依リテハ独逸国モ同盟關
係上傍觀ノ態度ヲ執ル能ハサルヲ以テ或ハ全歐ノ紛糾ヲ誘
致スルニ至ランモ計リ難キモ独逸国政府ニ於テハ当初ヨリ

本件ヲ埃塞兩國間ニ局限セントノ意嚮ヲ有シ今日尚極力右ノ方針ヲ採リツツアルモノノ如ク過日外務次官ニ面会ノ際同官亦同様ノ意見ヲ洩ラシ居リタリ又七月二十五日露国代理大使ニ面会露国ノ態度ニ関シ意見ヲ叩キタルニ同官ハ言フ埃露間直接交渉ニ託シテ何等意見ヲ述フルコトヲ避ケタリ要スルニ独逸国今後ノ態度ハ露国ノ態度如何ニ依リテ決セラルルモノト觀察セラル尚ホ埃国塞爾比国交ノ断絶ハ当地一般ニ甚大ナル印象ヲ与ヘ二十五日夜右報道当地ニ達スルヤ同盟国ニ声援セントスルノ群衆ノ示威運動到ル処ニ行ハレタリ

一三 七月二十八日 在露国本野大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

埃「塞」兩國關係ニ対スル歐洲各国ノ態度ニ関スル露国外相及在露仏国大使ノ観測報告ノ件

第三九三号

本官七月二十七日外務大臣ニ面会往電第三九一号ノ件ニ関シ昨今ノ成行ヲ質問シタルニ同大臣ハ大要左ノ如ク内話アリ

ヲシテ之ニ当ラシメントノ議アリタレトモ其後英伊兩國ヲシテ之ヲ為サシメントノ議起リタリ然レトモ兩案共ニ成立セス今ヤ英独仏伊四國ヲシテ相提携シテ事ニ当ラシメントスル議アリ是亦未タ決定スルニ至ラス然レトモ七月二十六日以来一般ニ稍平和ニ至ルヘシトノ希望ヲ生スルニ至リタルハ事實ニシテ其此ニ至リタル所以ハ全ク独逸国ノ態度カ七月二十六日以来稍平和ニ傾キタル模様アルニ起因セスハアラス而シテ右独逸国ノ態度ノ一変セルハ又本件ニ対スル英露仏ノ三國ノ態度ノ強硬ナリシコトニ依ラスハアラス駐露仏国大使ノ説ニ依レハ英國ハ七月二十六日以来万一開戦ノ場合単ニ中立國トシテ傍觀者ノ位置ニ立ツコトヲ得サルヘキヲ独逸國ニ了解セシメタリトノコトナリ日本官露國駐劄英國大使ニ面晤ノ節同大使ノ談話ニ依リ得タル印象ニ依レハ英國外務大臣ハ此点ニ付英國駐劄獨逸國大使ニ對シ確カニ何カ明言シタルコトアルヘシト察セラル本官ハ又露國駐劄伊國大使其他数人ト談話ヲ交換シタルカ今日ノ所ニ於テハ先ツ一般ニ平和ニ帰スヘシトノ印象ヲ有スルモノノ如シ

昨二十六日以来平和ノ期待ハ稍有望トナレリ埃洪國ノ塞爾比ニ對スル要求ハ過大モ亦甚ダシ之ニ對スル塞爾比ノ回答ハ頗ル穩當ナリト思考セラル然ルニ埃洪國ハ之ニ満足セスト云フハ本大臣ノ了解ニ苦シム所ナリ埃洪國ニシテ若シ兵力ニ依リ本件ヲ解決セント欲セハ露國ハ之ヲ傍觀スルコト能ハス何トナレハ塞爾比ノ敗北ハ巴爾幹半島ノ均衡ヲ埃洪國ノ利益ノ為ニ破壞スルモノナレハナリ故ニ露國ハ之ニ応スルニ確乎タル決心ヲ有シ之ニ処スルニ十分ノ処置ヲ執リツツアリ乍併露國ハ飽迄平和ノ解決ヲ望ミ之ニ對シテハ如何ナル提議ニモ耳ヲ傾クルニ吝ナラサルヘシ伊國ハ初ヨリ戰意ナシ露國駐劄獨逸國大使カ本大臣ニ明言セル所ニ依レハ独逸國モ亦大イニ平和ヲ希望スルモノノ如シ本大臣ハ七月二十六日露國駐劄埃國大使ト会见セシカ其結果何等危険ノ感ヲ懷カシメス寧ロ埃洪國モ亦強テ戰爭ヲ欲スルモノニアラサルカ如キ感ヲ懷カシメタリ然レトモ其真意ハ未タ確カナラス

一四 七月二十八日 在伊國林大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

時局ニ関スル伊國外相ノ内話報告ノ件

第四号

(前略)

時局ニ関シ英國外務大臣ノ主張ニ係ハル直接ノ關係國ヲ除キ英仏独伊國ニ於テ平和解決ノ途ヲ講スルノ件ハ伊國ニ於テモ頻リニ主張スル所アリ独逸國政府モ遂ニ其主張ニ同意スル旨内話アリタリ

一五 七月二十八日 在白國山中臨時代理公使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

埃「セルビヤ」間事件ニ對スル白國ノ態度ニ関スル件

第二一号

埃國塞爾比國交断絶事件ハ當國ニ於テモ甚大ノ影響ヲ及ホシ延イテ独仏間ノ戰爭ニ至ラスヤトノ心配ヨリ人心恟々昨二十七日取引所ハ立会ヲ停止シ陸軍ニ於テモ万一ノ場合ニ備ヘンカ為機動演習ヲ中止シ士官ノ休暇ヲ廢止シ又市會ハ時局ノ平和的解決ヲ希望スル旨決議シタリ新聞論調ハ一

般ニ埃国ノ横暴ヲ憤リ平和ノ為独逸国皇帝ノ斡旋ヲ希望シ
已ムナク歐洲戦争ニ立至ラハ英国カ中立ノ地位ニ立チテ白
国ノ中立ヲ擁護スルコトヲ希望セリ御参考迄

一六 七月二十八日 在英國井上大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

埃「セルビア」間問題解決案ニ関スル英國外務
大臣ノ答弁ニ関スル件

第一〇三号

埃国对塞爾比問題ニ関シ七月二十七日英國外務大臣ノ下院
ニ於ケル答弁大要左ノ通

先週金曜在英埃国大使ヨリ埃国政府ノ塞爾比ニ対スル要求
ノ通牒ヲ受ケタリ本件交渉カ埃国ト塞爾比トノ間ニ局限セ
ラルル間ハ吾人ハ干涉ノ限ニアラサルモ一旦埃露間ノ国交
ヲ危フカラシムルニ於テハ歐洲ノ安危ニ懸カル大問題トナ
ルヘケレハ直接關係ナキ英独伊ノ四国ハ解決ニ努ムヘキ
ナリ茲ニ於テ昨日在独伊ノ英國大使ニ対シ夫々任国政府
ニ対シ各自国ノ在英大使ヲシテ本大臣ト共ニ至急倫敦ニ
會議ヲ開キ時局解決ニ努力センコトヲ懇懇シ尚埃露及塞爾

往電一〇三号倫敦會議開催ニ関スル英國政府ノ提議ニ対シ
仏伊兩國政府ハ同意シタルモ独逸国政府ハ右ハ埃国ノ好マ
サル所ナルヘシトテ未タ賛否ヲ言明セス然ルニ其後露都ヨ
リノ内報ニ依レハ露国政府ヨリ露埃間直接交渉ノ提議ヲ埃
国ニ為シタリト信スヘキ理由アルモ埃国力之ヲ応諾スヘキ
ヤ否ヤハ不明ナリ若シ幸ニ利害關係深キ露埃間ノ直接交
渉ニ依リ本件解決ヲ見ルトキハ倫敦會議開催ノ必要ナキハ
勿論ナルカ仮令兩國間ニ交渉開カルルニ至ルトモ埃国力其
ノ終結ヲ待タスシテ塞爾比ニ向ヒ軍事行動ニ出ツルコトナ
キヲ保シ難シ然ル場合ニハ露国ハ埃国ニ対シ干戈ヲ取ルニ
至ル處アリ要スルニ本件解決ニハ目下埃国ノ態度如何ニ懸
ルモノナリト云フヘシ

一八 七月二十八日 在露国本野大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

埃洪国ノ対「セルビア」宣戦布告ノ件

第三九五号

七月二十八日在露国本野大使及塞爾比国公使ニ面会時局ノ發展
ヲ尋ネタルニ昨日ノ情況ニ反シ一同大ニ憂慮ノ模様ニシテ

比駐在ノ独伊使臣ヲシテ夫々任国政府ニ右會議ノ企図ヲ
報シ併セテ其結果ヲ見ル迄何等軍事行動ヲ取ラサル様要求
スヘキ旨訓令セラレタキ様申入レシメタリ未タ何レノ国ヨ
リノ回答ニモ接セサレトモ此際前記四国ノ協同動作ハ最肝
要ナリ埃国ニ与ヘタル塞爾比ノ回答ハ以テ一般ニ承認サレ
得ヘキ解決案ノ基礎ト為シ得ヘキモノト信ス
本問題カ埃国ト塞爾比トノ交渉案件タル性質ヨリ軫シテ他
ノ一強国力關係スルニ至ラバ是レ實ニ歐洲ノ最大危機ニシ
テ其直接間接ノ結果ハ到底予測スヘカラス独逸ハ埃露間ニ
調停ヲ試ムルコト主義トシテ賛同セルカ如キモ這般ノ會議
開催ノ提議ニ対シテハ未タ何等回答ナシ

一七 七月二十八日 在英國井上大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

埃「セルビア」間問題解決ニ関スル英國ノ提議
ニ関シ同国外務次官ト懇談ノ件

第一〇四号

英國外務大臣差支アリタルニ付七月二十八日外務次官「ニ
コルソン」ニ面会現下ノ歐洲時局ニ関シ懇談シタルニ要領
左ノ如シ

異口同音ニ甚タ不安ノ念ヲ懷キ居ルモノノ如ク而シテ其理
由ハ仏伊兩國大使ノ説ニ依レハ独逸兩國カ何分判然ト其意
志ヲ發表セサル為ナリトノコトナリシカ只今(午後八時三
十分)「ノーヴォエ・ヴレーミヤ」ヨリ得タル報告ニ依レ
ハ埃洪国ハ塞爾比国ニ対シテ宣戦布告ヲ為シタリトノコト
ナルカ露国外務省之ヲ確認シタリ

一九 七月二十八日 在独国船越臨時代理大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

英國ノ平和調停ニ関スル提議ニ対スル独国ノ意
向ニ付同国外務大臣ト懇談ノ件

第七九号

往電第七七号ニ関シ七月二十八日外務大臣ニ面会平和調停
ニ関スル英國外務大臣ノ提議ニ対スル独逸国政府ノ意嚮ヲ
問質シタル所大臣ハ当事国ノ依頼ナク第三国ノミニテ何等
協定ヲナシ埃国ニ不利ナル結果ヲ生セシムル如キ調停ハ独
逸国政府ノ好マサル所トノ意見ヲ述ヘタルニ付然ラハ時局
ハ如何ニ成行クヘキヤト重ネテ質問シタルニ目下ノ如何
トモ明言シ難ク只露国ノ態度如何ニ依リテ決セラルト答

ヘタリ尚七月二十七日外務次官ニ面会ノ際同官モ亦露国ニシテ愈々動員ヲ行フニ於テハ独逸モ亦直ニ動員ヲ行フハテ諸般ノ準備悉ク整ヒ居レリト述ヘ居リタリ御参考迄

二〇 七月二十八日 在奥洪国佐藤大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

奥洪国ノ対「セルビヤ」宣戦布告ノ件

第六〇号

奥洪国政府ハ七月二十八日塞爾比ニ対シ宣戦ヲ布告シタリ

二一 七月二十八日 在奥洪国佐藤大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

奥洪国政府ヨリ対「セルビヤ」宣戦通告接受

ノ件

第六一号

往電第六〇号ニ関シ七月二十八日奥洪国政府ヨリ左ノ通過告ニ接セリ

Affaires Etrangères a l'honneur de déclarer que l'Autriche-Hongrie se conformera au cours des hostilités, sous la réserve d'un procédé analogue de la part de la Serbie, aux stipulations des conventions de la Haye du 18 octobre 1907, ainsi qu'à celles de la déclaration de Londres du 26 février 1909. L'Ambassade est priée de vouloir bien communiquer d'urgence la présente notification à son Gouvernement.

(右和訳文)(註 外務本省作成)

口 上 書

塞爾比亞国ニ其ノ基ヲ発シ奥地利洪牙利国ノ領土保全ニ反シテ行ハルル破壊的侵迫ヲ終熄セシムカ為奥地利洪牙利国政府ハ千九百十四年七月二十三日塞爾比亞国ニ対シ要求条項ヲ列記セル公文ヲ致シ之カ承諾ノ為同政府ニ四十八時間ノ猶予期間ヲ与ヘタリ塞爾比亞国政府ハ右公文ニ対シ満足スヘキ回答ヲ与ヘサルヲ以テ奥地利洪牙利国政府ハ自ラ其ノ権利及利益ノ擁護ヲ期スルカ為干戈ニ訴フルノ緊要ナルヲ自覚スルニ至レリ

奥地利洪牙利国ハ開戦ニ関スル千九百十七年十月十八日条約

Note Verbale

Pour mettre fin aux menées subversives partant de Belgrade et dirigées contre l'intégrité territoriale de la Monarchie Austro-Hongroise, le Gouvernement Impérial et Royal a fait parvenir à la date du 23 juillet 1914 au Gouvernement Royal de Serbie une note dans laquelle se trouvait formulée une série de demandes pour l'acceptation desquelles un délai de 48 heures a été accordé au Gouvernement Royal. Le Gouvernement Royal de Serbie n'ayant pas répondu à cette note d'une manière satisfaisante, le Gouvernement Impérial et Royal se trouve dans la nécessité de pourvoir lui-même à la sauvegarde de ses droits et intérêts et de recourir à cet effet à la force des armes.

L'Autriche-Hongrie qui vient d'adresser à la Serbie une déclaration formelle conformément à l'article premier de la convention du 18 octobre 1907 relative à l'ouverture des hostilités se considéré dès lors en état de guerre avec la Serbie. En portant ce qui précède à la connaissance de l'Ambassade Impériale du Japon, le Ministre des

第一条ニ遵ビ正式ノ宣言ヲ塞爾比亞国ニ致シタルニ依リ爾来同国トハ戦争状態ニ在ルモノト認ム茲ニ上記ノ次第ヲ日本帝国大使館ニ通知スルニ際シ奥地利洪牙利国外務大臣ノ抗敵行為ノ行ハルル間奥地利洪牙利国ハ塞爾比亞国ニ於テモ亦同様ノ措置ニ出シキコトノ保留ノ下ニ千九百十七年十月十八日海牙諸条約並千九百九年二月二十五日倫敦宣言ノ諸条項ヲ遵守スヘキ旨ヲ宣言スルノ光榮ヲ有ス

二二 七月二十九日 加藤外務大臣ヨリ
在露国本野大使宛(電報)

奥「セルビヤ」間ノ問題ニ対スル英仏両国ノ態度等ニ付任国政府ニ問合方訓令ノ件

第三〇六号

左ノ通在英大使及在仏大使ニ転電アレ
奥塞問題ニ対スル責任国政府ノ態度及時局今後ノ發展ニ関スル其見込等承知致度ニツキ貴官ハ成ルヘク速ニ外務大臣ニ会見ヲ遂ケラレ右問訊ナシタル上結果電報アリタシ

二三 七月二十九日 在露国本野大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

埃「セルビヤ」兩國間開戦ノ歐洲列強間ニ及ホ
ス影響ニ付テノ情報及観測ニ関スル件

第四〇三号

埃塞兩國開戦ハ歐洲列強間ニ容易ナラサル影響ヲ及ホシ結
局歐洲全体ノ戦争トナルヘク予想セラル本官力只今迄ニ得
タル情報ニ依レハ露国ハ勿論戦争ニ参加セサルヲ得サルヘ
ク從テ独逸国モ亦埃国援助ノ為ニ参加スヘキハ必然ノコ
トナルヘシ七月二十八日駐露仏国大使カ本使ニ内話シタル
所ニ依レハ同大使ハ本国政府ノ訓令ニ基キ仏国ハ露国ト全
然其ノ行動ヲ一ニスヘキ旨改メテ声明シタリトノコトナ
レハ独逸国ノ行動如何ニ依リ仏国カ本戦争ニ参加スヘキハ
是亦疑ヲ容レサル所ナルヘク只英伊兩國カ如何ナル態度ヲ
執ルヘキヤハ疑問ナリトス伊国大使ハ七月二十八日本官ノ
問ニ對シ伊国ハ三國同盟条約アルニ拘ハラズ埃国ヲ援助ス
ル義務ナシト云ヘリ伊国政府モ亦同様ノ意見ナルヤ否ヤハ
未タ明言シ難キモ駐露仏国大使カ本官ニ内話シタル所ニ依
レハ千九百二年伊仏協商ノ際仏国政府ハ此点ニ付特ニ伊国
ノ意嚮ヲ探リタルニ独仏戦争ノ場合ニ伊国ハ必スシモ仏
国ヲ攻撃セサルヘカラサル義務ヲ有セサルコト判明セリト

二四 七月二十九日 在露国本野大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

時局解決ニ関スル露国ノ希望ヲ埃国拒絶ノ為露
国動員開始ノ件

第四〇五号

七月二十九日在露英独仏大使等ト会見時局ニ関スル其後ノ
成行大要左ノ如シ

時局解決ヲ埃露国直接協議ニ一任セントスル案ハ露国ノ最
希望スル所ニシテ独逸国モ極力其成功ニ尽力セル由ナルモ
埃国ハ断然之ヲ拒絶シタリ又露国政府ニ達シタル報道ニ依
レハ埃国軍隊ハ既ニ「ベルグラード」ヲ砲撃シ始メタル由
ニシテ露国ハ七月二十九日夜ヨリ埃国国境ニ向ケ十三個師
団(十四ニ非ス)ノ動員ヲ始ムル筈ナリ右動員ニ関シ駐露
独逸国大使ハ頗ル憂慮シ居リタリ

二五 七月二十九日 在英国井上大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

埃国ノ對「セルビヤ」国宣戦布告ニ對スル英国
ノ新聞論調ニ関スル件

第一〇五号

埃国カ宣戦ヲ布告シタルニ付テ当国ノ新聞論調ハ此際国内

ノコトナリ右ノ次第二付伊国ハ或ハ独埃兩國ト其行動ヲ同
シクセサルヤモ計リ難シ英国ノ態度ニ関シテハ英仏大使及
露国外務大臣カ本官ニ内話シタル所ニ依リ判断スレハ英国
モ亦必要ノ場合ニハ露仏兩國ト其行動ヲ一ニスヘシト察セ
ラル駐露仏国大使ノ内話ニ依レハ駐露英国大使ハ七月二十
八日駐露独逸国大使ニ對シ今回ノ事件ニシテ愈々歐洲全体ノ
戦争トナルニ於テハ英国ハ活動的行動ヲ執ルノ已ムヲ得
サルニ至ルヘシト声明シタル由ナリ右ノ次第二付埃塞兩國
戦争ハ結局歐洲全体ノ戦争ト変化セサルヲ得サルヘキ傾向
アリ尚今朝駐露仏国大使ニ面会昨日以来ノ成行ヲ尋ネタル
ニ独逸国ノ態度ニ付テハ依然不明ナルモ事態如何ニモ重大
ナルニ付或ハ四國調和策ニ同意スルニ至ルヤモ計リ難ケレ
トモ其望甚タ鮮ナシ英国ノ態度如何ニ就テハ昨(電文不
明)朝更ニ転達セラレタル本国政府ヨリノ報告ニ依レハ英
國ハ断然露仏ト一致ノ行動ニ出ツヘシト声明シタル旨答ヘ
タリ同大使ノ談話ニ依レハ露国ハ本日中ニハ埃国国境ノ動
員ヲ命スヘク又今朝ノ官報ニ依レハ露国政府ハ「フィンラ
ンド」湾内ニ船舶ノ通航ヲ禁シ燈台燈火ヲ滅シ西部国境及
「フィンランド」湾上ニ飛行機ノ飛行ヲ禁シタリ

ノ党派的政争ヲ捨テ置キ舉國一致ノ態度ニ出ヅヘキヲ慫慂
シ英国ハ戦争ノ区域ヲ局限スルニ努力スヘキコトヲ唱ヘ反
對党新聞ノ如キモ異口同音ニ外務大臣ノ議會演説ノ趣旨ニ
賛成ヲ表シ殊ニ七月二十九日「タイムズ」ハ大要左ノ論説
ヲ掲ケ居レリ

英国政府及人民ハ歐洲戦争ノ全世界ニ對スル影響(脱?)
及平和維持ノ的確唯一ノ方法ハ若シ友邦ニシテ戦争ヲ余儀
ナクセラレタル場合ニハ英国ハ極力之ヲ援助スヘキ旨ヲ周
知セシムニアルコトヲ了知セリ吾人ハ何等利己心アルニア
ラス吾人ハ埃国塞爾比間ノ争公正ナルヲ欲スルノ外何等直
接ノ利害關係ナシ歐洲ニ於ケル勢力ノ均衡ヲ保ツコトハ英
國ノ国是ナリ之カ為ニハ吾人ハ仏國ト提携シ又仏國及其同
盟國ト更ニ擴張セラレタル提携ヲ為セリ今般如何ナル事
態ノ發生スルトモ吾人ハ過去同様此ノ提携ヲ維持スヘシ吾
人ハ又歐洲諸國ノ政府及人民ノ被ルヘキ慘禍ヲ避ケンカ為
ニハ如何ナル尽力ヲモ厭フ所ニアラス若シ此等ノ努力ニシ
テ無効ニ帰スル曉ニハ英国ハ友邦ト行動ヲ共ニスヘシ

二六 七月二十九日 在英國井上大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

時局ニ対スル英國ノ態度ニ関スル同國總理大臣
ノ議會答弁ニ関スル件

第一〇六号

總理大臣ハ下院ニ於ケル質問ニ対シ墺國開戦ノ宣言ノ為時
局ハ最モ險惡トナリタルカ英國政府ハ戰鬪区域ヲ局限セシ
カ為尚怠ラス全力ヲ竭シツツアル旨ヲ述ヘタリ

二七 七月三十日 在露國本野大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

露國ノ陸海軍動員令ニ関スル件

第四〇九号

露國ハ昨二十九日陸海軍ノ一部ニ動員令ヲ下シ Moscow,
Kiew, Kazan, Odessa 諸軍管ニ動員ヲ行ヒタリ

二八 七月三十日 在仏國石井大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

歐洲ノ戰爭不可避ナル旨報告ノ件

第二二三号

仏國政府当局ノ本使ニ内話スル所ニ依レハ時局益々切迫シ

三〇 七月三十日 在英國井上大使ヨリ
加藤外務大臣宛

墺塞間事件ニ対スル英國ノ態度ニ付同国外相ノ
為シタル議會答弁ニ関スル件

附屬書 英國外務大臣ノ右議會答弁全文

(九月七日接受)

政公第一四六号

大正三年七月三十日 在英

特命全權大使 井上勝之助(印)

外務大臣男爵 加藤高明殿

墺國対「セルビア」事件ニ関シ七月二十七日議員ノ質問ニ
対スル英國外務大臣ノ議會ニ於ケル答弁ハ往電第二〇三号
ヲ以テ又同二十九日總理大臣ノ議會ニ於ケル答弁ハ往電第
一〇六号ヲ以テ夫々報告致置候処右答弁全文爰ニ供貴覽候
敬具

(附屬書)

墺塞間事件ニ対スル英國ノ態度ニ付同国外相ノ為シタル議
會答弁全文

テ平和ノ望ミ殆ト絶エ一般戰爭到底避ケ難キカ如シ委細後
電

二九 七月三十日 在本邦墺國大使ヨリ
加藤外務大臣宛

墺國ノ対「セルビア」國開戦ニ関シ通告ノ件

No. 608.

Tokio, le 30 juillet 1914.

J'ai l'honneur de porter à la connaissance de
Votre Excellence qu'à partir du 28 de ce mois
l'Autriche-Hongrie est entrée en état de guerre avec
la Serbie.

L'Allemagne s'est chargée de la protection des
ressortissants autrichiens et hongrois en Serbie
tandis que la protection des sujets serbes en Au-
triche-Hongrie a été confiée à la Russie.

Veillez agréer etc., etc., etc.
Lad. Müller

PARLIAMENTARY DEBATES
HOUSE OF COMMONS

Monday, 27th July, 1914.

AUSTRIA AND SERBIA.

Mr. BONAR LAW: I rise to ask the Foreign
Secretary a question of which I have given him no-
tice: whether he would communicate any informa-
tion to the House as to the situation which exists
between Austria and Serbia?

The SECRETARY OF STATE FOR FOREIGN
AFFAIRS (Sir E. Grey): The House will, of
course, be aware through the public Press of what
the nature of the situation in Europe is at this mo-
ment. I think that it is due to the House that I
should give in short narrative form the position
which His Majesty's Government have so far taken
up.

Last Friday morning I received from the Austro-
Hungarian Ambassador the text of the communica-
tion made by the Austro-Hungarian Government to
the Powers, which has appeared in the Press, and

which included textually the demand made by the Austro-Hungarian Government upon Servia.

In the afternoon I saw other Ambassadors, and expressed the view that, as long as the dispute was one between Austria-Hungary and Servia alone, I felt that we had no title to interfere, but that, if the relations between Austria-Hungary and Russia became threatening, the question would then be one of the peace of Europe: a matter that concerned us all.

I did not then know what view the Russian Government had taken of the situation, and without knowing how things were likely to develop I could not make any immediate proposition; but I said that, if relations between Austria-Hungary and Russia, did become threatening, the only chance of peace appeared to me to be that the four Powers—Germany, France, Italy, and Great Britain, who were not directly interested in the Servian question—should work together both in St. Petersburg and Vienna simultaneously to get both Austria-Hungary and Russia to suspend military operations while the four Powers endeavoured to arrange a

crisis so grave as this, the efforts of one Power alone to preserve the peace must be quite ineffective.

The time allowed in this matter has been so short that I have had to take the risk of making a proposal without the usual preliminary steps of trying to ascertain whether it would be well received. But, where matters are so grave and the time so short, the risk of proposing something that is unwelcome or ineffective cannot be avoided. I cannot but feel, however, assuming that the text of the Servian reply as published this morning in the Press is accurate, as I believe it to be, that it should at least provide a basis on which a friendly and impartial group of Powers, including Powers who are equally in the confidence of Austria-Hungary and of Russia, should be able to arrange a settlement that would be generally acceptable.

It must be obvious to any person who reflects upon the situation that the moment the dispute ceases to be one between Austria-Hungary and Servia and becomes one in which another Great Power is involved, it can but end in the greatest catastrophe that has ever befallen the Continent of

settlement.

After I had heard that Austria-Hungary had broken off diplomatic relations with Servia, I made by telegraph yesterday afternoon the following proposal, as a practical method of applying the views that I had already expressed:—

I instructed His Majesty's Ambassadors in Paris, Berlin, and Rome to ask the Governments to which they were accredited whether they would be willing to arrange that the French, German, and Italian Ambassadors in London should meet me in a Conference to be held in London immediately to endeavour to find a means of arranging the present difficulties. At the same time, I instructed His Majesty's Ambassadors to ask those Governments to authorise their representatives in Vienna, St. Petersburg, and Belgrade to inform the Governments there of the proposed Conference, and to ask them to suspend all active military operations pending the result of the Conference.

To that I have not yet received complete replies, and it is, of course, a proposal in which the co-operation of all our Powers is essential. In a

Europe at one blow: no one can say what would be the limit of the issues that might be raised by such a conflict, the consequences of it, direct and indirect would be incalculable.

Mr. HARRY LAWSON: May I ask the right hon. Gentleman whether it is true that this morning the German Emperor accepted the principle of mediation which he has propose?

Sir, E. GREY: I understand that the German Government are favourable to the idea of mediation in principle as between Austria-Hungary and Russia, but that as to the particular proposal of applying that principle by means of a Conference which I have described to the House, the reply of the German Government has not yet been received.

二二 七月三十一日 在香港今井總領事ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

香港政庁ノ陸海軍及船舶ニ対スル措置ニ付

報告ノ件

第10号

歐洲不穩ノ為ニ万一ヲ警戒スル目的ヲ見テ当地政庁ノ陸兵

及義勇兵ノ賜暇ヲ取消シ海軍部内ニハ短時間内ニ於テ任務ニ就クヘキ予告ヲ与ヘ又加奈陀太平洋汽船会社 Jardine Matheson 何故カハ知ラサレトモ船舶徴発ノ命ヲ受ケタリ

三二 七月三十一日 在露国本野大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

露国ノ欧露全軍団動員ニ関スル件

第四一六号

確ナル筋ヨリ聞ク所ニ依レハ露国ハ七月三十日在歐洲全露三十五軍団ノ動員ヲ行ヒタル由

三三 七月三十一日 在中国小幡臨時代理公使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

歐洲危局ニ際シ中国ニ於ケル列国官憲ノ

動靜報告ノ件

第五四二号

歐洲ニ於テ埃塞兩國間ノ紛争ハ遂ニ埃国側ノ宣戰布告トナリ兩國ニ關係ノ各強國間ニモ夫夫戰備ニ汲々タル趣ノ報道

三四 七月三十一日 在仏国石井大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

歐洲戰爭不可避ニ関スル仏国外務当局ノ

内話ニ付報告ノ件

第二四号

大統領總理大臣昨午午後二時帰着後日夜閣議ニテ外務大臣政務通商局長(共ニ閣議ニ出席)ニ面会ヲ得ス同局長カ七月三十日午後六時本使ニ対スル内話ノ要領左ノ如シ

独逸国ハ例ノ反覆常ナキ態度ニ出ツ英國ノ提議ニ対シ初ハ賛同ノ意ヲ仄カシナカラ裏面ハ埃国政府ヲシテ歩武ヲ進メシメ埃国力宣戰ヲ布告シ得ルヲ待テ英國ノ提議ニ応スル能ハサル旨ヲ回答シタリ露国ハ此ノ態度ヲ突止メテ後十三四師団ノ動員ニ決シ其ノ決意ヲ昨七月二十九日正午独逸国其ノ他ニ通告シタル上昨晚愈動員令ヲ発シタリ独逸国ハ本日正午露国政府ニ対シテ「露国ハ如何ナル条件ノ下ニ動員ヲ中止シ交渉ヲ再開スヘキヤ」ト照会シタリ露国政府ハ之ニ向ヒテ未タ回答セサルモ独逸国ノ表裏ヲ看貫キタル露国カ満足ナル回答ヲ為ササルハ勿論其ノ動員ヲ継続スルコトト確信ス左スレハ独逸国モ動員スヘク從テ仏国モ動員スヘシ独逸国ハ昨日露国政府ヨリ動員ノ通告ニ接スルヤ一旦直ニ

ハ頻々トシテ外電ニ依リ当地ニ伝ヘラレ外交団仲間在留外國人間ニハ歐洲ノ時局ニ熱中シ又他事ニ留意セサル有様ノ所歐洲危局ニ対シ今日迄關係各國カ戰備ニ関シ執リタル措置ト認ムヘキハ埃洪国官憲ハ其公使館守備兵ノ大部分ヲ所属軍艦ニ帰還セシメ同時ニ兵役ニ關係アル居留國臣民ニ対シテハ急速本國へ帰還ヲ命シ尚同國軍艦「フランチ、ジョセフ」一世ハ目下青島ニアル由ナルモ其將來ノ行動ハ不明ナリ次ニ露仏独三国官憲モ亦各自國臣民ニ対シ兵役ニ關係アルモノハ予メ帰國ノ準備ヲ整ヘ置クヘキ旨ヲ命令シタリ又漢口ヨリノ路透電報ニ依レハ長江ニ於ケル英國小砲艦ニ対シテハ必要ナル武器ヲ「デスマントル」シ水兵ハ上海ヲ經香港へ急行シタル由ナルモ此報道果シテ事実ナルヤ否ヤ疑ハシキモ昨今威海衛ニ集中シ居リタル英國軍艦ハ已ニ香港へ向ケ出發シタリトノ報アリ独逸國軍艦ハ七月二十七日青島經由來京ノ我海軍武官ノ言フ所ニ依レハ同地ニハ「エムデン」「イルチス」ノ外一隻ノ巡洋艦ハ船渠ニ在リ修理中ノ由ナルモ敢テ戰爭準備ノ為ノ入渠トモ思ハレサリシトノコトナリ

動員ト決シ今朝發令ノ答ニテ御用新聞「ローカル、アンツァイゲル」ハ其ノ第一版ニ於テ之ヲ發表シタルニ急ニ議ヲ變シタリト見エ同新聞ヲ差押ヘタル上前述ノ如ク露國政府ニ向ヒテ交渉ヲ試ミルニ至レリ然レトモ之レ皆遷延策ニ外ナラサルハ露仏ノ熟知スル所ナリ要スルニ戰爭ハ到底避ケ得ヘカラサルニ至レリ否早晚來ラサルヲ得サル戰爭ナル以上ハ之ヲ避クルハ却テ愚ナリ今日之ヲ決行スルニ如カスト思考ス云々本使ヨリ埃國ハ領土の野心ナキ旨ノ保証ヲ露国ニ与ヘタリト云フニアラスヤト問ヘルニ夫レハ事實ナルモ戰爭開始ニ際シ交戰國カ第三國ニ与フル保証ハ毫モ特ムニ足ラスト答ヘタリ更ニ仏國ハ動員ノ準備成レリヤト問ヒタルニ仏國モ独逸國モ準備ハ結了シ居レトモ何レモ開戦ノ責任ヲ避クル為先シテ動員令ヲ発スルヲ差控ユル事情ナリト答フ独逸國政府ヨリ露国ニ交渉ヲ開キタル以上尚多少平和ノ望ナキヤト重ネテ問ヘルニ独逸國ノ術中ニ陥ルカ如キコト万々ナカルヘシト答ヘタリ

三五 七月三十一日 在仏国石井大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

露仏独開戦ノ場合ニ於ケル英国ノ態度ニ関シ
仏国外務当局内話ノ件

第二五号

往電第二四号ニ関シ最後ニ本使ヨリ露仏独開戦ノ場合ニ於ケル英国ノ態度如何アルヘキヤト問ヒタルニ対シ次長ハ躊躇ノ後ニ英国ハ同盟ノ拘束ナキカ故ニ露仏ト同時ニ宣戦ヲ布告セサルヘキモ結局ニ於テノ利害ハ全然露仏ト同一ナルニ付或ル時期ニ至ラハ或ル措置ヲ執ルヘキヲ疑ハスト

三六 七月三十一日 在独国船越臨時代理大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

歐洲ノ形勢急迫ニ関スル独国外務次官ノ観測ニ

関シ報告ノ件

第八〇号

塙塞開戦ノ結果歐洲ノ危機益々切迫セル模様ナルニ付七月三十日外務次官ニ面会意見ヲ叩キタルニ同官ノ談話要領左ノ如シ

七月二十九日露国政府ヨリ塙国々境方面ニ対シ一部ノ動員

ニ関スル経過ヲ問尋ネタルニ同官ハ独国政府ハ今回ノ時局ニ際シ只管歐洲平和ノ維持ヲ希望シ熱心塙露間調停ヲ試ミ居リタルモ露国ハ本日ヲ以テ陸海軍全部ノ動員ヲ決行スルニ至リタルヲ以テ已ムヲ得ス帝国憲法第六十八条ニ依リ本日全国戒嚴令ヲ施行スルニ至リタル次第ナリ右戒嚴令ハ動員ノ前提ニシテ八月一日午前迄ニ全国動員ヲ決行スル管ナリト述ヘタルニ付本官ハ仮令独露動員ヲ行フトモ尚未タ平和ノ望ナキニ非ラスヤト語リタル処同官ハ愈々動員ヲ行ヒタル以上ハ騎虎ノ勢衝突ヲ避クルコト最早不可能ト思考スト答ヘ英国ノ態度ニ関スル本官ノ質問ニ対シテハ同国ハ恐ラク中立ヲ守ルヘシト述ヘ更ニ語ヲ次キテ独国ハ当初ヨリ平和ヲ希望シ且ツ万一ノ場合ニモ開戦ノ責任ヲ取ルコトヲ欲セサリシ処露国力愈々今回ノ処置ニ出テタルヲ以テ遂ニ之ニ応セサルヲ得サルニ至リタリト語り意氣頗ル軒昂タルモノアリタリ

以上ノ如クナルヲ以テ仏露對三国同盟ノ開戦ハ最早避クヘカラサル状態ニ在ルモノノ如クニ思考セラルルカ抑時局ニ関スル三国同盟側ノ態度極メテ強硬ナルモノアルト本官カ屢々政府当局者ニ面会ノ結果得タル印象トヨリ察スルニ今後二年ヲ以テ完成スル露国軍備ノ充実ハ独塊ノ最恐ルル所

ヲ行ヒタル旨ヲ通告シ同時ニ右ハ決シテ独逸国ニ対抗スルノ趣旨ニ出テタルモノニアラサルコトヲ附言シタルニ付独逸国ハ未タ動員ヲ行フニ至ラサルカ露国ノ動員ニ対シ塙国ニ於テハ直ニ全国動員ヲ行フニ至ルヘシ形勢斯ノ如クナルニ付此際英国ニ於テハ露国ヲ併セテ他ノ列強ト共ニ塞爾比ヲ抑ヘテ塙洪国ノ要求ニ從ハシメントスル新提議ヲ出サントスル模様アリ自分ノ見込ニテハ露国ハ或ハ之ニ同意スルヤモ計リ難ク要スルニ目下歐洲ノ形勢ハ頗ル急迫ヲ告ケ和戦ノ決ハ此処数日ヲ出テサルヘキカ若シ平和ノ解決ヲ見サレハ遂ニ歐洲大戦ヲ見ルニ至ルヘシ云々ト語り右ハ日本政府並本官限リノ参考ノ為内話スル次第ナルニ付外部ニ洩レサル様特ト秘密ニセラレタキ旨附言シタリ

右御舍アリタシ

三七 七月三十一日 在独国船越臨時代理大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

独国ノ動員開始ト戦争不可避ニ関シ独国

外務次官内話ノ件

第八一号

往電第八〇号ニ関シ七月三十一日再ヒ外務次官ニ面会時局

ナルヲ以テ彼等ハ今回ノ時局ヲ利用シ以テ露国ニ乘スルノ機会トナサント竊ニ期待シ居ルモノナランカト觀察セラ

三八 八月一日 在独国船越臨時代理大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

独国ノ最後通牒ト右ニ対スル回答時間經過ニ

関スル件

第八二号

往電第八一号ニ関シ独逸国政府ハ七月卅一日午後ヲ以テ露国ニ最後通牒ヲ送り十二時間ヲ期シテ動員ヲ中止シ且ツ動員ニ対スル明確ナル説明ヲ求メタリ該要求ハ蓋シ露国ノ承諾スル能ハサルヲ予期シタルモノニシテ右時間ハ已ニ八月一日午前中ニ経過シタルヲ以テ此上ハ宣戦ノ一段トナル外ナカルヘシ

三九 八月一日 在埃洪国佐藤大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

對塞国宣戦ニ至レル原因ニ関シ埃洪国外相

談話ノ件

第六四号

本使着任挨拶ノ為八月一日外務大臣ニ面会シタル処同大臣
ノ談話要領左ノ如シ

埃洪国ハ多年ノ宿題タル塞爾比問題ヲ機ヲ見テ解決スル希
望ナリシカ Sarajevo 事件其近因トナリ平和的手段尽キテ
開戦ノ必要ヲ見ルニ至レリ然ルニ露国ノ行動余リニ塞爾比
援助ニ傾ケルヲ以テ埃洪国モ遂ニ之ニ対シ必要ノ措置トシ
テ全軍動員ヲ命スルニ至レリ今後ト雖外交手段ニ依リ平和
ノ維持ニ努ムヘキモ万已ムヲ得サルトキハ実力ニ訴フルノ
外ナカルヘシ云々尚外務大臣ハ余談中埃独両国力露国ト開
戦スル咍ニ於テ佻国ノ執ルヘキ態度ハ未タ判明セスト云ヘ
リ

右御参考迄

リ独逸国ハ佻国ニ対シ独露開戦ノ場合ニ於テ中立ヲ守ルヘ
キカニ付其ノ回答ヲ要求シタル趣ニテ佻国カ如何ナル回答
ヲ為シタルカハ知ラサルモ露佻同盟ノ結果トシテ佻国ハ露
国ヲ援助セサルヲ得サルヘシ兎ニ角目下歐洲ノ形勢甚タ險
悪ナリ英國政府ノ態度決定次第帝國政府ニ通知スヘシ

四一 八月二日 在英國井上大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

英國皇帝独露両国皇帝宛御親電發送ノ件

第一一〇号

往電第一〇八号ニ関シ本使ハ最後ニ英國皇帝ハ独露兩皇帝
ニ対シ今朝直接電報ヲ發セラレタルヤノ報アルカ事実ナル
ヤト外務大臣ニ尋ネタルニ右ハ事実ニシテ其目的ハ尚平和
維持ノ為ナリト答ヘラレタリ

四二 八月二日 在佻国石井大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

佻国動員ノ已ムナキ事情ニ関シ同国外務当局ヨ

リ内話ノ件

第二九号

佻国外務省政務通商局長八月二日本使ニ内話セル要領

四〇 八月二日 在英國井上大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

時局ニ対スル英國ノ態度問合ニ対シ同国外相

談話ノ件

第一一〇八号

在露大使宛貴電第三〇六号ニ関シ八月一日英國外務大臣ニ
面会英國政府ノ態度ヲ聞質シタルニ其ノ本官ニ語ル所左
ノ如シ

英國政府ハ未タ時局ニ対スル態度決定シ居ラス又若シ戰爭
ニ加ハルトスルモ英國ハ露国ト行動ヲ共ニスヘキヲ以テ日
英同盟条約ニ影響スル所大ナラサルヘキヲ信シ今日迄何等
帝國政府ニ通知セザリシ次第ナリ独逸国ハ青島ニ小艦隊ヲ
有スルニ過キササルニ付東洋ノ平和ヲ攪乱セラルルノ虞少カ
ルヘシ英國政府ハ日本ヲ除キ何国トモ同盟協約ヲ締結シ
居ラサルニ付英國ハ何国ヲモ援助スルノ義務ヲ負ハス加之
英國政府ハ露佻同盟ノ内容ヲ知ラサルニ付英國ハ其執ルヘ
キ態度ヲ慎重ニ考量セサルヘカラス故ニ局外中立ヲ守ルヘ
キカ又ハ戰鬪ニ加ハルヘキカハ目下ノ処未定ナルモ或ル事
態ノ發生シタル場合ニハ干戈ヲ執ルニ至ルヤモ計リ難シ
即チ独逸国カ白耳義国ノ中立ヲ侵害スル場合ノ如キ是レナ

英國政府七月三十日ノ提議ニ対シ露国モ独国境ノミナラ
ス埃国境ニ対シテモ条件ニ依リテ動員中止ノ意アルヲ示
シ埃国政府モ亦塞爾比ニ対スル要求再考ノ意ヲ表シ茲ニ一
縷ノ望ヲ生シタルニ其夜半独逸國政府ヨリ露國政府ニ対シ
動員中止ノ命令的要求アリタル為平和ノ望全ク絶エ英國皇
帝最後ノ措置素ヨリ効ナク佻国モ茲ニ動員ノ已ムコトナキ
ニ至レリ非常議會ハ八月三日召集セラルヘシ伊国ヨリ中立
ヲ嚴守スヘキ旨埃独ニ通告シタルヲ以テ多少戰局ヲ減縮シ
タルニ相違ナキモ佻国ハ「アルプス」方面ヨリ安心シテ兵
力ヲ転スル能ハス

四三 八月二日 在露国本野大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

埃「セルビヤ」間事件ニ関スル露国ノ外交關係

始末公表ノ件

第四二〇号

露国外務省ハ八月二日官報ヲ以テ埃塞事件ニ関スル外交関
係ノ始末ヲ公ニシタリ其ノ要領左ノ通

露国ハ塞爾比ニ対スル埃洪国ノ行動ヲ控制スルノ目的ヲ以
テ「キエーフ」外三個軍管ノ動員ノ処置ニ出タリシモ埃洪

国ハ毫モ之レニ顧ミス却テ動員ヲ行ヘリ露国ハ右ノ措置ニ出タル趣ヲ独逸ニ通告スルト同時ニ埃洪国ト直接ニ談判シ又ハ英国ノ提議ニ基キ英仏独伊四国会議ニヨリテ時局ノ平和的解決ヲ希望スル旨声明シ且露国ハ之レニ関シ尽力スル所アリタルモ其ノ尽力ハ無効ニ帰シ埃洪国ハ露国トノ談判ヲ拒絶シ独逸モ亦右列国会議ニ加ハルコトヲ否ミタリ然レトモ露国ハ之レニヨリ敢テ失望セス尚平和的解決ノ為ニ其ノ努力ヲ続ケタリ露国ハ如何ナル条件ノ下ニ軍事行動ヲ中止スヘキヤトノ在露独逸大使ノ質問ニ対シ露国ハ埃塞事件ハ歐洲一般ノ問題ナルヲ以テ埃洪国ハ塞爾比国ニ対シ同国ノ主権ヲ侵害スルカ如キ要求ニ出テサルヘキヲ埃洪国カ認識スルヲ以テ条件トスルヲ要スト答ヘタリ然ルニ独逸ハ露国ノ此ノ条件ヲ以テ埃洪国ノタメ同意スヘキモノニアラストナセリ一方ニ於テ埃洪国ニ於ケル全軍動員ノ報ハ聖彼得堡ニ達スルト同時ニ埃洪国ハ遂ニ「ベルグランド」ヲ砲撃シ始メタリ斯クノ如ク露国ノ平和的提議ハ拒絶セララルルニ至リシ結果トシテ露国ハ軍事的措置ヲ拡大スルノ必要ヲ生セリ之レニ関スル独逸ノ質問ニ対シ露国ハ万一ヲ慮リ軍備ヲ為スノ已ムヲ得サルニ至リシモノナリト答ヘタリ露国ハ万一ノ為右ノ措置ニ出タリト雖同時ニ全力ヲ挙ケテ

時局ノ平和的解決ニ尽力シタリ然ルニ七月三十一日独逸政府ハ露国ニ対シ翌八月一日正午迄ニ軍事的動作ヲ中止スルニアラサレハ独逸ハ総動員ヲ行フヘシトノ通告ヲナン次テ八月一日在露独逸大使ハ自国政府ノ名ヲ以テ露国外務大臣ニ宣戦布告セリ

四四 八月三日 在独国船越臨時代理大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

独国ノ対露宣戦ニ関スル件

第八四号 (八月十二日接受)

八月三日外務次官ノ本官ニ語ル処ニ抛レハ独国政府ハ八月一日午後七時ヲ以テ公然露国ニ向ケ宣戦ノ通告ヲ発シ在露大使ハ已ニ任地ヲ発足シ在独露国大使ハ本日当地ヲ引揚クル由尙対露宣戦通告ノ次第ハ已ニ当国政府ヨリ帝国政府ニ通告シタル筈ナリ独仏外交関係ノ断絶ヲ見ルモ遠キニアラサルヘシト思考ス

四五 八月三日 在本邦独国大使ヨリ
加藤外務大臣宛

独露交戦状態通告ノ件

Tokio, den 3. August 1914.

Nr. 43. Herr Minister!

Euerer Exzellenz beehre ich mich im Auftrage meiner Regierung mitzutheilen, dass sich das Deutsche Reich seit dem 1. August mit Russland im Kriegszustand befindet. Genehmigen Sie, Herr Minister, den erneuten Ausdruck meiner ausgezeichnetsten Hochachtung.

V. Rex.

Seiner Exzellenz
dem Kaiserlich Japanischen Minister
der Auswärtigen Angelegenheiten
Herrn Baron Kato.

(右和訳文)(註 日本外務省作成)

以書翰啓上候陳者本使ハ本国政府ノ訓令ニヨリ八月一日以來独逸帝国ハ露国ト交戦状態ニ在ルモノナルコトヲ閣下ニ通報スルノ光栄ヲ有シ候

本使ハ茲ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

一九一四年八月三日東京ニテ

フォン・レックス

四六 八月三日 在露国本野大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

露国対独宣戦布告ノ件

第四二五号

八月二日露国ハ独逸ニ対シ戦争ヲ布告セリ

四七 八月三日 在英国井上大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

時局ニ対スル英国ノ態度ニ関シ英国外務次官

内話ノ件

第一一四号

時局ニ関スル英国政府ノ態度問合ノ為今三日外務次官「ニコルソン」ニ面会(大臣ハ閣議ノ為差支)同氏ノ語ル所ニ依レハ昨夜閣議ニ於テ独逸国ニ取り好マシカラサル決定ヲナスニ至レリ若シ独逸国艦隊カ海峡ヲ出テテ仏国沿岸ヲ攻

撃スル場合ニハ英國艦隊ハ仏國ヲ助ケテ之ヲ防禦スヘク又独逸國カ白耳義國ノ中立ヲ侵害スル場合ニハ英國ハ之ニ応スル措置ヲ執ルヘシ独逸國ハ昨夜白耳義國ニ対シ好意的中立ヲ守リ独逸國軍隊ヲシテ其領土ヲ通過セシムルコトヲ要求シタルモ白耳義國ハ勿論拒絶シタル趣ナリ独逸ハ既ニLiège附近迄進軍セリトノ噂アリ英國政府ノ態度ニ関シテハ本日午後外務大臣ハ議會ニ於テ尚詳細声明スル所アルヘシ

四八 八月三日

在白国山中臨時代理公使ヨリ加藤外務大臣宛(電報)

独国ノ対白最後通牒ト白国ノ拒絶ニ関シ

報告ノ件

第二三号

(八月五日接受)

独仏露交渉破裂以来八月一日仏國公使ハ白耳義國政府ニ対シ白耳義國ノ中立ヲ尊重スヘク但シ若シ他ノ交戦國ニシテ中立ヲ侵ス場合ニハ仏蘭西國ハ自由行動ヲ取ルヘキ旨宣言シ独逸國ノ態度ハ甚タ不明ニシテ八月二十日十萬ノ兵員「ルクセンブルグ」大公國ニ侵入シ其鉄道ヲ占領シ全ク同國ノ

四九 八月三日

在白国山中臨時代理公使ヨリ加藤外務大臣宛(電報)

白国首相ノ白独兩國間危機關係声明ニ関スル件

第二四号

(八月六日接受)

白國ハ八月四日臨時議會ヲ開キ皇帝ハ國家危急ノ際特ニ奉國一致ヲ切望スル旨述ヘラレ次テ首相ハ八月一日ノ独逸ノ最後通牒白國ノ回答及八月四日独逸ノ宣戰ノ回答ヲ朗讀シ且独逸軍ノ既ニ領内ニ侵入セルコトヲ言明シ議會ハ滿場一致軍費ニ億法ノ支出其ノ他ノ諸案ヲ議決セリ独逸ノ最後通牒ハ仏國既ニ白國領土ニ侵入スルノ意志アリ獨逸ニ対スル進撃ナリ白國ニシテ獨軍ノ自由通過ヲ許サハ戰後其ノ獨立ヲ保障スヘク若シ反對ノ態度ニ出ツレハ宣戰スヘシト云フニ在リ之レニ対スル白國ノ回答ハ所謂仏國ノ侵入ノ意志ナルモノナシ素ヨリ白國ハ列國特ニ普魯西王ノ保障セル其ノ中立ノ侵害ニ対シテハ兵力ヲ以テ對抗スヘシ獨逸ノ提議ハ國家ノ名譽ヲ犠牲ニ供スルニアラサレハ承諾シ難キモノナリト拒絶シ獨逸ノ最後回答ハ目下ノ形勢上兵力ヲ以テ必要ナル保障ノ手段ヲ執ルニ至ルヘシト宣言セリ独逸ノ態度右ノ如クナルタメ人心大イニ激昂シ之レニ反シ仏國ハ既ニ中立尊重ノ宣言ヲナシ更ニ中立擁護ノタメ援助スルノ意志

中立ヲ侵シテヨリ白耳義國ハ自國ノ中立侵害ニ対スル防備ヲ益々敵ニシ独逸國ノ行動ヲ待居リタルニ八月二日午後七時突然独逸國公使ハ白耳義國政府ニ対シテ独逸國ノ軍事行動ヲ容易ナラシムル為「アントワープ」ヲ為スコトヲ最後通牒ノ形式ヲ以テ提議シ十二時間内ニ回答ヲ求メタリ依テ白耳義國政府ハ徹夜内閣員政界元老軍事当局者ノ御前會議ヲ開キ八月三日午前六時独逸國公使ニ提議拒絶ノ旨回答シ同時ニ英仏政府ニ右ノ次第ヲ通知シ且ツ白耳義國ハ極力其中立ヲ防護スヘキ旨宣言シタリ風説ニ依レハ英國ハ十萬ノ兵力ヲ「アントワープ」ニ本日中ニ上陸セシメ引續キ今夜五箇師團ノ兵力ヲ派シテ白耳義國ノ中立ヲ擁護スヘシトノコトナリ形勢甚タ切迫シ独逸國カ戰略上先ツ白耳義ヲ侵スヘキコト一般ニ予想セラレ當國カ戰爭ノ渦中ニ陥ルコト明カナリ場合ニ依リテハ當國政府モ「アントワープ」ニ移ルヘク自然公使館モ移転ノ要アルヤ計リ難キヲ以テ御含迄

ヲ宣明セシヲ以テ白人一般ニ親仏ノ念盛ニ同時ニ英國ニ信頼スル念強シ當局者ハ尚獨力敵ニ当ル決心ヲ固持シ千八百九十九年千九百年及本年兵ヲモ召集セントス前電第二三号ノ風説未タ實現セス

五〇 八月三日

在独国船越臨時代理大使ヨリ加藤外務大臣宛(電報)

時局下ノ独国情ニ関スル件

第八五号

(八月十三日接受)

今回ノ時局ニ関シテハ今日迄逐次電報スル所アリシモ元來本件ハ突発事件ニシテ本邦ニ於テモ當國實際ノ情況ヲ判断スル事或ハ困難ト思考スルニ付茲ニ其概要ヲ摘記スレハ一、八月一日動員令下リ二日以来予後備補充兵ハ勿論國民軍ニ至ルマテ全部一時ニ召集セラルルニ至リシヲ以テ到ル処努力不足甚シク方已ムヲ得ス女子ヲ以テ補充シ居ルモノ多シ

一、同時ニ經濟界ハ目下非常ナル恐慌ヲ起シ物貨ノ暴騰紙幣ノ融通ノ困難株式ノ暴落等種々ノ忌ムヘキ現象アリ或ハ一時ノ変体ナルヤモ計ラレサルモ今後ノ發展如何ニ依リテハ更ニ一層ノ不良ノ情況ヲ呈スルニ至ルヘシ

一、外国トノ交通モ露仏兩國ニ対シテハ全部断絶シ当館ト在露大使館トハ勿論本邦ヨリ露国經由ノ通信又不可能トナリ其他隣接国トノ交通又困難トナレリ丁蘭兩國態度如何ニ依リテハ外部トノ交通近日杜絶スルニ至ルヘシ(下略)

五一 八月 四日 在シドニー清水総領事ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

歐洲ノ危局ニ対スル濠洲政府ノ動靜報告ノ件

第一三号

濠洲政府ハ八月三日閣議ニ於テ英国カ戦争ニ参加スル場合ニハ濠洲艦隊ハ之ヲ英国海軍省ノ支配ニ移スヘキコト及英国政府ノ指図ニ從テ聯邦ノ費用ヲ以テ二万ノ遠征軍ヲ提供スルコトヲ決定セル旨ヲ公表セリ尚濠洲艦隊ハ二日以来「シドニー」ニ集中出動準備ヲ整ヘ居リ且市民兵約千人ヲ召集シ当地並東北沿岸ノ要塞ニ補充シツツアリ

五二 八月 四日 在仏国石井大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

独国ノ対仏宣戦通告竝同宣戦理由ヲ仏国
否定ノ件

第三四号 (八月十六日接受)

八月三日午後五時四十五分在仏独逸国大使ハ仏国首相ヲ訪問シ独逸ハ仏国ト戦争状態ニアルモノト思考スル旨ヲ通告シタリ右ニ付政府ハ同大使カ右ノ通告ニ際シ独逸国ヲシテ右ノ決意ヲナスニ至ラシメタル理由トシテ仏国飛行隊ハ独領 Nuremberg ノ上ヲ飛行セル事等ノ事実ヲ指摘シタルモ尽ク虚偽ニ属スル旨ヲ発表セリ独逸国大使ハ同夜十時当地ヲ引揚ケ仏国ニ於ケル独逸ノ利益ハ米国大使之レヲ保護スルコトナレリ

五三 八月 四日 在仏国石井大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

仏国首相ノ仏独間並ニ仏英間關係ニ関スル議會
演説ノ件

第三五号 (八月十六日接受)

八月四日午後三時衆議員開會總理ハ大統領ノ「メッセー

ジ」ヲ朗読シ議員総立ニテ謹聴次テ總理ノ演説アリ七月二十三日以来急転直下ノ形勢ヲ叙述シ仏国ヲ始メ協調三國カ有ラユル努力ヲ尽シテ平和維持ヲ欲シタルニ独逸カ予定ノ決心ヲ變セスシテ乱暴ニ戦争ヲ押付ケタリトノ經過ヲ説明シ議會ノ決議ヲ求メ衆議院ハ全会一致非常ノ熱心ヲ以テ政府ノ態度ニ贊同ス右ヲ終リ總理ハ元老院ニ向ヘリ總理ハ演説中英仏ノ關係ヲ説明シ「ツレー」Cambon 問ニ往復セル公文ヲ朗読セリ同公文ハ英仏陸海軍専門家カ各自ノ國家ヲ拘束スルコトナク或ル場合ニ共同動作ノ方法ヲ研究シ一々決定ヲ見タルニ言及シ暗ニ之ヲ承認シタルモノナリ

五四 八月 五日 在本邦独国大使ヨリ
加藤外務大臣宛

独仏兩國間交戦状態通告ノ件

Tokio, den 5. August 1914.

Nr. 44.

Herr Minister!

Im Auftrage meiner Regierung bringe ich folgendes zur Kenntniss der Kaiserlich Japanischen Regierung:
Nachdem Frankreich bereits seit 1. August

wiederholte militärische Angriffe auf Reichsgebiet unternommen hat, befindet sich Deutschland nunmehr mit Frankreich im Kriegszustand.
Genehmigen Sie, Herr Minister, den erneuten Ausdruck meiner ausgezeichneten Hochachtung.
V. Rex

Seiner Exzellenz
dem Kaiserlich Japanischen Minister
der Auswärtigen Angelegenheiten
Herrn Baron Kato.

(右和訳文)(日本外務省作成)

以書翰致啓上候陳者本使ハ本国政府ノ命ニ依リ左ノ事実ヲ日本帝國政府ニ報道致候

八月一日以来仏蘭西國ハ帝國領土上ニ陸兵ノ攻撃ヲ試ミタルコト已ニ一再ニ止マラサリシヲ以テ今ヤ独逸國ハ仏蘭西國ニ対シ戦争状態ニ在ル次第ニ有之候

本使ハ玆ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具
千九百十四年八月五日

東京ニ於テ

フヤン・レックス

五五 八月五日 在本邦露国大使ヨリ
加藤外務大臣宛

露国ヨリ英独両国間交戦状態通告ノ件

Tokio, le 23 juillet/5 août 1914.

No. 504

Monsieur le Minister,

J'ai l'honneur de porter à la connaissance de
Votre Excellence que, conformément à un télé-
gramme de mon Gouvernement, l'Allemagne a
déclaré le 1er Août la guerre à la Russie.

Veillez agréer, Monsieur le Ministre, l'assurance
de ma haute considération.

N. Malewsky Maléwitch

Son Excellence

Monsieur le Baron Kato,

Ministre des Affaires Etrangères.

五六 八月五日 在本邦仏国大使ヨリ
加藤外務大臣宛

仏国ヨリ仏独両国間開戦ニ至ル迄ノ経緯按テ露国
ノ「ニシヤンントシ」國及世國ノ中ニ侵襲ヲリ國
ニ對シテノ件

contre les violations caractérisées de la frontière
Française commises depuis deux jours par des
détachements de troupes allemandes.

A la suite du rappel de l'Ambassadeur d'Alle-
magne à Paris, le Gouvernement de la République a
donné l'ordre à l'Ambassadeur de France à Berlin
de demander ses passeports et de remettre la
charge des intérêts Français entre les mains de
l'Ambassadeur des Etats-Unis. M. Jules Cambon
était chargé en même temps de protester expressé-
ment contre la violation de la neutralité du Luxem-
bourg par les troupes Allemandes contre laquelle
a également protesté le Gouvernement Luxem-
bourgeois. Notre Ambassadeur a protesté en
outre contre l'ultimatum adressé au Gouvernement
Belge par le Ministre d'Allemagne à Bruxelles
qui mettait en demeure la Belgique d'accepter la
violation de sa neutralité et de faciliter sur son
territoire les opérations militaires dirigées contre
la France.

J'ai reçu l'ordre de mon Gouvernement de pro-
tester expressément auprès du Gouvernement
Impérial du Japon contre la violation de la neu-

Tokio, le 5 août 1914.

No. 64.

Monsieur le Baron,

J'ai l'honneur de faire parvenir à Votre Ex-
cellence les informations suivantes qui m'ont été
transmises par le Gouvernement de la République.

A la date du 3 Août, le Gouvernement Impérial
Allemand a rappelé l'Ambassadeur d'Allemagne à
Paris. Il a donné pour prétexte à cette mesure que
des actes d'agressions auraient été commis par des
aviateurs Français contre l'Allemagne; ceux-ci, sui-
vant les déclarations de M. de Schoen, auraient
volé au dessus du territoire Allemand et jete des
bombs. Des aviateurs auraient également volé au
dessus de la Belgique et violé ainsi la neutralité
de ce pays. Dans ces conditions, le Gouvernement
Allemand se considèrait comme en état de guerre
avec la France du fait de cette Puissance.

Le Président du Conseil, Ministre des Affaires
Etrangères de la République Française, a con-
testé formellement ces allégations inexactes et a
rappelé que, dès le 2 Août, il avait adressé à
l'Ambassadeur d'Allemagne une Note protestant

traité du Luxembourg et contre l'ultimatum du
Gouvernement Allemand pour imposer à la Belgi-
que la double obligation d'accepter la violation de
la neutralité de la Belgique et de faciliter sur le
territoire Belge les opérations militaires effectuées
contre la France par les Armées Allemandes.

Veillez agréer, Monsieur le Baron, les as-
surances de ma très haute considération.

(Signé) Regnault

Son Excellence

le Baron Kato

Ministre des Affaires Etrangères

etc., etc., etc.

五七 八月五日 在英国井上大使ヨリ
加藤外務大臣宛 (電報)

英国ヨリ英独両国間交戦状態通告ノ件

第一一七号

英国外務大臣ヨリ英独両国ノ交戦状態ニ在ル旨八月四日附
シテ通牒シ来リ

五八 八月五日 在英國井上大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

時局ニ対スル英國ノ態度ニ関スル同国外相ノ演
説報告ノ件

第一一六号

附記 八月三日英國外務大臣ガ時局ニ対スル同国ノ
態度ニ付為セル議會演説和訳文

八月三日外務大臣ハ下院ニ於テ時局ニ対スル英國政府ノ態
度ニ関シ大要左ノ通演説セリ

英國政府ハ從來歐洲平和維持ノ為誠意努力スル所アリタル
モ或ル方面ニ於テ急ニ事ヲ挙ケントシタル為平和維持政策
ハ遂ニ失敗ニ歸シタリ政府ハ常ニ国家ノ行動ヲ拘束スル如
キ措置ニ出ツヘカラサル義務アルコトヲ確信シ從來一切秘
密協約ヲ取結ヒタルコトナシ随テ条約上今回ノ戦争ニ際シ
其当事者何レヘモ加担スヘキ義務ナシ仏国ハ露国トノ同盟
ニ依ル義務上遂ニ之ニ参加スルコトナレリ吾人ハ永ク
仏国ト善隣關係ヲ維持シ來タリタル次第ナルカ此際右善隣
關係カ吾人ニ如何ナル義務ヲ負担セシムルモノナルヤハ吾
人各自須ラク其ノ心情ニ訴ヘ之ヲ決スヘキナリ本大臣一己
ノ見解ニ依レハ仏国ハ從來英仏兩國間ノ信義善隣ノ關係ニ

ミタリ白国政府ハ中立防禦ニ決心シ英國政府ニ対シ領土保
全ニ付訴フル所アリ独逸ハ或条件ヲ以テ其ノ軍隊ノ白国通
過ニ関スル通牒ヲ白国ニ送リタルカ同国ハ之ヲ拒絶シタリ
白国ノ中立ニシテ破レンカ如何ナル条件ノ提供セラルルア
リトモ白国ハ独立ヲ失フヘク和蘭モ同様ノ運命ニ陥ルヘ
シ英國ニシテ白国ノ請求ヲ聽カサランカ英國ノ世界ヨリ受
ケ居ル尊敬英名ハ地ニ墜ツヘシ英國海軍ハ既ニ全部動員シ
陸軍ノ動員モ急速進歩シ居レリ英國軍備ハ今日程充実シタ
ルコトナク随ツテ英國海岸並ニ商業ハ十分保護セラルヘシ
時局ノ真相ヲ知テハ下院ノミナラス全国民ハ政府ヲ援助ス
ヘシ

右ニ対シ下院ハ小數ノ労働党ヲ除キ全院一致ヲ以テ喝采ノ
下ニ賛成セリ

(附記)

八月三日英國外務大臣ガ時局ニ対スル同国ノ態
度ニ付為セル議會演説和訳文

齊ニ大英國ノミナラス歐洲全般ノ平和ヲ維持スル為メ吾人
カ努力シツツアリシコトハ先週中既ニ報告シタル処ナルカ
今ヤ時局ハ刻々急轉シ其真相ヲ明ニスルハ極メテ困難ナル

顧ミ其ノ艦隊ヲ地中海ニ集中シ現ニ同国艦隊ハ全然同海面
ニ在リ随ツテ仏国ノ北並ニ西海岸ハ絶対的ニ防禦シ居ラレ
サルナリ就テハ若シ或外国ノ艦隊カ仏国ノ挑発ニ依ラサ
ル戦局ノ結果英國海峡ニ來リ仏国ノ防禦シ居ラサル海岸ヲ
砲撃スルコトアラシカ吾人ハ到底拱手傍觀シ居ルコト能ハ
サルナリ仏国ニシテ若シ其ノ艦隊ヲ地中海ヨリ撤退シタル
場合ニハ地中海ニ於ケル吾人ノ利益防禦上適當ノ措置ヲ執
ラサルヘカラサルニ至ルヘシ

前記ノ見解ニ基キ本大臣ハ駐英仏国大使ニ対シ若シ独逸ノ
艦隊カ英國海峡ニ來リ或ハ北海ヲ経テ仏国海岸並ニ其ノ船
舶ニ対シ敵對動作ヲ企ツルコトアラシカ英國政府ハ議會ノ
賛成アルニ於テハ其ノ艦隊ハ及フ限リノ一切ノ保護ヲ与フ
ヘキ旨ノ保障ヲ為シタリ

独逸政府ハ英國ニ対シ中立ヲ守ルヘキヲ約シ得ルニ於テハ
仏国ノ北海岸ヲ襲撃セサルヘキ旨ノ申出アリタルモ右ハ吾
人ノ到底承諾シ難キ所ナリ

次ニ英國ハ白耳義ノ中立ニ関シ從來重大ナル利害關係ヲ有
セルニ付白国ノ中立ニ関スル独仏兩國政府ノ意嚮ヲ問合セ
タルニ仏国政府ハ他国ニシテ中立ヲ侵スコトナキ限り之ヲ
尊重スヘキ旨答ヘタルモ独逸政府ハ保障ヲ与フルコトヲ拒

モ最早歐洲平和ノ保持シ難キハ明瞭トナリ露獨ハ既ニ宣戰
ヲ布告セリ

目下ノ事態ヲ説明スルニ先チ政府ハ議會ヲシテ我政府並ニ
議會カ今回ノ時局ニ対シ処決スルニ付如何ナル義務ノ下ニ
立テルヤヲ明確ニ了解セシメント欲ス余ヲシテ簡單ニ言ハ
シムレハ吾人ハ能フ限りノ熱心ヲ以テ飽迄頑強ニ平和ノ維
持ヲ努メタリ(喝采)此点ニ於テハ議會モ亦満足セラルヘ
シ曩ニ「バルカン」ノ危機ニ際シテモ吾人ハ平和ノ為ニ働
キ列強ノ協力ヲ保ツニ成功シタルカ其際ニ在ツテモ二三強
國ハ其主張ヲ曲クルニ多大ノ困難ヲ感シタルモノアリ從ツ
テ彼等ノ意見ノ逕庭ヲ調和スルニハ多大ノ時間努力並ニ議
論ヲ要シタルハ事実ナルモ當時列國ノ主眼ハ平和ニアリシ
ヲ以テ平和ハ幸ニ確保セラレタリ畢竟彼等ハ各国意見ノ相
違ヲ擴大センヨリ寧ロ其調和ノ為時間ト努力トヲ費スヲ望
ミシナリ

然ルニ不幸ニシテ今回ノ危機ニ於テハ歐洲ノ平和ヲ確保ス
ルハ不可能ナリキ是レ蓋シ一ツハ時ノ余裕ナカリシト他ハ
平和ヲ危殆ニ陥ラシムル迄時局ヲ急激ニ促進セシメントノ
意嚮或方面ニ存在セシヲ以テナリ其結果ハ今ヤ吾人ノ熟知
スル所ニシテ平和ノ政策ハ列強ノ関スル限り全然失敗ニ終

リタリ余ハ此点ニ付更ニ縷陳スルヲ欲セサルノミナラス今回ノ事件ニ付テハ何レノ国ヲ非難スヘキカヲ言明スルヲ望マス何トナレハ余ハ只議會カ一切ノ感情ヲ脱却シ単ニ英国ノ利益英國ノ名譽(大喝采)英國ノ義務(更ニ喝采)ノ見地ヨリ此危機ニ処センコトヲ切望スレハナリ

何故平和カ保持セラレザリシカニ就テハ吾人カ平和ノ為メ努力セシ先週中ニ發生シタル事件ヲ可成速ニ公表スルコトトナスヘク右公表ニヨリ吾人カ平和ノ為メ如何ニ滿腔ノ熱心ヲ以テ真面目ニ努力シタルカハ明白トナリ(喝采)又之レニヨリ公衆ハ平和ニ反対シタル勢力カ那辺ニアリシヤヲ自ラ判断スルヲ得ン

茲ニ余ハ英國ノ義務ニ付論及センニ如何ナル危機ニシテ勃発スルモ英國ノ態度ヲ決スルハ全然自由ニシテ(謹聽、謹聽)毫モ他國ト密約ナキハ既ニ余並ニ首相ノ議會ニ証言シタル所ナリ(喝采)

歐洲ニハ二個ノ外交的団体アリ三国同盟、三国協商即チ是ナリ而シテ後者ハ同盟ニアラスシテ一ツノ外交的団体ニ過キス議會ハ一千九百八年「ボスニヤ」「ヘルツェゴヴィナ」ノ併合ヨリ危機ノ生シタルヲ記憶セン當時露国外相ハ倫敦ニ來合セタルニヨリ余ハ断乎トシテ彼ニ対シ事「バルカ

認ムルコトアリトスルモ陸海軍官憲ノ間ニ予メ会谈ヲ遂ケ置クニアラサレハ時機到來ノ場合余ニ於テ欲スルモ右援助ヲ与フルコト能ハサルニアラスヤト反問セリ

右ハ誠ニ道理アルコトナルヲ以テ余ハ兩國軍人ヲシテ斯ル目的ヲ以テ会谈ヲ行ハシムルコトニ同意シタルモ彼等ノ間ニ於テ何等双方ノ政府ヲ束縛スルカ如キ決議ヲ為スコトナカラシコトヲ明白ニ了解セシメ置キタリ

其後「アガヂール」ノ危機起リタル際ニ於テモ余ハ又一千九百八年ニ於ケルト同一ノ態度ヲ採リ次テ一千九百十二年ニ至リ前記兩國軍人間ニ於ケル会谈ノ次第ハ決シテ兩國政府ヲ拘束スルモノニアラサル旨書面ヲ以テ確約スルコトトシ同年十一月二十二日ヲ以テ余ハ仏國大使ニ書面ヲ送り又同大使ヨリ回答ヲ受領セリ右書面ハ兩國軍人間ニ行ハレタル会谈ノ次第カ決シテ双方ノ政府ヲ拘束スルモノニアラサルコトヲ公示スルノ記録トシテ茲ニ發表セラルヘシ

今回ノ危機ニ於ケル吾人ノ地位ハ「モロッコ」問題ニ於ケルト全然同一ニアラス後者ハ主トシテ仏國ニ關聯スル紛争ニシテ且ツ吾人カ協約ニ依リ外交的援助ヲ与フヘキ旨ヲ約セル事件ニ付仏國ニ対シテ起レル紛争ナリキ勿論吾人ハ外交的援助以外ニ何物ヲモ約束シタルニアラサリシモ右協約

ン」問題ニ關スル以上輿論ハ何等吾人ノ間ニ約束スルヲ許ササルヘシト告ケタリ依テ彼ハ夫レ以上何等求ムル所ナク又余ハ何等与フル所何等約束スル所ナカリキ吾人ハ真ニ「昨日迄」外交的ノ援助以上何等ノ約諾ヲ他國ニ与フルコトナカリシナリ余ハ特ニ此義務ノ問題ヲ議會ニ明ニセサルヘカラス之ヲ明ニスルニハ一千九百六年ニ於ケル「モロッコ」問題ノ当時ニ遡ラサルヘカラス「アルゼシラス」會議ノ当時ハ総選挙最中ニシテ政府ニ取り甚タ困難ナル時期ナリシカ余ハ若シモ右危機ニシテ仏獨間ノ戦争トモナラハ吾人ハ軍事的援助ヲ与フヘキヤト質問セラレタルヲ以テ余ハ之ニ対シ實際ノ必要發生シタル場合ニ本院ニ於ケル輿論ノ全賛助ヲ受クルノ条件ノ下ニアラスンハ余ハ何レノ外國トモ何等協定スルコト能ハスト答ヘ(政府側喝采)尚余ハ一個ノ意見トシテ若シ仏國ニシテ英仏協商ノ目的タル「モロッコ」問題ニ關シ他ヨリ戦争ヲ強ヒラルルカ如キコトアラハ大英國ニ於ケル輿論ハ举ツテ仏國ヲ援助スルナルヘシト云ヘリ(喝采)余ハ何等ノ約束ヲモ為サス又何等ノ威嚇ヲモ用ヒス只右ノ意見ヲ陳述シタルニ仏國政府ハ之ヲ諒認シタルモ同時ニ同政府ハ若シ危機突発ノ際大英國ノ輿論ニシテ予メ余ノ約束シ得サル軍事的援助ヲモ仏國ニ与フルヲ

ハ既ニ公表セラレタル確約ナリキ

然ルニ今回ノ危機ハ其發生ノ原因ヲ異ニシ全然「モロッコ」ニ關スルモノニアラス又吾人カ仏國ト何等特ニ協定スル所アル事件ニ關スルモノニアラス將又主トシテ仏國ニ關スル事件ニヨリ發生シタルニモアラスソハ全ク壘塞間ニ於ケル紛争ニ原因セリ而シテ何レノ政府モ何レノ國家モ壘塞間ノ紛争若ハ戦争ニ捲込マルルヲ望マサリシ如ク仏國政府ニ於テモ亦然リシナリ然ルニ仏國ハ只露國トノ同盟ニ対スル名譽ノ義務(喝采)トシテ之ニ捲込マレタルモノナルカ我英國ニ対シテハ如斯義務ハ決シテ適用セラルヘキモノニアラス吾人ハ露仏同盟ノ当事者ニアラサルノミナラス吾人ハ其同盟ノ条項スラ知ラサルナリ

茲ニ余ハ進ンテ現在ニ於ケル英國ノ地位ハ何ヲカ要求スルヤ論究セントス吾人ハ仏國ト多年ノ親交アリ(喝采)余ハ克ク記憶セリ曩ニ夫ノ英仏協約成立スルヤ兩國民ハ宿昔ノ糾葛ヲ一掃シ以テ交友トナリタルヲ狂喜セリ此親交、、、是レ實ニ兩國民ノ批准ヲ經タル兩國間ノ親交、、、ヨリ如何ナル義務カ湧起スヘキヤ宜シク各人ヲシテ各自ノ胸中感情ニ問フテ以テ自ラ其義務ノ範圍ヲ解釈セシメヨ(喝采)

余ヲシテ曰ハシムレハ仏国艦隊ハ今ヤ地中海ニ在リ仏国ノ西北海岸ハ絶対ニ防備ナシ仏国艦隊ヲ地中海ニ集中セル今日ノ形勢ハ兩國間ニ親交結ハレ互ニ信頼安堵ノ念ヲ生スルニ至リシ以前ノ形勢トハ全然一変セリト云ハサルヘカラス余自身ノ感想ヲ直言スレハ仏国カ自ラ求メタルニアラス又自ラ進ンテ侵襲シタルニアラサル戦争ニ於テ外国艦隊カ英國海峡ニ下リ防備ナキ仏国ノ海岸ヲ砲撃乱射スルコトアラハ吾人ハ決シテ之ヲ目撃シツツ手ヲ束ネテ何等為ス所ナク唯茫然トシテ佇立スルコト能ハス(拍手大喝采)余ハ信ス是レ実ニ此国一般ノ感想ナルヘキヲ(大喝采)

世ニハ往々一人ノ感想伝播シテ忽チ万人ノ感想トナルノ場合アリト雖余ハ茲ニ感情ヲ脱シテ専ラ英國ノ利害ノ点ヨリ事物ヲ觀察セント欲ス是レ實ニ余カ議會ニ於テ將ニ述ヘントスル所ノ根本觀念ナリ若シ吾人ニシテ此際何等言明スル所ナクンハ仏国ハ地中海ニ於ケル其艦隊ヲ如何ニスヘキカ

元来仏国カ地中海ニ其艦隊ヲ駐ムルニ當ツテヤ一朝事アルニ際シ我國ノ採ルヘキ行動ニ関シ何等我國ヨリ保障ヲ得タルニアラス故ニ仏国ハ其興亡ニ関スル大戦争ニ於テ全然防備ナキ西北海岸ヲ独逸艦隊ノ蹂躪ニ委セサルヘカラサルニ

消極的ノ態度ヲ採ルノ報トシテ見ス見ス國家ヲ最大危地ニ陥ラシムルノ時ナラン(喝采)余ハ實ニ英國ノ利害關係ヨリ觀察シテ斯クハ言明スルナリ却説今ヤ吾人ハ若シ仏国ノ防備ナキ西北海岸ニシテ独逸ヨリ攻撃セラレハ同國ハ英國ノ來援ヲ期待シ得ヘキヤ否ヤヲ知ラシムヘキ義務アルヲ切ニ感セリ斯ル余儀ナキ事態ニ鑑ミ余ハ昨午後仏國大使ニ次ノ如キ書面ヲ手交セリ

「本官ハ独逸艦隊ニシテ仏国海岸並ニ仏国船舶ニ對シ敵對行動ヲ行ハンカ為メ英國海峡ニ入り若ハ北海ヲ通航スルコトアラハ英國艦隊ハ全力ヲ挙げケテ之カ保護ニ当ルヘキ旨ノ保障ヲ閣下ニ提出スルノ權限ヲ附与セラレタリ(大喝采)尤モ此保障ハ尚議會ノ協賛ヲ經ヘキモノニシテ又独逸艦隊カ其行動ヲ開始スル迄ハ毫モ英國政府ヲ拘束スルモノニアラス」

刻下ノ事態ハ急転直下ノ勢ヲ以テ進行シ一一之ヲ説明スルコト難シト雖モ余ノ本院參着間際ニ聞キ得タル所ニ依レハ独逸ハ英國ニシテ中立ヲ約スル以上独逸艦隊ハ仏国ノ海岸ヲ攻撃セサルヘキヲ承諾スルノ意アルカ如シ然レトモ是レ吾人ニ取り余リニ狹隘ナル約束ナリ(大喝采)更ニ之レヨリ一層重大事件ニシテ刻一刻益々緊要トナルハ白耳義ノ

至ラン其際吾人ニシテ尚何等言明スル所ナカランカ勢ヒ仏國艦隊ハ地中海ヨリ撤退セラレシノミ
全歐洲ノ大乱ハ今ヤ吾人ノ面前ニ迫レリ誰カ此大乱ヨリ生スヘキ結果ヲ局限スルコトヲ得ンヤ試ニ今日ニ於テ吾人ハ此紛争ノ何レヲモ援助スル能ハストテ中立ノ態度ヲ採レリト仮定シ同時ニ仏國艦隊カ地中海ヲ撤退セリト想像セヨ
右想像ヨリ生スル不測ノ結果トシテ若シ吾人ニシテ英國ノ重大利益ヲ防禦スルタメ俄ニ戦争ニ参加セサルヘカラサルニ立到リタリト仮定セヨ將又伊太利ハ今日ノ所自國ノ利益ヲ正当ニ打算シテ中立ヲ守リ居ルモ吾人カ正ニ戦ハサルヘカラサル時ニ當リ其中立ノ態度ヲ棄ツルカ如キコトアリト仮定セヨ地中海ニ於ケル地位ハ果シテ如何ナル状態ニ陥ルヘキカ

此等ノ結果ハ或ハ地中海ニ於ケル通商路カ我ニ取り必要不可欠ノ瞬間ニ於テ吾人ノ頭上ニ落ちて來ルヤモ測ルヘカラス(喝采)ゴコ數週ノ間ニ何レノ通商路カ我國ニ取り最モ緊要トナルカハ何人ト雖モ予言シ能ハサル所ナリ斯ル場合ニ於ケル吾人ノ地位ハ果シテ如何吾人ハ地中海ニ於テ単独ニ他ノ聯合艦隊ニ拮抗シ得ヘキ艦隊ヲ有セス斯ル場合コソ実ニ吾人ハ地中海ニ何等艦船ヲ増遣スルヲ得ス今日徒ラニ

中立問題トス(喝采)抑白耳義ノ中立ハ千八百三十九年ノ條約ニ基キ其後千八百七十年ニ於テ「ビスマルク」ハ白耳義ノ中立ヲ尊重スルノ保証ヲ与ヘタリ是レ独逸ニ於テ條約權ノ神聖不可侵ナルヲ認メタルモノトス

右條約ハ既ニ古ビタリト雖モ其名譽ト価値トハ千八百七十年ニ於ケルト等シク今日ニ於テモ尚強大ナリ從ツテ吾人ハ当年ニ於ケル「グラッドストーン」内閣ト同様同條約ノ義務ヲ重大視セリ此レヲ以テ前週中動員開始セラルルヤ余ハ白耳義中立問題ノ我政策上至大ノ關係アルヲ知り不取敢
巴里及伯林ニ打電シ独逸兩國政府ニ於テ白耳義ノ中立ヲ尊重スルヲ如何等申合セヲ為サントスルヤ否ヤヲ聞知スルノ緊要ナルヲ申送レリ

右ニ對シ仏國政府ヨリハ仏國ハ嚴ニ白耳義ノ中立ヲ尊重スル決心ナリ但シ第三國ニシテ其中立ヲ侵害スル場合ニ於テハ仏國モ亦必要上右決心ニ反スルノ行動ヲ取ルヤモ計ラレサル旨回答シ來リ独逸外務大臣ハ本件ニ関シテハ一応皇帝及首相ト相談シタル後ニ非レハ何等ノ回答ヲ發スル能ハサルヲ以テセリ依テ在独英國大使(サー・ウィリヤム・ゴッシェン)氏ハ右回答ハ余リ遅延セサランコトヲ希望シタルニ同外相ハ同大使ニ對シ戰時状態ニアル今日日本件ニ對スル

回答ハ軍機ヲ漏ラスノ虞アレハ果シテ何等回答ヲ与ヘ得ヘキヤ頗ル疑ハシキ旨ヲ通セリト云フ(笑声)

其後余ハ「ブラッセル」ニ電問シタルニ同国外務大臣ハ白耳義ハ其中立維持ノ為全力ヲ尽スヘキ旨ヲ答フルト共二万一中立侵害セラルル場合ニハ同国政府ハ之ヲ防禦スルヲ得ヘシト信スル旨附言シ来レリ(喝采)今吾人ハ独逸ヨリ最後通牒ノ白耳義ニ発セラレタルヲ耳ニセリ其目的ハ白耳義ニ於テ独逸軍隊ノ通過ノ便宜ヲ計ルノ条件ノ下ニ兩國間ノ親睦關係ヲ結ハントスルニ在リト云フ

若シ白耳義ノ領土保全ニシテ戦後確保セラレナハ英國ハ之ニテ満足スヘキヤ否ヤニ関シ前週中独逸ヨリ我方ノ意向ヲ探リ来リシカ余ハ之ニ対シ白耳義ノ中立ニ付吾人ノ有スル利益並ニ義務ハ一モ之ヲ交換シ去ル能ハサル旨回答シ置キタリ(喝采)「キング・ジョージ」ハ又白耳義皇帝ヨリ左ノ親電ニ接シ給ヘリ「貴皇帝及先帝ノ朕ニ対スル限りナキ友情及千八百七十年ニ於ケル貴国ノ我ニ對スル友誼的態度並ニ目下我ニ与フル友情ノ表彰ヲ肝銘シツツ朕ハ白耳義ノ領土保全ヲ確保スルヲ為貴国政府ノ外交的干渉ヲ切望ス」ト(喝采)依テ吾人ハ前週中外交的干渉ヲ試ミシモ今ヤ此手段ハ何ノ用力之レアラシ

国ニシテ戦争ニ加ハルトスルモ其之ニヨリ生スヘキ損害ハ戦争ヲ傍觀スルトモ蒙ルヘキ損害ト大差ナカルヘシ戦争ニ参加スルト否ト拘ハラス吾人ハ此際甚大ナル損害ヲ蒙ムラントス外國貿易ハ中止セントセリ之レ我通商路ノ杜塞セラレタルニハアラス全ク相手側ニ取引ナケレハナリ之ヲ要スルニ白耳義ノ形勢ニシテ吾人ノ耳ニスルカ如クニ實現センカ吾人ハ此際之カ結果ノ發生ヲ防止スル為正ニ全力ヲ傾注スヘキ義務ヲ負担セリ吾人ハ未タ遠征軍ノ派遣ニ着手セス尤モ艦隊ノ戦闘準備ハ既ニ遂ケタリ(喝采)陸軍ノ動員亦進行シツツアリ(又喝采)何故未タ遠征軍派遣ニ着手セサルヤト云フニ今日ノ事態ハ歐洲空前ノ大乱ニシテ吾人ハ印度其他ノ各地ニ重大ナル責任アリ而シテ予メ此等ニ於ケル不測ノ變ニモ備ヘサルヘカラサルカ故ニ吾人ノ立場ヲ明ニスル迄ハ遠征軍ヲ派遣スヘキヤ否ヤニ付テハ極メテ慎重ナル考量ヲ加ヘサルヘカラサレハナリ此危急存亡ノ秋ニ當リ吾人ノ大イニ安堵スルハ愛蘭ナリ(大喝采)全愛蘭ニ渉ル一般ノ感情、、、此点ハ克ク外國ニ於テ熟知セラレシコトヲ望ム(喝采暫ク此マス)、、、同地ニ就テハ毫モ後顧ノ憂アルナシ(更ニ喝采)英國ハ無条件中立ヲ宣言スル能ハサリキ曩ニ仏国ニ与ヘシ言質ニ照ラセハ吾人ハ

吾人ハ白耳義ノ独立及其領土保全ニ對シ頗ル重大ナル利害關係ヲ有ス歐洲ノ此方面ニ於ケル小邦ハ皆只現状ノ儘ニ放任セラレシコトヲ願ヘリ(喝采)然ルニ今回ノ戦役ニ際シ此等小邦ノ一ニシテ其中立侵害セラレ又ハ或交戦國ノ軍隊ニシテ其中立ヲ侵害スルモノアルモ之ニ對シ何等抵抗ノ手段ヲ取ルモノナカランカ戦争ノ終局ニ於テハヨシ彼等ノ領土ハ保全セラルルモ其独立ハ去ツテ跡ナカルヘシ(喝采)曩ニ独逸ヨリ白耳義ニ致セシ最後通牒ニ於ケル白耳義中立ノ讓歩又ハ侵害ニ對スル要求ニシテ容レラレタランニハ白耳義ノ独立ハ既ニ消滅シタリシナラン

白耳義ノ独立ニシテ失ハレンカ和蘭ノ独立モ亦失ハルヘシ依テ余ハ今茲ニ英國ノ利害關係ヨリ見テ何物カ危険ニ瀕シ居ルヤヲ考量センコトヲ議會ニ冀望ス(喝采)或ハ此際吾人ハ暫ラク傍觀ノ態度ヲ取り徐ニ勢力ヲ蓄ヘ適當ノ機會ニ於テ有力ナル干渉ヲ試ミ以テ都合ヨク時局ヲ解決スヘシト説クモノアリ然レトモ今日ノ如キ危機ニ際シ吾人ニシテ一旦白耳義ニ関スル名譽ノ義務及利益ヨリ遁ケ去ランカ終局ニ於テ如何ナル強大ナル勢力ヲ有スルトモ既ニ吾人ノ失墜セル國家ノ威信ニ比シ右勢力ハ果シテ幾何ノ価値アルヘキヤ(拍手喝采)吾人ハ優勢ナル艦隊ヲ有スルカ故万一我

右ノ措置ニ出ツルヲ得ス尚白耳義トノ關係ヲ考量スルモ亦吾人ハ無条件中立ノ宣言ヲ為スコト能ハス矣ニ吾人ハ今日帝國ノ有スル全勢力ヲ行使スルニ付何ソ躊躇スルヲ要セン(喝采)吾人ハ我全勢力ヲ使用スルノ結果ニ對シ覚悟セサルヘカラス又現ニ覚悟セルヲ(大喝采)公言スルニ憚ラサルナリ吾人ハ何時——其機ハ如何ニ急来スルカ予知スルヲ得サルモ——自國ヲ防禦シ戦争ニ加担セサルヘカラサルニ至ルヘキヤヲ知ラス然シ余ハ全局ノ事態ヲ詳ニスル迄ハ何等最後ノ決意ヲ公表スルコトナカリキ

「アスキス」氏ハ陸相トシテ又海相「チャーチル」ハ英國軍備ノ整頓及威力カ今日程高潮ニ達シタルコトナカリキト言明セラレタルカ又英國政府ノ其商業及沿岸ヲ保護スルノ實力ハ今日程信頼スルニ足ルノ時ハナカリキ

戦争ニ伴フ苦痛悲慘ハ全歐洲諸國一トシテ之ヲ免ルルコト能ハサルヘシ中立ノ宣言モ決シテ我國ヲ救フニ由ナカラン敵艦ノ為メ我通商ノ蒙ル損害ハ一般經濟關係ヨリ生スル打擊ニ比スレハ極メテ微々タルモノナリ吾人ハ今ヤ此ノ時局ニ對シ如何ニ為スヘキヤ自由ナリ只結果ハ尚未タ公開スルヲ得ス壘塞兩國間ノ争鬭ハ計ラスモ幾多不合理ナル葛藤ヲ惹起シ爾後形勢ノ推移極メテ迅速ニ目下戦争ノ実況ニ至リ

テハ殆ント之ヲ知ルニ由ナシ以上余ハ我政策ヲ定ムルニ至大ノ影響アルヘキ事態ヲ諸君ノ前ニ臚陳セリ余ハ必要ナル緊急事件ハ総テ本院ニ報告シタルカ間モ無ク吾人ニシテ自ラ時艱ニ当ラサルヘカラサルノ時ニ至ラハ初メテ國民ハ余ノ效ニ述ヘタル國家ノ危殆ヲ了解シ及其危殆ノ程度ヲ知得スヘント信ス最後ニ吾人ハ此ノ秋ニ当リ當ニ本院ノ助力ノミナラス英國国民全般ノ決心覚悟勇氣忍耐ニヨリ援助セラ

ルヘキヲ信シテ疑ハス(大喝采)
註 英外相「サー、エドワード、グレイ」ノ右演説ハ北支日報(英文)ニ掲載セラレタルモノヲ通商局ニ於テ直訳シタルモノナリ

五九 八月五日 在仏国石井大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

仏国政府ヨリ仏独両国間交戦状態通告ノ件

第三六号

仏国政府ハ開戦ニ関スル条約第二条ニ基キ仏独両国ハ八月三日午後六時四十五分ヨリ戦争状態ニ在ル旨八月五日午後二時通告シ来レリ

六一 八月六日 在仏国石井大使ヨリ
加藤外務大臣宛

仏国政府ヨリ仏独両国間交戦状態通告ノ件

政公第九五号 (九月十七日接受)

大正三年八月六日

在仏

特命全權大使男爵 石井菊次郎(印)

外務大臣男爵 加藤高明殿

往電第三六号ヲ以テ申進候通仏国政府ハ仏独両国間ニ本月三日ヨリ戦争状態存スル旨ヲ帝國政府ニ通告スル文書ヲ昨五日送付致越候ニ付右訳文茲ニ差進候間御査閲相成度此段申進候也

仏独間交戦状態ニ関シ仏国政府ヨリ我政府へ

ノ通告文

独逸帝國政府ハ其ノ軍隊カ国境ヲ踰エ且仏國領土内ニ於テ幾多ノ殺人及暴行ヲ為スニ任シタル後其ノ調印シタル千八百六十七年五月十一日ノ倫敦条約及陸戦ノ場合ニ於ケル中立國及中立人ノ權利義務ニ関スル千九百七年十月十八日ノ海牙第五号条約(第一条及第二条)ヲ蔑視シテ盧森堡大公國ノ中立ヲ侵害シタル後千八百三十九年四月十九日ノ条約

六〇 八月五日 在英國井上大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

独白間關係及蘭國ノ決心ニ関シ同國外相幣原公使ニ談話ノ件

第二二一号

幣原在蘭公使ヨリ第二〇号

蘭國外務大臣八月四日日本使ヲ來訪ノ節同大臣ノ得タル確報ニ依レハ独逸國政府ハ八月二日白耳義國政府ニ対シ独逸國軍隊ノ白国内通過ヲ要求シ其ノ容レラレサル場合ニハ白耳義ヲ以テ敵國ト認ムルノ外ナキコトヲ通告シタルカ白耳義國政府ハ右要求ヲ拒絕シタルニ付最早何時独逸國軍隊ノ白耳義國ニ侵入スルヤモ計リ難シト内話シ事此ニ至リテハ条約モ國際法モ何等価値ナキモノト覚悟セサルヘカラス蘭國政府ニ於テハ如何ナル時局ニ際スルモ飽迄自國領土權ヲ防護センカ為冷靜ニ最後ノ決心ヲナシ居レリト附言シタリ

及前顯海牙条約ニ違反シテ独逸國軍隊ノ白耳義領通過ヲ強要スル為白耳義王國ニ最後通牒ヲ發シタル後
千九百十四年八月三日十八時四十五分ヲ以テ仏國ニ戦争ヲ宣言シタリ

是ニ於テ共和國政府タルモノ亦干戈ヲ執リ起ツノ已ムナキニ至レリ依テ同政府ハ茲ニ日本帝國政府ニ対シ千九百十四年八月三日十八時四十五分ヨリ仏独両国間ニ交戦状態ノ存スルコトヲ通告スルノ光榮ヲ有ス

共和國政府ハ独逸帝國ノ為シタル國際規約ノ侵犯ニ付総テノ文明國民特ニ上ニ掲ケタル諸条約調印國ノ政府ニ向テ抗議ヲ提議シ併セテ自己ノ誓約ヲ守ラサルコト此ノ如ク甚シキノ敵ニ対シテ行フヲ要スルコトアルヘキ報復ニ付一切ノ留保ヲ為ス

國際法ノ原則ヲ尊奉スルノ意アル共和國政府ハ交戦中相互ノ条件ノ下ニ仏國ノ調印シタル陸上及海上ニ於ケル戦争法規ニ関スル國際条約ノ規定ニ遵由スヘシ

本通告ハ開戦ニ関スル千九百七年十月十八日ノ海牙第三号条約第二条ニ抛リテ之ヲ為シ千九百十四年八月五日十四時巴里ニ於テ日本帝國大使ニ致サレタルモノナリ

六二 八月六日 在本邦仏国大使ヨリ
加藤外務大臣宛

仏国ヨリ独国ノ対仏露宣戦ニ関シ通告ノ件

Tokio, le 6 août 1914.

No. 65.

Monsieur le Baron,

J'ai l'honneur de faire connaitre à Votre Excellence que, d'après une dépêche officielle, datée de Paris le 4 Août à 1 h. 45 du matin et que me transmet le Gouverneur Général de l'Indochine, la guerre a été déclarée par l'Allemagne à la France et à la Russie.

L'Autriche n'était pas encore à cette date engagée dans le conflit.

Veillez agréer, Monsieur le Baron, les assurances de ma très haute considération.

(Signé) Regnault.

Son Excellence

le Baron Kato,

Ministre des Affaires Etrangères

etc., etc., etc.

六三 八月六日 在英国井上大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

英独両国間交戦状態及白国ノ英仏露トノ協同ニ
関シ英国首相議會声明ノ件

第一二三号

総理大臣ハ八月五日下午ニ於テ在独英国大使ハ四日午後七時「フスポルト」ヲ受ケ英独兩國ハ同日時(伯林ノ十二時ニ該ル)以後交戦状態ニ在ル旨竝白耳義ハ独逸カ中立ヲ侵害シタルニ付英仏露ト協同シテ独逸ニ当ルヘク又白耳義政府ハ仏国軍隊ノ入国ヲ以テ境界侵犯ト認メサルコトヲ布告シタル趣通知アリタル旨述ヘタリ又軍事費トシテ一億磅ヲ議會ニ要求セリ駐英独逸大使ハ六日引上ケタリ

六四 八月六日 在奥国佐藤大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

奥国ノ対露断交及仏英關係ニ関スル件

第七二号

奥国政府ハ八月六日露国大使ニ旅券ヲ交付シ在露大使ヲ召還セリ尚仏国大使ハ近々引揚クヘク英国大使ハ英奥間交戦状態ナキヲ以テ当地ニ止マル由内定シ本使ニ内話セリ

六五 八月七日 在独国船越臨時代理大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

独国皇帝ノ対仏戰鬪行為開始命令ニ関スル件

第八六号

往電第八五号ニ関シ八月三日独国皇帝ハ仏軍ニ対シテ戰鬪行為開始ノ命令ヲ發シ在仏大使ヲ召還セラレタリ尚仏国大使ハ今明日中ニ当地引揚ノ筈

六六 八月七日 在本邦白国臨時代理公使ヨリ
加藤外務大臣宛

白国ヨリ独国ノ白国中立侵害ニ関シ通告ノ件

Tokio, le 7 août 1914.

No. 363/43.

Monsieur le Baron,

J'ai l'honneur de porter à la connaissance de Votre Excellence que par un télégramme en date d'hier Son Excellence Monsieur Davignon, Ministre des Affaires Etrangères m'informe que les troupes allemandes ont pénétré sur le territoire belge.

D'ordre de mon Gouvernement j'ai l'honneur de faire connaitre à Votre Excellence que la neutra-

六六 八月七日 在本邦露国大使ヨリ
加藤外務大臣宛

露国ヨリ奥国ノ対露宣戦ニ関シ通告ノ件

Tokio, le 25 juillet/7 août 1914.

(8月8日接受)

露国ヨリ奥国ノ対露宣戦ニ関シ通告ノ件

du 6 Août a. c., l'Autriche-Hongrie nous a déclaré la guerre.

Veillez agréer, Monsieur le Ministre, l'assurance de ma haute considération.

(Signé) N. Malewsky Maléwitch

Son Excellence

Monsieur le Baron Kato,

Ministre des Affaires Etrangères.

六八 八月七日 在露国本野大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

埃洪国ノ対露宣戦布告ノ件

第四四一号

埃洪国ハ八月六日露国ニ対シ宣戦ヲ布告セリ

六九 八月七日 在埃洪国佐藤大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

塞国ノ対独宣戦及黒山国ノ対埃宣戦布告ノ件

第七七号

塞爾比ハ独逸ニ対シ「モンテネグロ」ハ当国ニ対シ執レモ
宣戦ヲ布告セリ

七〇 八月九日 在露国本野大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

露国ノ対埃洪宣戦布告ノ件

第四五〇号

露国ハ八月八日漸ク埃洪国ノ宣戦ニ対シ宣戦ヲ布告セリ

七一 八月九日 在露国本野大使ヨリ
加藤外務大臣宛

露独開戦ニ関シ報告ノ件(第一)

附屬書一 七月二十三日附埃洪国ヨリ塞国宛最後通牒

二 塞国政府ノ埃洪国最後通牒ニ対スル回答

三 埃塞兩國衝突事件ニ対スル露国ノ声明

四 露国ガ欧露全軍ノ動員決行ノ事情声明

五 八月二日附露国皇帝ノ對独國宣戰詔勅

六 八月八日附露国皇帝ノ對埃洪國宣戰詔勅

公第一三四号 (九月五日接受)

大正三年八月九日

在露

特命全權大使男爵 本野 一郎(印)

外務大臣男爵 加藤高明 殿

曩ニ「サラジエヴォ」ニ於テ埃洪國皇太子及同妃兩殿下暗

殺ノ変事發生以來埃洪国ハ鋭意右事件ノ審理ニ従事シ其結果右兇行ノ根底ハ深ク塞国内ニ蟠屈セルヲ發見シ埃洪国ハ本事件ニ関シ塞国ニ対シ何等詰問の措置ヲ執ルニ至ルヘキハ屢々新聞紙ニモ伝ヘラレ世人モ多少期待スル所アリシカ埃洪国ハ遂ニ七月二十三日ヲ以テ別紙第一号ノ通り最後通牒ヲ塞国ニ交付シ四十八時間ヲ期シテ回答ヲ迫リタリ

露国ハ前記埃洪国ノ最後通牒ノ報ニ接スルヤ別紙第三号ノ通り七月二十五日公報ヲ以テ露国政府ハ本件ニ付頗ル憂慮シ其成行ニ注意ヲ怠ラサルト同時ニ埃塞兩國衝突ノ場合ニハ露国ハ之ヲ坐視スル能ハサル旨ヲ声明シ初ヨリ大イニ決心ノ意ヲ示セリ

之レト同時ニ露国ハ可成時局平和ノ解決ヲ希望シ埃塞兩國ノ間ニ立チテ斡旋スル処アラントシテ不取敢塞国回答ノ時期ヲ緩ウセンコトヲ埃洪国ニ提議シタルモ右ノ提議ハ埃洪国ノ拒絶スル処トナレリ

塞国ハ別紙第二号ノ通り埃洪国ノ希望期間内ニ回答ヲ与ヘタリ右回答ハ殆ント總テ埃洪国ノ希望ヲ容レ単ダ一ノ埃洪国官憲カ塞国領土内ニ於テ企テラレタル密謀ニ加ハリタル者ノ犯罪搜索審議ニ参加セントノ条項ノミ塞国国法ニ違反スルカ為之ヲ容認スルコト能ハストノ理由ノ下ニ塞国ハ之

ヲ拒絶シタルノミナリ然ルニ右塞国ノ回答ニ接シタル在「ベルグラード」埃洪国公使ハ之ヲ以テ不満足ノモノト為シ予テ其本国政府ヨリ同公使ニ与ヘラレ居タル訓令ニ基キ直ニ「ベルグラード」ヲ引揚ケ次イテ七月二十八日埃洪国ハ塞国ニ対シ宣戦ヲ布告シ続イテ「ベルグラード」ノ砲撃ヲ開始セリ

是ニ於テ露国ハ予定通り七月二十九日ヲ以テ「ガザン」「キエフ」「莫斯科」「オデッサ」等ノ軍管区ニ動員令ヲ下シ埃洪国境ニ十四軍団ヲ集中シ始メタリ然レ共独逸ニ開戦ノ口実ヲ与ヘサル為独逸國境ノ軍隊ニハ何等手ヲ着クル処ナカリシ

如斯クシテ事態ハ益々紛糾險惡ヲ加フルニ至リシカ是ヨリ先キ關係国ニ於テハ英伊兩國ヲシテ先ツ各單獨ニ居仲調停ヲ為サシメントスルノ意アリシモ成效セス此ニ於テ英国ハ更ニ仏独伊三国ト共ニ四國仲裁ヲ企テタルモ独逸ハ是レ埃國ノ利益ニ反スルモノナリトノ口実ノ下ニ容易ニ其議ニ加ハテサリシカバ各國ハ益々危懼ノ念ヲ増シ若シ果シテ真ニ独國カ埃國ニ声援スルニ於テハ全歐ノ大戦ハ遂ニ免レ難キモノトナシ歐洲安危ノ決一ニ独國ノ嚮背如何ニアリト為セリ露国ハ素ヨリ平和的解決ノ為四國仲裁ニ対シ異議ナン

ト雖露境兩國直接ノ協議ハ寧ロ其希望スル処ナリシカ此案モ遂ニ埃國ノ峻拒スル処トナリ四國仲裁モ亦埃國ノ態度頗ル判明ヲ欠キタルヲ以テ露國ハ万一ヲ慮リ七月三十一日ヲ以テ歐露全軍ノ動員ヲ決行スルニ至レリ(別紙第四号参照)之ニ對シ独逸ハ七月三十一日ヲ以テ露國ニ對シ八月一日正午迄ニ露國ノ軍事動作ヲ中止スルニ非ザレバ独逸ハ其全軍動員ヲ開始スヘキ旨ヲ通告セシカ之ニ對シ露國ヨリ何等ノ回答ヲ得サリシヲ以テ八月一日午後七時在露独逸大使ハ自國政府ノ名ヲ以テ露國外務大臣ニ露國ニ對スル宣戰布告ヲ通告シ翌二日午前八時ヲ以テ露都ヲ引揚ケ特別仕立ノ汽車ニ依リ陸路露西亞瑞典ノ國境ヲ經テ帰國ノ途ニ就キタリ

露國ハ之ニ答フルニ八月二日ノ宣戰布告ヲ以テシタリ(別紙第五号)露独兩國開戦ト共ニ仏國ハ最初ノ宣言通り八月二日ヲ以テ全軍動員ヲ行ヒ以テ露國援助ノ態度ニ出デタリ伊國ハ三國同盟ハ守勢的ノモノニシテ攻撃的ノモノニ非ズトノ趣旨ノ下ニ中立ヲ宣言シタリ

英國ハ初ヨリ露仏兩國ヲ助クヘシト期待セラレ居タルモ兎角其態度判明ナラス露國ニ於テハ多少危懼ノ念ヲ懷キ居タルカ如クナリシカ独逸カ先ツ白耳義ノ中立ヲ侵犯スルニ至「塞爾比ハ塞爾比國ノ權利カ「ボスニヤ」「ヘルツェゴヴィナ」ニ發生セル既成ノ事實ニヨリテ何等ノ毀損ヲ受ケサルコトヲ承認シ從テ塞爾比ハ伯林條約第二十五条ニ從ヒ列國ノ為スヘキ決議ニ同意スヘキコトヲ承認ス列強ノ忠告ヲ容レテ塞爾比ハ自今併合問題ニ就キ昨秋來保持シ來レル反抗及ヒ敵對ノ態度ヲ捨テ埃洪國ニ對スル現時ノ外交方針ヲ變更シ以テ今後同國ト善隣ノ關係ヲ保ツコトヲ約ス」

然ルニ最近數年ノ歴史殊ニ六月十五日ノ悲シムヘキ事件ハ埃洪國一部領土ノ離脱ヲ目的トスル革命的運動ノ塞爾比ニ存在スルコトヲ証明セリ塞爾比政府ノ眼下ニ發生セル此運動ハ塞國外ニ波及シテ幾多ノ陰謀暗殺ノ行為トナリ之ニ依テ人心ヲ恐怖セシムルノ事件ハ塞國領土ノ外ニ統發スルニ至レリ

塞爾比王國政府ハ管ニ一九〇九年三月十八日(三月三十一日)附宣言書中ノ正式義務ヲ遂行セサルノミナラス此運動ヲ鎮圧スヘキ何等ノ手段ヲモ講セサリキ

塞爾比政府ハ種々ノ結社及団体ノ埃洪國ニ對スル犯罪行為、新聞紙ノ暴言、陰謀犯人ノ賞賛、文武官吏ノ革命運動加盟其他教育上危險思想ノ広汎等ヲ許容セルノミナラス塞爾比人間ニ埃洪國ニ對スル憎惡ノ念ヲ發起シ又ハ同國ノ官

リ英國ハ茲ニ初テ本件事變ニ干与スルノ口実ヲ得独逸ニ向ツテ最後宣戰ヲ布告スルニ至レリ而シテ埃洪國ハ遂ニ八月六日午後六時五分ヲ以テ露國ニ對シ宣戰ヲ布告シ在露埃洪國大使ハ翌七日午前特別列車ニテ芬蘭ヲ經テ任地ヲ引揚ケタリ

右埃洪國ノ宣戰ニ對シ露國ハ同八日ヲ以テ埃洪國ニ對シ宣戰ヲ布告シタリ右ニ関スル詔勅ハ別紙第六号ノ通りナリ右本件本日迄ノ成行大略具報申進候 敬具

追テ露独兩國間交通ハ七月二十九日以来全ク杜絶「バルチック」方面亦タ交通遮断セラレ西歐ヘノ通路ハ「オデッサ」ノ一方ノミナル処コレ又海上交通甚タ確ナラス今ヤ西歐ト露國トハ交通全ク杜絶ノ状態ニ有之候御參考迄申添候也

(附屬書一)

七月二十三日埃洪國政府ヨリ塞國政府宛

最後通牒(訳文)

別紙第一号

一九〇九年三月十八日(三十一日)維納駐劄塞爾比公使ハ本國政府ノ命ヲ受ケ埃洪國政府ニ次ノ宣言ヲ為セリ

憲ニ對シ輕侮ノ心ヲ發生セシムルカ如キ總テノ行為ヲ宥容シタリ

塞爾比國政府ノ此罪過的宥容ノ悲慘ナル結果カ去ル六月十五日(露曆)ノ事件ニ依リ全世界ニ向テ現示セラルルニ至ル迄依然トシテ其宥容持續シタリ六月十五日(露曆)兇行犯人ノ自白ニ依レハ「サラジュヴォ」兇行ハ「ベルグラード」ニ於テ準備セラレ且ツ犯人所持ノ武器及爆発物ハ「ナロドナヤ、オドブラーナ」會員タル塞爾比士官及官吏ヨリ与ヘラレタルモノナルコト且ツ又塞爾比國境監視ノ長官等ハ右兇行者及其使用兇器ヲ「ボスニヤ」ニ送ル為自ラ其企圖実行ノ任ニ当リタルコト明白ナリ

以上予審ノ結果ハ源ヲ「ベルグラード」ニ發シ遂ニ帝國領内ニ波及汎濫セル諸種ノ運動ニ對シ最早埃洪國政府カ是迄採リ來レル忍耐裕恕ノ態度ヲ保持スルコト能ハスシテ反對ニ埃洪國政府ヲシテ常ニ帝國ノ安寧ヲ攪乱セントスル運動ニ對シ之カ絶滅ノ策ヲ講セサルヲ得サルニ至ラシメタリ

此目的ヲ達スル為埃洪國政府ハ塞爾比政府ニ向テ塞爾比政府ハ埃洪國ニ對スル煽動の行為即チ帝國ヨリ其領土ノ一部ヲ離脱スルヲ目的トスル總テノ企画ヲ否認シ及ヒ同國政府

か此凡テノ犯罪の戦慄煽動行為ヲ抑圧スヘキコトノ誓約ヲ要求セサルヲ得サルナリ

塞爾比政府ハ其公約ノ壮重ヲ期スル為六月二十六日(十三日)附官報第一項ニ次ノ宣言書ヲ公ニスヘキモノトス

「塞爾比政府ハ反塊の運動即チ塊洪国ノ一部領土ノ離脱ヲ目的トスル企画ノ全部ヲ否認シ此犯罪行為ノ悲シムヘキ結果ヲ誠心ヨリ遺憾トスルモノナリ

塞爾比政府ハ塞爾比士官及官吏カ前記ノ運動ニ参加シ依テ以テ同国政府カ一九〇九年三月十八日(三十一日)附宣言書ヲ以テ為シタル友好的善隣關係保持ノ公約ヲ無視セルヲ遺憾トス

塞爾比国政府ハ塊洪国内如何ナル領土ノ住民ニ対シテモ其住民ノ運命ニ関シ干涉ヲ試ムルハ全然之ヲ否認スルカ故ニ同国政府ハ同政府ノ義務トシテ茲ニ自国ノ士官、官吏及全住民ニ向テ斯ノ如キ行為ニ關係アル者ニ対シテハ最モ嚴重ニ処分シ全力ヲ尽クシテ斯ノ如キ行為ヲ予防鎮圧スヘキコトヲ嚴達スルモノナリ

此宣言書ハ国王陛下ノ勅命トシテ軍隊ニ布告サルヘク同時ニ軍事公報ニ依テ公表セラルヘキモノトス
王国政府ハ右ノ外次ノコトヲ約ス

七、陸軍少佐「ヴオイ・タンケシチ」及「サラジエヴォ」事件予審ノ結果同事件ニ關係アリト認めラレタル塞爾比官吏「ミラン・ツガノヴィッチ」ナルモノヲ至急逮捕スルコト
八、国境ヲ越シテ武器及爆発物密輸出ニ対シ塞爾比官憲カ援助ヲ与フルコトヲ防止センカ為有効ノ手段ヲ講シ「サランジエヴォ」陰謀共謀者ニ国境通過ヲ容易ナラシメタル「ジャバン」「ロズンサ」国境勤務ノ官吏ヲ罷免シ且ツ嚴刑ニ処スルコト

九、塞爾比及外国ニ在ル塞爾比官吏カ身公職ニアルヲ顧ミス六月十五日ノ陰謀後種々ノ会見ニ際シ塊洪国ニ対シ敵意ヲ有スル口調ヲ用ヒタル不都合ノ処為ニ対シ塞爾比政府ハ塊洪国政府ニ対シ説明ヲ与フルコト

一〇、前数項記載ノ手段履行ニ就キ至急塊洪国政府ニ通知スヘキコト塊洪国政府ハ塞爾比政府ノ回答ヲ本月十二日(二十五日)土曜午後六時迄ニ期待スルモノトス

(附屬書二)

塞国政府ノ塊洪国最後通牒ニ対スル回答(訳文)

別紙第二号

塞爾比国政府ハ本月十日(二十三日)附塊洪国政府ノ通牒

一、帝国ニ対シ憎悪輕侮ノ念ヲ惹起シ又ハ帝国領土ノ保全ニ反対ノ傾向ヲ有スル総テノ出版物ヲ禁止スルコト

二、「ナロドナヤ、オドブラーナ」ト称スル団体ヲ速ニ閉鎖シ且ツ団体ノ煽動的運動ニ供セラレタル一切ノ材料ヲ没収スルコト又反塊の運動ヲ目的トスル塞爾比国ノ他ノ団体及機關ニ対シテモ同様ノ手段ヲ執ルコト塞爾比政府ハ又閉鎖セラレタル団体カ他ノ名称ノ下ニ或ハ他ノ組織ノ下ニ活動ヲ再開スルヲ防止スルカ為必要ノ方法ヲ講スヘシ

三、塞爾比学校現行制度中ヨリ教師ノ人選上並ニ授業上共ニ塊洪国反対運動ヲ幫助スヘキモノハ速ニ之ヲ削除スヘキコト

四、塊洪国反対運動ニ關係アル総テノ士官及官吏ノ職ヲ免スヘキコト塊洪国政府ハ追テ右有罪者ノ氏名及其犯罪行為ヲ塞爾比政府ニ通告スルノ權利ヲ留保ス

五、塊洪国領土ノ保全ヲ侵害セントスル革命運動鎮圧ノ為塞爾比国内ニ於テ塊洪国官憲ノ共助ヲ許スコト

六、塞爾比領内ニアル六月十五日ノ陰謀關係者ニ対スル審問ヲ開始スルコト且ツ塊洪国ノ官憲ハ右審問ニ参与スヘキコト

ニ接到セリ而シテ右通牒ニ対スル本回答カ塊洪国及塞国間ニ存スル善隣ノ關係ヲ破壊スル恐アル一切ノ誤解ヲ除去スルモノナランコトヲ信スルモノナリ

王国政府ハ塞国議會ニ於テ又ハ国家ノ責任アル代表者ニ依リテ為サレタル声明及行為ニ依リ表示セラレタル数次ノ抗議カ一九〇九年三月十八日附塞国政府ノ宣言書ニ依テ全ク根絶シ爾来如何ナル場合ニ於テモ隣境大王国ニ対シテ遺般ノ抗議カ再ヒセラレザリシノミナラス其以來屢々更迭ヲ重ネタル王国政府ニ依リ又ハ其機關ニ依リ「ボスニヤ」「ヘルツェゴヴィナ」ニ於テ發生セル政治的及法律的状态ニ変更ヲ加フヘキ何等ノ画策カ曾テ試ミラレタルコト無キヲ認ムルモノナリ王国政府ハ此關係ニ於テ塊洪国政府ヨリ未ダ曾テ何等ノ照会ニ接シタルコトナシ唯一ノ教課書事件アリント雖モ塊洪国政府ハ本件ニ関スル吾カ説明ニ対シ全然満足ヲ表セラレタリ

塞国カ巴爾幹事件中其平和の中庸ノ政策ヲ執リ来タリタルコトヲ事実ノ上ニ証明シタルコト唯ニ一再ニ止マラサルナリ而シテ塞国カ曾テ歐洲平和ノ為自ラ其犠牲トナルヲ甘シタルニ依リ歐洲ノ平和ハ漸ク維持セラレタルニアラスヤ若シ夫レ新聞論說其他個人的性質ノ各種運動ノ如キハ何レ

ノ邦国ニモ存在スル現象ニテ之ニ対シ王国政府ハ一ニ其責ニ任スルコトヲ得サルナリ況ンヤ王国政府ハ塞國兩國ニ生シタル各種交渉問題ノ解決ニ際シ最モ戒慎ノ態度ヲ持シ依テ多数ノ問題ヲ兩隣国發展ノ為有利ニ解決スルコトヲ得タルニ於テハ蓋シ思半ニ過クルモノアラシ

之ヲ以テ「サラエヴォ」事件ニ塞國人ノ参加シタルカ如ク認メラルルヲ聞クニ至リテハ王国政府ノ最モ痛恨トスル処ナリ王国政府ハ該犯罪事件ノ調査ニ関シ参加ノ申込ヲ受クヘキコトヲ期待シ犯罪者トシテ通知ヲ受ケタルモノニ対シテハ嚴重ニ処分シ以テ王国政府ノ他意ナキヲ示サンコトヲ期シタリ

王国政府ハ埃洪国政府ノ希望ニ遵ヒ「サラエヴォ」事件ニ関聯セル証跡判然タルモノハ其位置階級ノ如何ヲ問ハス総テ之ヲ法廷ニ差廻ハスヘキコトヲ声明スルモノナリ

王国政府ハ特ニ政府機関紙七月十三日(二十六日)ノ紙上第一頁ニ於テ左ノ声明ヲナスヘキコトヲ約ス

王国政府ハ埃洪国ニ対スル総テノ煽動的運動即チ埃洪国ニ屬スル土地ヲ割取スルヲ以テ最終ノ目的トスル総テノ非行ニ加担スルモノヲ嚴重ニ処分シ斯ル罪惡の行為ノ悲ムヘキ結果ニ就キ衷心痛恨ニ堪ヘス

二、王国政府ハ「国民協会」及其他同種ノ結社ノ会員中今日マテ何等本項ニ云ヘル如キ犯罪行為アリシコトヲ証スヘキ材料ヲ有セス又埃洪国政府ノ外交文書中ニモ右様材料ノ提示ナシ併シナカラ王国政府ハ埃洪国政府ノ請求ヲ容レ前項ノ協会及埃洪国ニ対シ反対行為ヲ執ルモノト認メラルル他ノ結社ヲ閉鎖スヘシ

三、埃洪国政府ニ於テ事柄ノ如何ヲ問ハス総テ同国ニ反抗スル傾向ヲ醸成シ又ハ醸成シ得ルモノトシテ実証ノ挙ヲ示サルル限リ王国政府ハ塞國国民教育中ヨリ総テ此ノ如キ事柄ヲ除去スヘキコトヲ約ス

四、王国政府ハ其官吏ノ行為カ埃洪国領土ノ保全ニ危害ヲ加フヘキモノナルコト裁判上判明シタル場合ニハ其官吏ヲ軍籍ヨリ除去スヘキコトヲ承諾ス王国政府ハ此等文武官吏ノ姓名ト行為トニ関スル埃洪国政府ノ通告ヲ待テ可法手續ヲ開始スヘシ

五、王国政府ハ不幸ニシテ埃洪国政府ノ要求ニ係ル同国政府ノ機関ノ共助ヲ塞國ノ境土内ニ承認スヘシトノ意義ヲ充分ニ了解スルヲ得ス併シナカラ国際法ノ本義ニ反セス司法手續ニ則リ善隣ノ交誼ニ副フ範圍ニ於ケル共助ハ之ヲ認容スヘキコトヲ声明ス

王国政府ハ埃洪国政府ノ公報ニ拠レハ塞爾比国將校及官吏ノ一部カ右運動ニ加担シ一九〇九年三月十八日(三十一日)宣言書ニ抛リテ王国政府カ誓約セル善隣關係ニ累ヲ及ホスニ至リタルヲ遺憾トス

王国政府ハ埃洪国領土ノ住民ノ運命ニ干渉セントスル総テノ思想及計画ヲ排斥スルカ故ニ將校官吏及全国民ニ対シ王国政府カ右様ノ行為ノ抑圧ニ対シテハ全力ヲ用ヒ右行為ヲ敢テスルモノニ対シテハ嚴罰ニ処スヘキコトヲ嚴ニ告知スルヲ其義務ナリト信ス右告知ハ王国陛下ノ名ニ於テ王太子殿下ヨリ塞國軍隊ニ訓達セラレ又陸軍機関紙最近紙上ニ於テ公布セララルヘシ

右ノ外王国政府ハ左ノ件々ノ実行ヲ期ス

一、最近召集セラルヘキ通常議會ニ於テ出版法中ニ埃洪国ニ対シ憎惡侮辱ヲ挑発スヘキ言動及埃洪国領土保全ニ危害アル出版物ハ嚴禁スヘキ条項ヲ追加スルコトヲ提議スヘシ

王国政府ハ最近着手スヘキ憲法改訂ノ際憲法第二十二條ヲ改正シテ前項出版物ノ没収ヲ可能ナラシムルノ手段ヲ執ルヘシ但シ現行憲法第二十二條ニ拠レハ右没収ヲナスコトヲ得ス

六、王国政府ハ六月十五日兇行ノ直接間接ノ關係嫌疑者ニ対シ之ヲ審理スルノ義務アリト認ムルコト勿論ナリ但シ埃洪国政府ヨリ特派セラレタル同国官憲カ該審理ニ参与スルコトハ王国政府ニ於テ之ヲ認容スルコト能ハス何トナレハ右ハ我憲法及刑法ノ規定ニ背反スルモノナルヲ以テナリ

尤モ確定事實ニ関スル予審ノ結果ヲ埃洪国官憲ニ通告スルハ此限ニアラス

七、王国政府ハ「ウライスラフ・タンコシチ」少佐逮捕ノ請求ニ接シタル同夜ヲ以テ直ニ逮捕ノ手續ヲナセリ

六月十五日ヨリ鐵道庁ニ見習トシテ勤務シタル埃洪国臣民「ミラン・ツイガノーヴァチ」ニ関シテハ今尚搜索中也
王国政府ハ埃洪国政府ニ対シ既定ノ形式ニ從ヒ犯罪事件審理ノ為犯罪嫌疑ニ関シ並ニ「サラエヴォ」事件審理ノ結果今日迄ニ蒐集セラレタル犯罪証憑ニ関シ成ルヘク速ニ塞國政府ニ通告セラレンコトヲ要望ス

八、王国政府ハ国境ヲ越エテ武器及爆発物ノ密輸出ヲ禁止スル措置ニ関シ是迄ヨリモ一層嚴重ノ手段ヲ取り且ツ之ヲ擴張スヘシ

王国政府ハ「サラエヴォ」事件ノ兇行者ヲシテ「シャ

「バップ」「ロズニッカ」ノ国境ヲ越エシムルニ至リタル沿道憲職官吏ヲ敵罰ニ処スヘキ為即時之ニ対シ審理ヲ開始スヘキコトヲ命スヘキハ勿論ナリ

九、王国政府ハ兇行後塞国官吏カ塞国内及外国ニ於テ為シタル会见談中埃洪国政府カ同国ニ対シ敵意ヲ有スルモノトナスモノニ関シテハ埃洪国政府カ右会见談ノ拔萃ヲ示シ其会谈者カ果シテ塞国官吏ナルコトヲ明示セラルルヲ待ツテ悦ンテ相当ノ説明ヲ与フヘシ尤モ塞国政府ニ於テモ自ラ右会见談ニ関スル証拠ヲ蒐集シ及其信証ヲ得ルコトニ努ムヘシ

十、王国政府ハ以上列举ノ各事項ニシテ本覚書ニ於テ已ニ実行ヲ指示セルモノノ外ハ其実施ノ都度之ヲ埃洪国政府ニ通告スヘシ

若シ埃洪国政府ニ於テ本回答ヲ以テ不満足ノモノトナス場合ニハ王国政府ハ本問題ヲ速ニ解決セサルヲ以テ共同ノ利益ナリト考フルカ故ニ本問題ノ解決ヲ海牙仲裁裁判ノ判決ニ委スルカ若クハ一九〇九年三月十八日(三十一日)宣言ノ際与カリタル列強ノ決定ニ任カセ依テ以テ本問題ヲ平和的ニ解決センコトヲ望ムハ今日ト雖モ敢テ昔日ト変ハルコトナシ

ルコトニ関シ諸般ノ措置ヲ執ルヘキコトヲ要求シタリ而シテ之ニ対スル回答ノ為塞国政府ニ四十八時間ノ期限ヲ与ヘタリ

帝国政府ハ在聖彼得堡埃洪国大使ヨリ右ニ関スル通知ヲ受ケ其文書ニヨリ要求ノ内容ヲ知悉シタレトモソハ塞国政府ニ対シ「ベルグラード」ニ於テ要求ノ提起セラレタルヨリ既ニ十七時間ヲ経過シタル後ナリキ而シテ其要求中ノ或者ハ事实上実行スヘカラサルモノニシテ又或者ハ形式ニ於テ独立国ノ体面上相容レサルモノナルコトヲ看取セサルヲ得サリキ帝国政府ハ該要求ヲ以テ塞国ノ品位ヲ毀損シ之ニ由リテ埃洪国カバル幹半島ニ優越ナル位置ヲ確立セントスルモノナリト思惟シ埃洪国ニ対シ最モ友好的形式ニ於テ其要求事項ニツキ更ニ審議ヲ為スヘシトノ希望ヲ表白シタリ然ルニ埃洪国政府ハ右審議ヲ以テ不可能ナリトナスト同時に維納ニ於ケル他列国ノ調停的動作モ亦成功スルヲ得サリキ

塞国政府カ犯罪事件ヲ裁判ニ附シ又露国ノミナラス他列国ノ期待シタル程度以上ニ埃洪国ニ満足ヲ与ヘンコトヲ声明シタルニ拘ハラズ塞国駐在同国公使ハ塞国ノ回答ヲ以テ不満足ノモノトナシ遂ニ「ベルグラード」ヲ撤退シタリ

(附屬書三)

埃塞两国衝突事件ニ対スル露国ノ声明(訳文)

別紙第三号

露国政府ハ埃洪国カ「セルビア」国ニ最後通牒ヲ発シタルヲ聞キ憂慮ニ堪ヘズ露国政府ハ右埃塞两国衝突事件ニ対シ之ヲ傍觀スル能ハサルヲ以テ之カ發展ニ関シ注意ヲ怠ルヲ得ス

(附屬書四)

露国ガ欧露全軍ノ動員決行ノ事情声明(訳文)

(八月二日官報掲載)

別紙第四号

外国新聞紙上最近数日間ノ事局ニ関シ誤謬ヲ伝フル処アルヲ以テ外務省ハ茲ニ右ニ関スル外交関係ノ一斑ニ就キ説明スルノ義務アリト信ス

本年七月二十三日在塞国埃洪国公使ハ埃洪国皇儲殺害事件ヲ誘起シタル大塞爾比運動ノ進捗ヲ以テ塞国政府ノ罪ニ歸シタル文書ヲ塞国総理大臣ニ手交シタリ而シテ埃洪国ハ塞国政府ニ対シ該煽動者ヲ嚴重処罰スルコトヲ要求スルノミナラス埃洪国ノ監督ノ下ニ叛逆的行為ノ探查之ニ加担セル塞国臣民ノ処罰及将来同国内ニ於ケル総テノ陰謀ヲ絶滅ス

先是露国ハ埃洪国ノ要求ノ過当ナルヲ認メ之ヲ等閑ニ看過スヘカラサル旨声明シ之ト同時ニ埃洪国ニ取り一大強国トシテ其自尊心ノ毀損セスシテ容レラルヘキ平和的解決ノ途ヲ覓ムルニ努力シタリ而シテ露国ハ此際平和的解決カ独立国タル塞国ノ体面ヲ毀損セサル程度ニ於テ為サルヘキモノナルコトヲ極力主張シタリ然リト雖帝国内政府カ執リ来レル遺憾ノ努力ハ遺憾ナカラ凡テ無益ナルモノトナレリ埃洪国政府ハ列強ノ総テノ仲裁ヲ排斥シテ動員ヲ行ヒ塞国ニ対シテ宣戰ヲ布告シ其翌日ヲ以テ「ベルグラード」ハ砲火ヲ蒙ルムルニ至レリ其宣戰布告ニ添付セル詔勅中ニ於テ埃洪国ハ「サラエヴォ」兇行事件ノ準備及遂行ヲ以テ明明地ニ塞国ノ罪ニ歸セリ如斯全国民及国家ニ対シテ刑事的犯罪ニ歸スルカ如キハ常軌ヲ逸シタルモノニシテ之カ為歐洲社会ノ大ナル同情ハ翕然トシテ塞国ノ上ニ傾注セララルニ至レリ塞国ノ運命ニ関シ袖手傍觀スルヲ得ズテフ露国ノ声明ニ対シテ埃洪国ノ為セル行為ニ対シ帝国内政府ハ「キエフ」「オデッサ」莫斯科及「カザン」軍管ノ動員ヲ行フノ必要ヲ見ルニ至レリ

露国カ如斯キ決心ヲ為スニ至レルハ埃洪国政府ノ文書カ塞国政府ニ交付セラレ而シテ露国カ之ニ関シ交渉ヲ開始セル

ヨリ五日ヲ經過シテ維納政府ヨリハ露国ノ平和的態度ニ対シ何等ノ応酬ヲ為ササルノミナラス却ツテ其軍隊半部ノ動員令ヲ公布シタルニ職由セスンハアラス

露国ノ執レル措置ニ関シテハ該措置ハ埃洪国ノ軍事行動ニ対スル結果ニシテ決シテ埃逸国ニ反抗スルモノニ非ストノ説明ヲ附シ独国政府ニ知照セラレタリ之ト同時ニ帝国政府ハ直接維納政府トノ談判ニ由ルカ或ハ英国ノ提議ニ基キ直接ニ利害關係ヲ有セサル英仏独伊四大国ノ會議ニ由リテ這般ノ争議ヲ円満ニ解決スヘク談判ヲ繼續スルノ意思ヲ言明シタリ

然リト雖露国ノ這般計画ハ不成功ヲ以テ了リタリ埃洪国ハ露国トノ交渉ヲ拒絕シ伯林内閣モ亦列国会議ニ参加スルコトヲ拒絕シタリ此際露国ハ尚平和維持ニ其力ヲ致シタリ露国力如何ナル条件ノ下ニ其軍事的措置ヲ停止スヘキヤトノ独国大使ノ質問ニ対シ外務大臣ハ埃洪国ヲシテ埃塞問題カ歐洲問題ノ性質ヲ帶フルニ至リタルコトヲ認メシメ而シテ埃洪国ハ塞国ノ主權ト一致セサル要求ヲ固執セサルコトヲ以テ其条件トナスコトヲ声明シタリ

埃逸国ハ此露国ノ提言ヲ以テ埃洪国ニ取リ容認スヘカラサルモノトナセリ之ト同時ニ彼得堡ニ於テハ埃洪国ノ全部動

效ニ忠誠ナル臣民ニ宣ス
露国ハ歴史の遺訓ニ從ヒ同宗同種タル「スラブ」諸国ノ運命ニ付キ傍觀スルヲ得ス曩ニ埃洪国カ塞爾比亞国ニ対シ独立国ノ容認スヘカラサル要求ヲ提起セルニ至リテ露国国民ノ「スラブ」諸国ニ対スル同胞的感情ハ一斉ニ勃興シ来レリ

埃洪国ハ「セルビア」ノ平和的讓歩ヲ無視シ又露国ノ好意的仲裁ヲ斥ケ急遽兵力ニ訴ヘ防禦ナキ「ベルグラード」市ヲ砲撃スルニ至レリ

是ニ於テ朕ハ万一ニ備ヘンカ為陸海軍ニ戰備ヲ命シタリ然リト雖モ朕ハ我臣民ノ生命及財産ヲ慮リ尚平和ノ目的ヲ達センカ為ニ全力ヲ尽シテ交渉スル処アリタリ斯ル好意的交渉ノ中途ニ於テ埃洪国ノ同盟国タル埃逸ハ我国トノ間ニ於ケル多年善隣ノ好誼ニ反シ且ツ我国ノ執リタル処置ハ全然埃逸ニ対スル敵對ノ目的ヲ有スルモノニ非ルヲ保証セルニモ拘ハラス露国ニ対シテ直ニ其措置ヲ中止スヘキコトヲ要求シ其露国ノ為ニ拒絕セラルルヤ突然我國ニ対シテ宣戰ヲ布告セリ

今ヤ露国ハ単ニ同胞国ノ為ノミナラス自国ノ名譽、威嚴並ニ保全ト其國際的地位ヲ維持センカ為ニ起タサル可ラサル

員ニ關スル通報ニ接シタリ塞国内ニ於ケル戰鬪行為ハ続行セラレ「ベルグラード」ハ新ニ砲撃ヲ被リタリ

露国ノ平和的提議カ不成功ニ了リタル結果トシテ緩急ニ応スヘキ軍事的措置ヲ擴張スルノ必要ヲ生シタリ伯林内閣ノ本件ニ關スル質問ニ対シ露国ハ總テノ不時ノ事變ヲ予防セシカ為戰備ヲ開始スルノ止ムヲ得サルコトヲ答ヘタリ
露国ハ万一ニ備フル為以上ノ措置ニ出ツルト共ニ現下ノ事態ヲ解決セントシテ引續キ全力ヲ傾注シ而シテ露国ノ提出シタル条件ノ下ニ争議解決ノ凡テノ方法ニ対シ同意ヲ為スヘキ意思ヲ声明シタリ

如斯基平和的通告ニモ拘ハラス独国政府ハ七月三十一日ヲ以テ露国政府ニ対シ翌八月一日午前十二時ヲ期シ軍事的措置ヲ中止スヘシトノ要求ヲ提起シ若シ露国力之ニ反スル場合ニハ全部ノ動員ニ着手スヘシト脅嚇シタリ
翌八月一日独逸大使ハ外務大臣ニ其政府ノ名ヲ以テ宣戰ノ通知ヲ交付シタリ

(附屬書五)

八月二日附露国皇帝ノ对独国宣戰詔勅(訳文)

別紙第五号

神祐ヲ保有スル露国皇帝独裁君主タル朕「ニコライ」二世

ニ至レリ朕ハ我忠誠ナル臣民カ挙テ和親奉公以テ露国ヲ防衛スヘキヲ確信ス

邦家危急ノ秋ニ当リテハ須ク国内ノ紛争ヲ一撤シ皇帝ト臣民トノ密接ナル關係ハ更ニ一層切ナルヘク露国上下一致以テ敵ノ強襲ヲ撃退スルヲ要ス

朕ハ其事業ノ正義ニ合スルヲ確信シ且ツ敬虔ニ天祐ヲ信賴シ以テ神聖ナル露国及光荣アル軍隊ノ為ニ天帝ノ祝福アラソコトヲ祈ル

露歴千九百十四年

治世第二十年七月二十日彼得堡ニ於テ

ニコライ

(附屬書六)

八月八日附露国皇帝ノ对埃洪国宣戰詔勅(訳文)

別紙第六号

朕全露国皇帝「ニコライ」二世ハ朕カ忠良ナル全臣民ニ宣ス

朕ハ独逸カ露国ニ対スル宣戰ニ関シ数日前詔勅ヲ以テ朕カ臣民ニ告クル所アリキ

今ヤ世界ノ動乱ノ首唱者タル埃洪国ハ其仮面ヲ脱却シ平穩無事ノ日ニ当リ微弱ナル塞爾比亞国ニ対シテ干戈ヲ乘リ屢次

彼ヲ救助シタル露國ニ對シテ戰ヲ宣シタリ
敵ノ兵力ハ増加シツアリ露國及全「スラーブ」族ニ對ス
ル強力ナル兩「セルマン」國ハ充実セラレタリ然リト雖之
ニ對シニ倍ノ兵力ヲ有スル平和ナル國民ノ義憤ハ昂上シツ
ツアリ而シテ露國ハ敵ノ挑戰ニ応シ其光榮アル過去ノ伝統
ニ信賴シ堅忍不拔ノ意氣ヲ振起シテ敵前ニ起テリ神明ハ朕
カ殺伐の計画若クハ無益ナル世界の名譽ノ為ニ干戈ヲ乘リ
シモノニ非サルコト並ニ神祐アル帝國ノ品位ト安康トヲ
擁護シ正義ノ為ニ戰フモノナルコトヲ照覽シ給フヘシ朕ハ
今次ノ戰爭ニ於テ单独ニ立ツモノニアラス即チ朕ノ勇敢ナ
ル各聯邦ト已ムヲ得スシテ武器ヲ乘レル友邦トハ一般ノ平
和安康ニ對スル「セルマン」國ノ永久的脅迫ヲ根本的ニ芟
除シ去ランカ為朕ト共ニ起テルナリ上帝ハ朕及朕カ同盟軍
ヲ祝福シ給フヘシ而シテ全露國ハ手ニ劍ヲ提ケ心ニ十字架
ヲ藏メ武靈ノ為ニ奮起セン

耶蘇降誕紀元第九百十四年

治世第二十年七月二十六日(八月八日)

ニコライ

lemands que remplacent ces troupes sur le ter-
ritoire de l'Empire germanique. En conséquence,
le Gouvernement Français a considéré qu'en droit
et en fait, ces troupes aggravaient contre la France.
Dans ces conditions, il a paru au Gouvernement
de la République qu'il ne pouvait maintenir son
Représentant à Vienne. Notre Ambassadeur a
donc été invité à réclamer ses passeports et à
partir sans retard avec le personnel de l'Ambassade
et de nos Consuls. Avisé aussitôt de cette déci-
sion par le Ministre des Affaires Étrangères de la
République, le Comte Sezen a, de son côté,
demandé ses passeports. Le Gouvernement
Français a pris les dispositions habituelles pour
assurer le départ de l'Ambassadeur d'Autriche
suivant les règles de la courtoisie internationale.
J'ai l'honneur de faire part à Votre Excellence
de ces faits, d'ordre de mon Gouvernement.
Veuillez agréer, Monsieur le Baron, les as-
surances de ma très haute considération.

(Signé) Regnault

Son Excellence
le Baron Kato,
Ministre des Affaires Étrangères.

七二 八月十一日 在本邦仏國大使ヨリ
加藤外務大臣宛
仏國ヨリ通告ノ件
Tokio, le 11 août 1914.

No. 67.
Monsieur le Baron,
Le Gouvernement de la République Française
ayant interrogé le Gouvernement Austro-Hongrois
sur la présence de troupes Austro-Hongroises
parmi les armées allemandes à la frontière Française
et notre Ambassadeur à Vienne n'ayant pas reçu à
ce sujet de réponse péremptoire et satisfaisante, la
question a été posée à nouveau par le Ministre des
Affaires Étrangères de la République à M. le
Comte Sezen, Ambassadeur d'Autriche à Paris.

Ce dernier n'a pu donner l'assurance à M. Gaston
Doumergue qu'il n'a pas été envoyé de troupes
austro-hongroises à l'Allemagne hors du territoire
Autrichien. D'autre part la présence de ces troupes
en Allemagne a été absolument confirmée au Gou-
vernement Français de sorte que l'Allemagne se
trouvait en mesure de disposer des effectifs al-

七三 八月十一日 在英国井上大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

英埃ノ衝突切迫ノ件

第一四二号

英埃兩國ハ未タ交戦状態ニモラス埃國大使ハ尚倫敦ニ止マ
リ居ルモ埃國ハ白耳義ニ於ケル独逸軍援助ノ為軍隊ヲ北方
ニ派遣シタリトノ報道アルニ付英國カ白耳義ニ軍隊ヲ送ラ
ハ英埃ノ衝突ハ免カンス從テ早晚英埃間ニ交戦状態ヲ見ル
ニ至ルヘシ

七四 八月十二日 在英国井上大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

英国ヨリ英埃兩國間交戦状態通告ノ件

第一四九号 (八月十四日接受)

英國ハ埃國ト交戦状態ニアル旨八月十二日附英國外務大
臣ヨリノ公文ニ接セリ本電ハ在歐米各大使公使ハ電報ス
ル

七五 八月十四日 在本邦英国大使ヨリ
加藤外務大臣宛 ヨリ

英国ヨリ英埃両国間交戦状態通告ノ件

Tokio, August 14, 1914.

No. 86.

Monsieur le Ministre,

I have the honour to acquaint Your Excellency that I am in receipt of a telegraphic communication from my Government stating that Great Britain is at war with Austria-Hungary.

I avail myself of this opportunity, Monsieur le Minister, to renew to your Excellency the assurance of my highest consideration.

(Signed) Cunyngham Greene

H. B. M. Ambassador.

His Excellency

Baron Takaki Kato, G. C. M. G.,

etc., etc., etc.,

H. I. J. M. Minister for Foreign Affairs.



de foi, l'Autriche-Hongrie a envoyé des troupes sur la frontière Allemande dans des conditions qui constituent une menace directe à l'égard de la France. En présence de cet ensemble de faits, le Gouvernement Français se voit obligé de déclarer au Gouvernement Austro-Hongrois qu'il prendra toutes les mesures qui lui permettront de répondre à ces actes et à ces menaces."

L'Ambassadeur de France n'étant plus à Vienne et l'Ambassadeur d'Autriche-Hongrie ayant quitté Paris, cette déclaration a été remise le 12 août par Sir Edward Grey à l'Ambassadeur d'Autriche-Hongrie à Londres. En la lui remettant, Sir Edward Grey lui a dit que la Grande-Bretagne s'y associait et que en conséquence l'état de guerre entre l'Angleterre et l'Autriche-Hongrie existerait à partir de minuit.

Veillez agréer, Monsieur le Baron, les assurances de ma très haute considération.

(Signé) Regnault

Son Excellence le Baron Kato,

Ministre des Affaires Etrangères

etc., etc., etc.



七六 八月十四日 在本邦公国大使ヨリ
加藤外務大臣宛

仏国ヨリ仏英両国ノ対埃洪国交戦状態宣言ニ付
通告ノ件

通告ノ件

Tokio, le 14 août 1914.

Monsieur le Baron,

D'ordre de mon Gouvernement, j'ai l'honneur de remettre à Votre Excellence la déclaration suivante que le Ministre des Affaires Etrangères de la République a fait parvenir le 13 août au Gouvernement Austro-Hongrois :

"Après avoir déclaré la guerre à la Serbie et pris ainsi la première initiative des hostilités en Europe, le Gouvernement Austro-Hongrois s'est mis sans aucune provocation du Gouvernement de la République Française en état de guerre avec la France :

1°—après que l'Allemagne eut successivement déclaré la Guerre à la Russie et à la France, l'Autriche-Hongrie est intervenue dans ce conflit en déclarant la guerre à la Russie qui combattait déjà aux côtés de la France;

2°—d'après de nombreuses informations dignes

七五 八月十四日 在仏国石井大使ヨリ
加藤外務大臣宛

仏国ヨリ対埃洪国宣戦通告ノ件

政公第九八号

(九月二十三日接受)

大正三年八月十四日

在仏

特命全權大使男爵 石井菊次郎 (印)

外務大臣男爵 加藤高明 殿

仏国政府ヨリ昨十三日ヲ以テ別紙写ノ通埃洪国ニ対スル宣戦ノ通告有之候間右玆ニ及御送付候也

(別紙)

仏国ヨリ埃洪国ニ対スル宣戦ヲ通告ノ覚書

Après avoir été, malgré des affirmations pacifiques, le co-auteur originaire de l'agression de l'Allemagne contre la France, le Gouvernement impérial et royal d'Autriche-Hongrie a, par des actes d'assistance militaire donnés à l'Allemagne et incompatibles avec la neutralité, provoqué à la date du 10 août 1914 la rupture des relations diplomatiques entre les Cabinets de Paris et de Vienne.

De nouvelles informations ayant établi que le

Gouvernement imperial et royal persiste dans l'assistance ci-dessus dénoncée, le Gouvernement de la République se voit contraint de ne plus lui reconnaître la qualité de neutre et le considère comme ennemi, à dater du 12 août 24 heures.

La présente notification est faite, en conformité de l'article 2 de la III^e Convention de la Haye du 18 octobre 1907 relative à l'ouverture des hostilités, et est remise à Son Excellence Monsieur le Baron Ishii, Ambassadeur du Japon à Paris.

à Paris, le 13 août 1914 16 heures.

七八 八月十四日 在英國井上大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

英埃開戦ニ関スル英國外務省ノ声明報告ノ件

第一五二号

英埃開戦ニ関シ八月十三日当国外務省ノ発表シタル「ステートメント」ノ要旨左ノ通

独逸カ露仏ニ対シ宣戦スルヤ埃洪国ハ露国ニ対シ開戦ヲ宣言シ又独逸国境ニ軍隊ヲ送り直接仏国ヲ脅スニ至リタルニ付仏国政府ハ右ニ対スル一切ノ手段ヲ執ルハキ旨埃洪国政

ハ〇 八月三十日 在本邦白国臨時代理公使ヨリ
加藤外務大臣宛

埃洪国ノ対白国宣戦ヲ白国ヨリ通告ノ件

Tokio, le 30 août 1914.

No. 4.

Monsieur le Baron,

Par un télégramme en date du 28 de ce mois, S. E. Monsieur le Ministre des Affaires Etrangères à Anvers m'informe que l'Autriche-Hongrie a déclaré la guerre à la Belgique.

D'ordre de mon Gouvernement, j'ai l'honneur de porter ce qui précède à la connaissance de Votre Excellence.

Je saisis cette occasion de renouveler à Votre Excellence, Monsieur le Baron, les assurances de ma très haute considération.

(Signé) Lemaire de Warzée
d'Hermalle

Son Excellence

Monsieur le Baron Takasaki Kato,

Ministre des Affaires Etrangères,

etc., etc., etc.

府ニ宣言スルノ已ムヲ得サルニ至リタル旨ノ宣言書ヲ在英埃洪国大使ニ送致スル様仏国政府ヨリ英國政府ニ依嘱シ来リタルカ英國政府ハ右宣言書ヲ同大使ニ送付スルニ際シ仏埃外交關係スノ如クニシテ断絶シタル以上英國政府ハ英埃間ハ十二日 Mid-night ヨリ戦争状態ニアリトスルノ已ムヲ得サルニ至リタルノ趣同大使ニ通告シタリ

七九 八月二十九日 在英國井上大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

英國議會ニ於テ白国支持保証ノ奏請動議通過ノ件

第二三五号

八月二十七日当国議院ニ於テ全院一致ヲ以テ左ノ動議ヲ通過セリ英國皇帝陛下ハ白耳義皇帝陛下ニ対シ白耳義国軍隊及人民カ不法ノ領土侵犯ニ対シ勇敢ニ敵対シタルコトハ本院ノ同情讚嘆スル所ニシテ英國ハ一切ノ手段ヲ以テ独立及歐洲ノ公法ヲ擁護セントスル白耳義ノ努力ヲ支持スル旨ノ保証ヲ伝ヘラレンコトヲ奏請スルコト

八一 九月一日 在本邦白国臨時代理公使ヨリ
加藤外務大臣宛

独国軍ニ依ル白国領土侵犯ニ際シ白国ノ対独好意的中立要求及白国ノ回答通報ノ件

附屬書一 八月二日午後七時在白国独逸公使ヨリ白国

外相ニ交付セラレタル公文ノ仏訳文

右白国ノ対独好意的中立要求ニ関スル件

二 八月三日午前六時半白国政府ヨリ独逸公使

ニ与レヨレタル回答公文写

白国領土侵犯ハ全方ヲ善ク排撃メンキ件

Tokio, le 1 septembre 1914.
(9月18日接受)

No. 443/50

Monsieur le Baron,

S. E. M. le Ministre des Affaires Etrangères à Bruxelles m'a fait parvenir sous la date du 11 Août dernier, le texte de la note qui lui a été remise par le Ministre d'Allemagne à Bruxelles le 2 Août à 7 heures du soir, ainsi que celui de la réponse que le Gouvernement du Roi y a faite et dont il a donné connaissance à M. de Below-Saleské le 3 Août à 6-1/2 heures du matin.

J'ai l'honneur de communiquer ces documents à

Votre Excellence et je saisis, cette occasion de lui renouveler, Monsieur le Baron, les assurances de ma très-haute considération.

(Signé) Lemaire de Warzée
d'Hermalle

Son Excellence
Monsieur le Baron Takaaki Kato,
Ministre des Affaires Etrangères,
etc., etc., etc.

(附圖一)

八月二日午後七時在白國獨逸公使ヨリ白国外相ニ交付セラル
ル公文ノ仏訳文

英國軍ニ依リ白國領土侵犯リ懸ク白國ノ支那兵
隊亞中ノ陸軍リ懸クニ付

Traduction.

Bruxelles, le 2 août 1914.

Le Gouvernement allemand a reçu des nouvelles sûres, d'après lesquelles les forces françaises auraient l'intention de marcher sur la Meuse par Givet et Namur. Ces nouvelles ne laissent aucun doute sur l'intention de la France de marcher sur l'Allemagne par le territoire belge. Le Gouverne-

ment énoncée à évacuer le territoire aussitôt la paix conclue.

3.—Si la Belgique observe une attitude amicale, l'Allemagne est prête, d'accord avec les autorités du Gouvernement belge, à acheter contre argent comptant tout ce qui sera nécessaire à ses troupes et à indemniser pour les dommages causés en Belgique.

4.—Si la Belgique se comporte d'une façon hostile contre les troupes allemandes et particulièrement fait des difficultés à leur marche en avant par une opposition des fortifications de la Meuse ou par des destructions de routes, chemins de fer, tunnels ou autres ouvrages d'art, l'Allemagne sera obligée de considérer la Belgique en ennemie.

Dans ce cas, l'Allemagne ne prendra aucun engagement vis-à-vis du royaume, mais elle laissera le règlement ultérieur des rapports des deux Etats l'un vis-à-vis de l'autre à la décision des armes. Le Gouvernement allemand a l'espoir justifié que cette éventualité ne se produira pas et que le Gouvernement belge saura prendre les

ment Impérial allemand ne peut s'empêcher de craindre que la Belgique malgré sa meilleure volonté, ne sera pas en mesure de repousser sans secours une marche française d'un si grand développement. Dans ce fait, on trouve une certitude suffisante d'une menace dirigée contre l'Allemagne. C'est un devoir impérieux de conservation pour l'Allemagne de prévenir cette attaque de l'ennemi.

Le Gouvernement allemand regretterait très vivement que la Belgique regardât comme un acte d'hostilité contre elle le fait que les mesures des ennemis de l'Allemagne l'obligent de violer le territoire belge.

Afin de dissiper tout malentendu, le Gouvernement allemand déclare ce qui suit:

1.—L'Allemagne n'a en vue aucun acte d'hostilité contre la Belgique. Si la Belgique consent dans la guerre qui va commencer à prendre une attitude de neutralité amicale vis-à-vis de l'Allemagne, le Gouvernement allemand de son côté s'engage au moment de la paix à garantir le royaume et ses possessions dans toute leur étendue.

2.—L'Allemagne s'engage sous la condition

mesures appropriées pour l'empêcher de se produire. Dans ce cas, les relations d'amitié qui unissent les deux Etats voisins deviendront plus étroites et durables.

(附圖二)

八月三日午前六時半白國政府ヨリ獨逸公使ニ与ルドイツ
回答公文書

白國領土侵犯ノ企カト兼テト特懸クニ付

Bruxelles, le 3 août 1914.

Par sa note du 2 Août 1914, le Gouvernement allemand a fait connaître que, d'après des nouvelles sûres, les forces françaises auraient l'intention de marcher sur la Meuse par Givet et Namur et que la Belgique, malgré sa meilleure volonté, ne serait pas en état de repousser sans secours une marche en avant des troupes françaises. Le Gouvernement allemand s'estimerait dans l'obligation de prévenir cette attaque et de violer le territoire belge. Dans ces conditions, l'Allemagne propose au Gouvernement du Roi de prendre vis-à-vis de lui une attitude amicale et s'engage au moment de la paix à garantir l'intégrité du Royaume et de ses posses-

sions dans toute leur étendue. La note ajoutée que si la Belgique fait des difficultés à la marche en avant des troupes allemandes, l'Allemagne sera obligée de la considérer comme ennemie et de laisser le règlement ultérieur des deux Etats l'un vis-à-vis de l'autre à la décision des armes.

Cette note a provoqué chez le Gouvernement du Roi un profond et douloureux étonnement.

Les intentions qu'elle attribue à la France sont en contradiction avec les déclarations formelles qui nous ont été faites le 1^{er} Août au nom du Gouvernement de la République.

D'ailleurs, si, contrairement à notre attente, une violation de la neutralité belge venait à être commise par la France, la Belgique remplirait tous ses devoirs internationaux et son armée opposerait à l'envahisseur la plus vigoureuse résistance.

Les traités de 1839 confirmés par les traités de 1870 consacrent l'indépendance et la neutralité de la Belgique sous la garantie des Puissances et notamment du Gouvernement de Sa Majesté le Roi de Prusse.

La Belgique a toujours été fidèle à ses obligations

internationales; elle a accompli ses devoirs dans un esprit de loyale impartialité. Elle n'a négligé aucun effort pour maintenir et faire respecter sa neutralité.

L'atteinte à son indépendance, dont la menace (sic) le Gouvernement Allemand constituerait une flagrante violation du droit des gens. Aucun intérêt stratégique ne justifie la violation du droit.

Le Gouvernement belge en acceptant les positions qui lui sont notifiées sacrifierait l'honneur de la nation en même temps qu'il trahirait ses devoirs vis-à-vis de l'Europe.

Conscient du rôle que la Belgique joue depuis plus de 80 ans dans la civilisation du monde, il se refuse à croire que l'indépendance de la Belgique ne puisse être conservée qu'au prix de la violation de sa neutralité.

Si cet espoir était déçu, le Gouvernement belge est fermement décidé à repousser par tous les moyens en son pouvoir toute atteinte à son droit.

八一 十月二十六日 在露国本野大使ヨリ
加藤外務大臣宛

露独開戦ニ関シ報告ノ件(第二)

附屬書 露独開戦ニ関スル報告

公第一八〇号

(十一月二十五日接受)

大正三年十月二十六日

在露

特命全權大使男爵 本野 一郎(印)

外務大臣男爵 加藤高明 殿

露独開戦ニ関スル前後ノ事情ニ就テハ本年八月九日附公第一三四号ヲ以テ大要報告致置候次第有之候処本件ニ関シ曩ニ露国政府ヨリ発表ノ外交文書ニ依リ右ノ補綴トシテ次ノ通り及報告候間御査閲相成候様致度此段申進候 敬具

(附屬書)

露独開戦ニ関スル報告

一

今回歐洲ノ大戦争ハ其端ヲ埃塞両国ノ衝突ニ発シタリト雖モ之レカ首謀者ハ寧ロ独逸国ナリト云ハサルヘカラス何トナレハ埃塞両国ノ衝突ハ即チ「バルカン」半島ニ於ケル露独両勢力ノ衝突ヲ意味スルモノニシテ一旦埃塞干才相見ユ

一 歐洲開戦一件 八一

ルニ至ランカ其戦局カ同盟ノ關係上少クトモ仏独兩國ニ拡大セラルヘキハ自然ノ勢ナレハナリ独逸カ大勢ノ推移玆ニ到ルヘキヲ熟知シナカラ極力埃塞兩國ヲ支持シ同国ヲシテ塞爾比ト戦端ヲ開クニ至ラシメタルハ畢竟自己ノ関スル一大目的ヲ達センコトヲ期シタルニ外ナラサリキ即チ第一自ラ歐洲ノ覇權ヲ握ラントスルコト第二独逸民族東漸ノ妨害タル南部「スラヴ」民族ノ勃興ヲ抑圧シ其勃興ノ援助ニ依リ自ラ「バルカン」半島ノ盟主タラントスル露国ノ企圖ヲ遮ラントスルコト是也此第二目的ハ独逸ニ取りテ固ヨリ左マテ重要ノモノニアラスト雖モ埃塞兩國ニ取りテハ最も重大ナルモノニシテ現ニ埃塞兩國カ塞爾比ニ對シテ最後通牒ヲ交付セン唯一ノ目的ハ南部「スラヴ」民族ノ勃興ヲ遮止センカ為ナリ

近年南部「スラヴ」民族勃興ノ兆ヲ呈スルニ至リタルハ争フヘカラサル事実ニシテ右ハ全ク日露戦争ノ影響トシテ半島「スラヴ」民族諸小国国民間ニ發生シタル所謂国民的自覚心カ外部ヨリノ刺激ニ依リ益々興奮セラレタルニ職由センハアラス就中塞国民ノ自覚心ニ刺戟ヲ与ヘタルモノハ埃塞兩國ニシテ一九〇九年同国カ「ボスニヤ」「ヘルツェゴヴィナ」地方ヲ併合シタルコトノ如キハ最も顯著ナル一

例トス斯ノ如ク右地方ノ併有カ南部「スラーブ」民族ノ国民的自覚心ヲ刺戟シタル所以ノモノハ畢竟同地方カ同民族ノ住地ナルカ為ニ外ナラス最初埃洪国カ「ボスニヤ」「ヘルツェゴヴィナ」地方ヲ併有セントスルヤ南部「スラーブ」民族ノ祖国タル塞爾比ハ其盟主タル露国ニ依頼シテ埃洪国ノ此企圖ヲ遮止セントシテ大イニ露国ニ期待スル所アリシモ當時露国ハ日露戦争ノ創痍未タ癒エス遂ニ埃洪国ヲシテ此好機ニ乗スルコトヲ得セシメタルノミナラス一方ニ於テ露国ハ独逸ノ威圧ヲ恐レテ到底塞國ヲ支持スルコト能ハサリシヲ以テ一九〇九年三月(三十一日)塞國政府ハ一ノ宣言書ニ調印シ將來「ボ」「ヘ」兩州ノ併有ニ一切反対スルコトナク埃洪国ト善隣關係ヲ保持スヘキヲ誓フノ已ムヲ得サルニ至レリ然リト雖モ一旦勃興シ来レル塞國民ノ自覚心ハ之レカ為ニ頓挫セサルノミナラス却テ益々發揚反撥シ埃洪国ニ對シテハ挙國一致大イニ決スル所アルト同時ニ第二半島戦争ノ結果其領土ハ擴張セラレ大塞爾比國建設ノ機運玆ニ到達セルモノトシテ塞國民ノ活動ハ内外共ニ著シク遂ニ六月二十八日「サラエヴォ」ノ悲劇ヲ生スルニ至レリ

右「サラエヴォ」事件ハ「スラーブ」民族ニ對セル一般獨タル独逸外交家ハ奇貨措クヘントナシ埃洪国ヲ懲罰シテ塞國ト戰ハシメ以テ南部「スラーブ」民族ノ發展ヲ妨クルト同時ニ歐洲ノ覇權掌握ノ大目的ヲ達センコトヲ期セリト稱セラル當時独逸外交家ノ見解ニ拠レハ埃塞兩國開戦スルニ當リ露国カ埃塞戦争ノ局限ニ同意シテ之ニ干涉セスンハ幸ナルモ万一露国カ兵力ヲ以テ塞國ヲ支持スル場合ニハ独逸ハ之ニ乘シテ埃洪国ト共ニ露國ノ勢力ヲ挫クヲ得ヘシ況ンヤ露國ニ於テハ内政未タ整ハサルノミナラス彼得堡ヲ首トシテ国内諸市ニ於テハ其ノ當時大同盟罷工行ハレ而シテ同罷工ハ政治的ノ性質ヲ有シ革命運動ニ變スルノ虞ナキニアラサリシヲ以テ此際露国カ兵力ヲ以テ塞國ヲ援クルヲ得ヘキヤ疑ナキ能ハサルニ於テオヤ若シ又露國ハ塞國ヲ援ケテ独埃ト戰ヘンカ露国内ニハ必ス内乱發生スヘク加フルニ極東ニハ強國日本存在スルヲ以テ露國ニハ一定ノ兵力ヲ西伯利方面ニ備フルノ必要アルヘシ若夫レ仏國ノ露國ニ對スル援助ニ至リテハ敢テ意トスルニ足ラス英國ハ露國ト協商ノ關係アルモ戦争ニ加入スルコト無カルヘク伊國ハ独埃ト同盟關係上戦争ニ加入スヘント云フニアリタルカ如シ要之独逸外交家ハ形勢ヲ樂觀シ埃塞戦争ヲ局限シ得ストスルモ同戦争ハ三國同盟對二國同盟間ニ限ラレ從テ日本ハ勿論

逸民族ノ敵愾心ヲ奮起セシメタリ殊ニ埃國民ノ激昂ハ其極度ニ達シ該殺害事件ノ責任ハ全然之ヲ塞國民及同國政府ニ嫁シテ塞國政府ヲ攻撃シ又埃國諸新聞ハ異口同音ニ大塞爾比運動ヲ根本的ニ撲滅スルノ必要ヲ論シタリ

是ヨリ先一九一二年独逸カ三國協商ニ對抗シテ埃洪国ト共ニ軍備ヲ擴張シ之ニ對シ露國兩國モ亦其軍備擴張ニ從事スルヤ独逸ハ之ニ依リ大イニ不安ノ念ヲ抱クニ至レリ殊ニ本年六月二十五日露國下院カ陸軍擴張法案ヲ可決スルヤ独逸ハ大イニ狼狽シテ百方露國軍備擴張ノ完成ヲ妨クルノ方法ヲ講シタリト云フ

斯ノ如ク露國兩國軍備擴張ノ結果ハ自ラ独逸ノ歐洲覇權掌握ナル大目的ニ對スル一大打擊ナルト同時ニ又南部「スラーブ」民族ノ勃興即チ大塞爾比建設運動ハ独逸民族ノ發展ニ大障害アルヲ以テ独逸朝野ノ政治家間ニハ一方ニハ右覇權把握ノ為又他方ニハ大塞爾比國運動ヲ撲滅センカ為露國兩國ノ軍備擴張完成セサルニ先チ之ニ一大打擊ヲ与ヘ同時ニ露國ニ信頼シテ埃洪國領内ノ塞爾比民族ヲ指導セントスル塞國ニ大打撃ヲ加フヘシトノ説有リタルニ至レリ此ノ時ニ當リ恰モ好シ「サラエヴォ」事件ハ突然トシテ發生シ埃洪國民ノ排「スラーブ」熱ハ国内ニ充溢セリ之ヲ見

英國モ敵正中立ヲ守リ戦争ハ狹義的歐洲戰トシテ落着スヘシトノ見解ヲ有シタルモノノ如シ

右ノ見解ニ基キ埃洪國ハ独逸ト協議ノ上「サラエヴォ」事件ニ関シ七月二十三日突然塞國ニ最後通牒ヲ交付スルニ至レリ而シテ同通牒ハ列國ノ意外トスル所ナリキ尤モ独逸カ其大野心決行ノ機会ヲ待チ戦備ニ汲々タルコトハ露僞外務當局者ノ略ホテ解シ居リタル所ナリト云フモ当初世人ハ独逸カ「サラエヴォ」事件ヲ以テ戦争開始ノ機會トナシタルヲ知ラス右最後通牒ヲ以テ埃洪國ノ独断ニ出タルモノト認メタリ之カ為駐露都独逸大使カ独逸ハ塞國ニ交付シタル最後通牒ヲ予知セサリシトノ声言ヲナスヤ外務當局者及外交家ハ兎ニ角一般社会ハ同声言ヲ信シタリ然モ實際独逸大使ノ声言ハ虚偽ニシテ独逸ハ埃洪國カ塞國ニ最後通牒ヲ交付スルコトヲ前知シ居タリト云フ又通牒交付ノ当日列國外務當局者及代表者等カ或ハ外国ニ旅行シ或ハ其任地ニ在ラサリシコトハ埃洪國ノ最後通牒カ独逸以外ノ諸國ノ如何ニ意外トスル所ナリシカヲ知ルニ足レリ現ニ同通牒交付當時仏國外務大臣ハ大統領ニ隨行シテ外国ニ旅行シ塞國總理「パンツチ」氏ハ選挙運動ノ為地方ヲ巡回シ維納、伯林及巴里駐劄ノ露國各大使ハ帰國又ハ賜暇ニテ其任地ヲ離レ

「ベルグラード」駐劄露国公使ハ「ルトウイヒ」氏頓死後未タ後任者ノ任命無ク加フルニ當時彼得堡ニ於テハ労働者ノ大同盟罷工行ハレタリ此等ノ事実ハ独塊両国外交家カ塞爾比国ニ最後通牒ヲ交付スルニ際シ勘定ニ入レタル所也ト称セラル又以テ両国外務当局者カ如何ニ時機ヲ利用シタルカラ知ルニ足レリ

二

七月二十三日在「ベルグラード」露国代理公使カ外務大臣「サゾーノフ」氏ニ宛テ発シタル公電ニ依レハ同地駐在塊洪国公使カ本国政府ノ訓令ニ依リ任国政府ニ最後通牒ノ公文ヲ交付セシハ同日午後六時ナリキ塊洪国ハ同公文ニ對スル塞國ノ回答期ヲ四十八時間即チ七月二十五日午後六時マテトシ同時刻マテニ塞國政府カ塊洪国政府ニ満足ナル回答ヲ与ヘサル場合ニハ任地ヲ引揚クヘキ旨在塞自国公使ニ命セリ在塞露国代理公使カ同日附電報ヲ以テ本国政府ニ報告シタル所ニ依レハ塊洪国カ塞國ニ交付シタル最後通牒ハ「サラエヴ」事件ニ関シ塞國ニ於ケル所謂大塞爾比運動ノ中止ヲ迫リ且ツ又犯罪人処罰ニ関スル要求事項ヲ列举シタルモノニシテ此内ニハ塞國司法及行政權ヲ蹂躪シ全然同國ノ独立ヲ無視シタルノ個条存在セリ同電報ハ彼得堡ニ延

テ戦争ニシテ避ケ難クムハ吾人ハ武器ヲ執リ立ツヘシト語レリト云フ

同日塊洪国最後通牒ノ内容カ露都夕刊新聞ニ掲載セラルルヤ露國ノ輿論ハ大ニ沸騰シ諸新聞ハ其主義ノ如何ヲ問ハス異口同音ニ筆鋒ヲ揃ヘテ塊洪国ノ態度ヲ攻撃シタリ

同二十五日露国政府ハ公報ヲ以テ露國ハ這般ノ塊塞事件即チ塊洪国カ塞國ニ交付シタル最後通牒ニ関シ大イニ憂慮ス露国政府ハ同事件ノ發展ニ多大ノ注意ヲ払ヘリ露國ハ本件ニ関シ平然タルヲ得スト声明シ又同日「クラスノエセロ」野營地ニ於テハ御前會議開カレ首相以下各大臣及陸海軍各部主任者列席シ主トシテ動員ニ関スル件ヲ議シタリト称セラル又同日皇帝ハ本年八月六日以後ニ卒業スヘキ全国士官学校生徒ヲ卒業セシメ之ヲ將校トナセリ以上ノ措置ハ塊塞事件ニ對スル露国政府ノ決心ヲ示シタルモノニシテ大イニ輿論ノ歡迎ヲ受ケタリ就中露国政府ノ公報ハ國民一般ニ同情ヲ以テ迎ヘラレ諸新聞ハ政府ノ態度ニ満足ヲ表シタリ維納駐在露国代理公使ハ本国政府ヨリ塊洪国最後通牒ニ對スル塞國政府ノ回答延期ニ関シ任国政府ニ提議スヘシトノ訓令ニ接スルヤ直ニ訓令ヲ遵行シタリ然レトモ任国政府ノ態度大イニ頑強ニシテ露國ノ目的ハ遂ニ達セラレサリキ七

着シタルヲ以テ露国政府ハ同日迄右最後通牒ノ内容ヲ知ルニ由無ク外務大臣「サゾーノフ」氏ハ翌二十四日午前十一時在露都塊洪国大使ノ公文ニ依リテ始メテ同通牒ノ内容ヲ詳ニシタリト云フ

七月二十四日右最後通牒ニ對スル露國ノ態度ヲ定ムル為開カレタル閣議ニ於テ外務大臣ハ塊塞事件ニ関シ説明ヲナシ審議ノ結果閣議ハ(一)露國ハ同事件ニ對シテ傍觀者ノ位置ニ立ツ能ハス(二)露國ハ最後通牒ノ内容ヲ研究スル為之ニ對スル塞國政府ノ回答期延長方ヲ塊洪国ニ提議スヘシトノコトニ一決セリ因テ同日外務大臣ハ電報ヲ以テ在維納露国代理大使ニ訓令スルニ塞國政府ノ回答期日延長方至急任国政府ニ提議スヘシトノコトヲ以テシタルト同時ニ倫敦、巴里、伯林及羅馬駐在ノ自国使臣ニ訓電シテ本国政府カ塊洪国政府ニ向ツテ右ノ提議ヲナシタルコトヲ任国政府ニ通告セシメタリ

塊洪国ノ最後通牒ハ実ニ苛酷ナルモノナルヲ以テ同日塞爾比皇太子ハ露帝ニ長電ヲ發シ塞國ノ決心ヲ示シテ陳情スル所アリタリ又同日在塞露国代理公使カ本国政府ニ電報シタル所ニ抛レハ塞國首相「パシッチ」氏ハ同代理公使ニ向ツ

月二十五日露国代理大使ノ本国政府ヘノ電報ニ依レハ同代理大使ハ訓令ニ從ヒ當時「イシリ」ニ参内旅行中ナル塊洪国外務大臣ニ電報ヲ以テ本国政府訓令ノ次第ヲ提議シ同時ニ任国外務省政務局長「マッキオ」氏ニ話シタルニ同氏ハ右大臣ニ軫達スヘキヲ約シ且ツ外務大臣ハ露國ノ提議ヲ容ルルコト無カルヘシト言ヘリト云フ果セル哉同日塊洪国外務大臣ハ返電ヲ以テ露國ノ提議ヲ斥ケ来リタルヲ以テ同代理大使ハ直ニ其旨本国政府ニ電報セリ

茲ニ於テ塞國首相「パシッチ」氏ハ同日午後六時前即チ回答期限内ニ在「ベルグラード」塊洪国公使ヲ訪ヒテ塞爾比国政府ノ回答ヲ同公使ニ交付セリ在「ベルグラード」露国代理公使ハ同日電報ヲ以テ此事ヲ本国政府ニ報告スルト同時ニ塞爾比ノ回答全文ヲ電送セシモ此電報ハ露都ニ延着シタリ

先是独仏英伊駐在露國各大使ハ本国政府ヨリノ訓令ニ抛リ塊洪国ノ最後通牒ニ對スル塞國政府ノ回答期ニ関スル露國ノ提議支持方任国政府ニ交渉スル所アリタルヲ以テ七月二十五日電報ヲ以テ其結果ヲ各自本国政府ニ報告シタリ同報告ニ抛レハ英仏兩國政府ハ露國ノ提議ニ同意シ各々在維納自国大使ニ訓令シテ任国政府ノ注意ヲ喚起スヘキ旨約束シ

タリト雖モ独逸ハ之ニ同意ヲ与ヘサリキ現ニ在伯林露国大使ノ本省宛公電ニ拠レハ独逸外務大臣ハ露国大使ニ向ヒ埃洪国ハ露国ノ提議ヲ容レサルヘシト語り直接又ハ間接ニ露国ノ提議ヲ支持スルコトヲ拒ミタリト云フ斯ノ如ク英仏兩國ハ露国ノ提議支持ヲ誓ヒタリト雖モ埃都駐在英仏兩國大使ノ支持ハ其機ヲ失シ埃洪国ハ既ニ其ノ前ニ露国ノ提議ヲ斥ケタリ

埃洪国ノ最後通牒ニ対スル塞国政府ノ回答ハ大イニ讓歩的ノモノタリ塞国ハ同回答ヲ以テ埃洪国ノ要求ノ大部分ヲ容レ単ニ塞国内ニ於テ埃洪国ノ司法及行政權ヲ行使セントスル要求ハ独立国ノ機能ヲ無視スルモノナリトシテ之ヲ容レサリキ然ルニ埃洪国ハ之ニ満足セス直ニ自国公使ニ任地引揚ヲ命ジタリ之カ為在「ベルグラード」埃洪国公使ハ七月二十五日午後六時半公文ヲ以テ此事ヲ任国政府ニ通告シテ外交關係ヲ断ツト同時ニ館員ヲ從ヘ任国ヲ引揚ケ埃洪国ハ直ニ動員シテ軍ヲ「ドナイ」河及其支流「サワ」河兩岸ニ進メ強硬ノ態度ニ出ツルニ至レリ

埃洪国ノ強硬ナル態度ハ畢竟独逸カ裏面ニ於テ埃洪国ヲ支持シタルカ為ニシテ若シ斯ノ支持無キニ於テハ埃洪国カ斯克マテ頑強ニ出テテノト頗ル疑ハシトス

リトノ報七月廿六日露都ニ達スルヤ露国民ハ一般ニ塞国ニ同情ヲ寄セ埃洪国及其同盟国タル独逸ノ態度ヲ憎ミ挙国一致以テ埃洪国ノ措置ニ反対スルニ至レリ是ニ於テ連日露都ヲ首メ欧露各都会ニ舉行セラレタル労働者ノ政治的同盟罷工ハ全ク熄ミ愛国の示威運動ハ露都ニ行ハレ同日彼得堡ニ於テハ盛大ナル示威運動行ハレ労働者ヲ網羅シタル群衆ハ塞国公使館前ニ来リテ塞国ニ同情ヲ表シ又埃独大使館前ニ集リテ独逸民族排斥運動ヲ行ヒタリ要之露都ニ於テハ昨日ノ政府反対の同盟罷工ハ今日ノ愛国の示威運動トナリ人ヲシテ一見其變化ノ激甚ニシテ奇異ナルニ驚カシメタリ

由來露国ニハ内敵及外敵アリ内敵ハ外政多事ノ日ニ於テ之ヲ機會トシテ内ニ活動スルハ自然ノ順序ニシテ日露戰爭當時ニ於ケル露国内ノ内亂ハ之カ好適例タリ斯ノ如キハ西歐諸國ニ於テ多ク見サル所ニシテ特ニ我國ノ如キ一民族ヨリ成ル國家ニ於テハ到底有リ得サルノ現象ナリトス最モ露国ノ事情ニ通シ此ノ消息ヲ了解セル独逸人ハ本年七月ノ同盟罷工ニ重テ置キ露国政府ハ今日到底戰爭シ得サルヘク若シ露カ戰爭セハ内亂アルヘシト觀察シタルモノノ如シ此觀察ハ敢テ皮相的ノモノニアラス或ハ曰ク今回露国ノ政治的同盟罷工運動カ愛国の示威運動ニ化セシハ寧ロ変体ニシテ独

元來露国ハ戰爭ヲ欲スルモノニアラスト雖モ露国政府カ埃塞事件ニ関シ内外ノ形勢ニ鑑ミ既ニ官報ヲ以テ其態度ヲ公ニシ而シテ此ノ態度ハ国民ノ讚美スル所ナリシヲ以テ此際露国ハ飽クマテ其態度ヲ固執スルノ必要ヲ有シタリ故ヲ以テ埃洪国カ塞国ニ対シ軍事行動ニ出ツルニ於テハ露国カ塞国ヲ援クヘキハ明白トナリタルカ為英國ハ仏国ト共ニ独逸ヲシテ埃洪国ニ警告ヲ与ヘシムルヲ必要トシ独伊英四国会議ノ提議ヲナシタルモ独逸ハ事實上之ニ反対シタリキ

露国政府カ埃塞事件ニ関シ其態度ヲ公ニスル以前ニアリテハ独逸ノ提議ニ係ル埃塞戰爭局限説モ或ハ問題トナリシヤ計リ難シト雖モ露国カ其強硬ナル態度ヲ示シタル以上右局限説ハ遂ニ顧ミラルルニ至ラサリキ露国カ既ニ埃塞戰爭局限ニ反対ナル上ハ埃洪国カ塞国ニ対シ動員セハ露国カ埃洪国ニ対シ動員スルニ至ルヘキハ当然ナリ然レトモ独逸ハ当初其同盟国タル埃洪国ヲ支持シテ其動員ヲ助勢スルノ態度ニ出テタリ現ニ在倫敦露国大使カ本国政府ニ電報シタル英国外務大臣「グレー」氏ノ在倫敦独逸大使ニナシタル談話ハ此辺ノ消息ヲ詳ニスルニ足レリ

埃洪国カ塞国ニ対スル外交關係ヲ断絶シ軍事行動ニ出テタ

逸人ノ觀察ハ大イニ根拠アリ是レ即チ独逸政府カ埃塞事件ニ関シ初メヨリ露国ノ提議ヲ支持セザリシ所以ナリト

独逸政府ハ埃洪国ノ最後通牒ニ対スル塞国政府ノ回答延期ニ関スル露国政府ノ提議ヲ支持スルヲ拒ミタリト雖モ英仏兩國ハ露国ノ提議ヲ支持シタリ露国政府ハ時局ヲ平和ニ纏ムルコトニ熱心ナルモノ三国同盟ノ一角タル伊国ヲシテ埃洪国ニ注意セシムルコトニ決シ其結果露国外務大臣ハ羅馬駐在自国大使ニ訓令シ同大使ヲシテ露国カ正実ニ平和ヲ希望スルコトヲ任国政府ニ知ラシムルト同時ニ埃塞事件ハ露国ニ対シテ重大問題ナルヲ以テ露国ハ同事件ニ関シ兵力ニ訴フルノコトアルモ塞爾比ヲ援助セサルヲ得サルノ状態ニアルモノナルコトヲ告ケシメタリ

埃塞間ノ外交關係ハ断絶シタルニ拘ハラズ若シ此際埃洪国カ塞国ニ讓歩スルニ至ラハ露国ハ埃洪国ト戰爭スルノ必要無キヲ以テ露国政府ハ埃洪国政府ト直接談判ヲ開キ塞国ニ対スル要求事項ノ軽減ニ就キ直接間接ニ埃洪国政府ニ提議スル所アリタリ現ニ七月二十六日露国外務大臣ハ維納駐在自国大使ニ電訓スルニ埃洪国カ塞国ニ交付シタル最後通牒中ニハ實際塞爾比ニ於テ同意シ難キ点アルヲ以テ露国政府ハ露都駐在埃洪国大使ト直接談判シ右通牒ノ文句ヲ修正シ

以テ塞国ヲシテ埃洪国ノ要求ニ満足セシメタキニ就キ本件ニ関シ任国政府ト交渉スヘシトノコトヲ以テシタリ又同日露国外務大臣ハ電報ヲ以テ伯林駐在露国大使ニ訓令シテ右在維納露国大使宛訓令ノ内容ヲ任国政府ニ通告セシムルト同時ニ埃国政府ヲシテ露国政府ノ提議ニ同意セシムル為獨逸政府ヨリ埃国政府ニ忠告ヲ与フルコトヲ希望スル旨任国政府ニ申入レシメタリ

右露埃直接談判ニ関スル露国ノ提議ニ前後シテ英国ハ露埃兩國ノ紛議解決ニ関シ獨逸伊英四国会議召集ノ必要ヲ認め先ツ露国ノ同意ヲ求メタリ

露国ハ之ニ対シテ同意ヲ表シタルヲ以テ英国政府ハ更ニ之ヲ列国ニ提議シタリ之ニ対シ伊兩國ハ賛成ノ意ヲ表シタリト雖モ獨逸ハ言ヲ左右ニ託シ同意スルコトヲ肯セサリキ即チ七月二十七日在巴里露国代理大使カ本国政府ニ電報シタル所ニ依レハ同地駐在獨逸大使ハ獨逸カ四国会議ノ召集ヲ好マサルコトヲ明言シタリトアリ尚獨逸カ四国会議ノ提案ニ反对シ埃洪国ヲシテ讓歩ノ態度ニ出テシムルコトニ絶對的反对ヲ試ミタルコトハ七月二十七日附ヲ以テ伯林駐在露国代理大使ノ本国政府ニ宛テタル電報ニ依リ明白ナリトス獨逸ノ埃洪国支持ハ同国ヲシテ益々塞国ニ対シ強硬ノ

三国外務当局者ノ努力ハ遂ニ無効ニ帰シ七月二十八日埃洪国力塞爾比国ニ向ツテ宣戰ヲ布告スルニ至レリ此報ノ露都ニ達セシハ同日午後六時ニシテ同夜市内ニ於テハ又々愛國的示威運動行ハルルニ至レリ此等ノ示威運動ハ排獨の性質ヲ帶フルハ言ヲ俟タス埃洪国及獨逸国大使館ハ群衆ニ襲ハルルノ危険アルヲ以テ露国政府ハ憲兵ヲ以テ兩大使館ヲ護衛セシメ更ニ公報ヲ以テ国民カ政府ノ政策ニ同情ヲ寄スルコトヲ喜フト同時ニ公衆ニ対シ静肅慎重ノ態度ヲ求メ政府ハ露国ノ品位及体面ヲ保護スルニ違算ナカルヘシト声明シタリ七月二十九日埃洪軍ノ「ベルグラード」砲撃ニ関スル報道ノ露都ニ達スルヤ露国政府ハ一部ノ動員ヲ行ヒ且ツ芬蘭灣ノ燈火ヲ消シ其航海ヲ禁止シ又西部国境ニ於テ空中飛行ヲ禁シ其他軍事ニ関スル諸般ノ措置ヲナセリ

露国ノ一部動員ハ埃洪国ノ動員ニ対シテ行ハレタルモノナリト雖モ獨逸ハ之ヲ以テ直ニ獨逸對抗ノ意味トナセリ同日露国外務大臣カバ里駐在露国大使ニ電報スル所ニ拠レハ在露都獨逸大使ハ同大臣ニ向ツテ露国カ動員ヲ中止スルニアラサレハ獨逸ハ之ニ対シ動員スルニ至ルヘシト語レリトアリ

従来英仏兩國ノ態度ハ稍々鮮明ヲ欠クモノアリシカ仏国大

態度ヲ執ラシムルニ至レリ而シテ獨逸ノ斯ノ如キ態度ハ畢竟内政的關係上露国カ今日兵力ニ訴フルモノニアラスト判断シタルト同時ニ露国ノ軍備ハ年ヲ経ルニ從ヒ擴張セララルルヲ以テ「ボスニヤ」「ヘルツェゴヴィナ」事件當時ノ例ニ倣ヒ露国ニ対シ精神的又ハ物質的打撃ヲ与フルハ此ノ時ナリト觀察シタルカ為ニ外ナラス左レハ露国政府カ埃洪国ノ對塞態度ニ対シ傍觀スルコト能ハストノ声明ト之ニ対スル露国国民ノ挙国一致ノ満足トハ獨逸兩國外交家ノ意外トシタル所ナルモ埃洪国政府ハ獨逸カ極力自己ノ後援ヲ為スノ故ヲ以テ其強硬ナル態度ヲ持續シ露埃直接談判ニ関スル露国政府ノ提議ヲ拒絕シタリ七月二十八日露国外務大臣カ倫敦駐在露国大使ニ与ヘタル訓電ハ以テ這裏ノ消息ヲ詳ニスルヲ得ヘシ其内容ニ曰ク「露都駐在獨逸大使トノ談話ヨリ得タル感想ニ依レハ難関ヲ通過スルノ鍵ハ伯林ニ在リ獨逸ハ埃洪国カ平和の態度ニ出テサルコトヲ幸トセルモノノ如シ獨逸政府ハ危機ノ發展ヲ遮ルヲ得ルノ位置ニ在ルニ拘ハラス埃洪国ニ対スル塞国ノ回答ヲ以テ不十分ナリトセリ状態右ノ如クナルヲ以テ英国政府カ他国政府ニ率先シ伯林政府ニ警告ヲ与ヘンコトヲ希望ス」ト又以テ獨逸兩國ノ態度カ如何ニ頑強ナリシカヲ知ルニ足ラン左レハ露英仏

統領及外務大臣バ里ニ帰着スルヤ仏国ハ其決心ヲ公ニシ英国モ亦其態度ヲ明ニスルニ至レリ七月二十九日在巴里露国大使カ本国政府ニ電報スル所ニ拠ルニ仏国外相ハ帰來草々同大使ニ向ヒ仏国ハ同盟ノ關係上露国ト態度ヲ一ニスヘシト語レリトアリ而シテ又英国ニ於テハ外務大臣ハ會議ニ於テ英国カ露英兩國ト態度ヲ同ジフスヘシト声明シタリ英仏兩國カ露国ト同一態度ヲ執ルコト明白トナルト同時ニ露国政府ノ政策ハ輿論ノ大イニ歡迎スル所トナレルヲ以テ同政府ハ獨逸ノ動員ヲ意トセス益々強硬ノ態度ヲ以テ其動員ヲ繼續シ塞国ノ支持ニ任セリ此事ハ七月三十日附露国外務大臣ノ在外使臣ニ宛テタル電報中ニモ明白ナリ其内容ニ曰ク露国外務大臣ハ獨逸大使カ露国ハ塞国ノ獨立保全ヲ害セストノ埃洪国ノ誓約ニ満足セサルヤト質問シタルニ對シ露国ハ埃洪国カ埃塞問題ノ歐洲一般の性質ヲ有スルモノナルコトヲ認め其塞国ニ交付シタル最後通牒ノ要求事項中同國ノ主權ヲ害スル条項ヲ除クニ於テ動員ヲ中止スヘシト同日露国ハ芬蘭ニ戒嚴令ヲ布キ又全国ニ自動車徵發令ヲ布ケリ而シテ此ノ日伯林駐在露国大使カ獨逸總動員ノ決行ヲ電報シ來ルヤ翌三十一日御前會議開カレ其結果同日ヲ以テ露西亜全国ノ總動員令下ルニ至レリ

露国カ総動員ヲ行フヤ独逸ハ露国ニ先シシ事實動員シタルニ拘ハラズ露国ヲシテ動員ヲ中止セシメントシ七月三十一日夜半在露都自国大使ハ外務大臣「サゾーノフ」氏ヲ大臣官邸ニ訪問シ本国政府ノ名ヲ以テ露国ノ対独動員並ニ対埃動員ハ十二時間内即チ八月一日正午迄ニ之ヲ復員セサルニ於テハ独逸ハ之ニ対シテ動員ヲ行フヘントノ最後通牒ヲ手交シタリ而シテ独逸大使ノ大臣官邸ヲ去ルヤ外相ハ英仏兩國大使ト協議スル所アリ彼得堡ニ於テハ同日ヲ以テ戒嚴令布カレタリ八月一日「ペテルホフ」ニ於テ御前會議アリ独逸ノ最後通牒ニ関シ議スル所アリ而シテ其結果該通牒ハ挑発的ノモノナルヲ以テ露国ハ之ヲ拒絶シ何等回答ヲ与ヘサルコトニ決シ「キエフ」「リバウ」「リフリヤンド」「クルランド」地方ニ戒嚴令ヲ布キタリ独逸大使ハ露国ノ回答ニ接セサリシヲ以テ八月一日午後七時十分外務大臣ヲ訪問シ露国ニ対スル独逸ノ宣戦ニ関スル公文ヲ同大臣ニ交付シ八月二日大使館員ヲ率キテ露都ヲ引揚ケタリ先是在露都仏国大使カ本国政府ニ対シテ最後通牒交付ニ関シ電報スルヤ八月一日仏国大統領ハ露国トノ同盟条約ニ則リ露国ト態度ヲ一ニスルノ目的ヲ以テ動員令ヲ発シタリ白耳義モ亦仏国ト同時ニ動員ヲ行ヘリ英国ハ仏国ト共ニ露国ト其態度ヲ

其結果ヲ俟タスシテ陸海軍ヲ動員セリ此事カ独逸ニ対シテ危険ナルヲ以テ独逸ハ露国ニ動員ノ中止ヲ促シタルニ露国ハ之ヲ拒絶シタリ故ヲ以テ今ヤ独逸ハ露国ト交戦国ノ關係ニ在ルモノナリト

八月二日露国外務大臣ハ独逸カ露独外交断絶ノ罪ヲ露国ニ嫁セントスルコトヲ難シ独逸ハ列国間ニ未タ談判繼續中露国ニ対シ宣戦ヲ布告シタルモノニシテ国交断絶ノ責ハ独逸ニ在ル旨在外使臣ニ電報シ同時ニ外務省ハ同日官報ヲ以テ露独国交破裂ノ顛末ヲ公ニシタリ

同日皇帝ハ独逸ニ対シテ戦ヲ布告スルノ詔勅ヲ下シ彼得堡軍管司令官尼古米親王ヲ陸海全軍司令官ニ任シ冬宮ニ於テハ皇帝親臨戰勝祈禱式行ハレ式後皇帝ハ陸海軍人ニ勅語ヲ下シ敵ノ一兵カ露国領土内ニ在ル間ハ戰爭ヲ繼續スヘシトノコトヲ以テシ士氣ヲ鼓舞セラレタリ

同日八月八日ヲ期シ臨時議會召集ノ勅令發布セラレ軍事ニ関スル記事ヲ新聞雜誌ニ掲載スルコトヲ禁スルコトニ関シ勅令ノ公布アリタリ

露独戰爭ニ就キ仏国ハ露国ト同盟ノ關係上当然戰爭ニ加入スヘキヲ以テ独逸ハ露国ニ対シ宣戦スルト同時ニ仏国ニ最後通牒ヲ送レリ然ルニ仏国ハ之ニ対シ総動員ヲ以テ答ヘタ

同シフスルコトニ決シタルニ拘ハラズ當時直ニ動員シ其態度ヲ明カニスルコトナカリキ故ヲ以テ露国ハ英国ノ態度ニ懸念シ英国カ中立ヲ守ルコトナキヤヤ憂慮シタリ何トナレバ英国カ中立ヲ守ル場合ニハ独逸ハ「バルチック」海ニ制海權ヲ得テ「クロンスタット」ヲ砲撃スヘケレハナリ當時露都ニ於テ宮廷及中央政府カ莫斯科ニ移転スヘントノ風説盛ニ行ハレタルハ斯ノ危険アリシカ為ナリ然リト雖モ英国カ露仏ト其態度ヲ同シフスヘキコトハ英国外務大臣ノ声言ニテ之ヲ知ルヲ得ヘシ英国カ動員シテ其決心ヲ示サルハ独逸ニ対シテ開戦スルノ口実ヲ有セサリシカ為ナリ英国カ歐洲戰爭ニ加入スルノ口実ハ白耳義国ノ中立問題ニシテ独逸カ仏国ト戰爭スル場合ニ同国ノ中立ヲ破ルコトハ英国ノ忍フ能ハサル所ナリ故ヲ以テ英国政府ハ独仏兩國間ノ国交破ルルニ至ルヤ独仏兩交戦国ニ向ツテ交戦国ハ白耳義ノ中立ヲ尊重スヘキカ否ヤヲ確メタリ然ルニ仏国ハ之ニ対シ同中立ヲ尊重スヘキコトヲ英国ニ誓ヒタリト雖モ独逸ハ英国ニ対シ具體的の回答ヲ与フルコトナカリキ

独逸ノ露国ニ交付シタル開戦ニ関スル公文ニ依レハ独逸ハ露独兩國外交破裂ノ責ヲ露国ニ帰セリ曰ク独逸ハ英国ト交渉シテ露埃兩國間ニ仲裁ノ勞ヲ執リタルニ拘ハラズ露国ハ

ルヲ以テ独逸ハ局外中立国タル「リニクセンベルグ」及白耳義兩國ヲ經テ軍ヲ仏国ニ進ムルコトニ決シ兩國ノ中立ヲ破リテ軍ヲ其領土内ニ入レ八月四日ヲ以テ仏国ニ宣戦ヲ布告シタリ先是独逸カ白耳義ノ中立ヲ破リ同国ニ最後通牒ヲ発シタルコトハ一八三一年同国中立ニ関スル條約ニ調印シタル諸国殊ニ英国ヲ激昂セシムルノ因トナレリ茲ニ於テ英国ハ断然独逸ニ対シ宣戦ヲ布告スルニ決シ八月三日英国外務大臣ハ議會ニ於テ時局ニ関スル演説ヲナシテ英国ノ決心ヲ明ニシ議會ハ軍事費五千万磅ノ支出ヲ可決シタリ八月四日英国ハ独逸ニ最後通牒ヲ送り同月五日独逸ニ対シテ宣戦ヲ布告シタリ

仏英兩國カ露国ト共ニ共同ノ敵ト戦フコトトナルヤ露国官民ハ大ニ勇氣ヲ鼓舞シ八月五日夜群衆ハ在露都独逸大使館ヲ破壊スルニ至レリ尚伊国カ三国同盟ノ一角タルニ拘ハラス八月二日局外中立ヲ宣言シタルコトハ露国上下ヲ安堵セシメタリ

今回ノ歐洲戰爭ハ最初埃塞國間ノ葛藤ニ端ヲ啓キタルカ露国カ兵力ヲ以テ塞国ヲ支持シタル為遂ニ全歐ノ禍乱トナルニ至レリ当初露仏白英四國ハ独逸ト戦フノミニシテ四國ト埃洪國トノ外交關係ハ依然繼續シタリ然ルニ八月六日在露

都埃洪国大使カ露国政府ニ開戦ニ関スル公文ヲ交付シ八月七日大使館員ヲ率キ任国ヲ引揚ケ茲ニ露埃ノ国交断絶スルニ至ルヤ英仏白三国モ亦埃洪国外交關係ヲ絶チ戦争ノ区域ハ大ニ拡張セラレ戦局ハ独埃對露英白塞及黒山国ニ連スルニ至レリ埃洪国ハ露国ニ對スル開戦ニ関スル公文ヲ以テ露国カ埃塞紛議ニ関シテ執リタル脅迫の態度及露国カ此ノ紛議ニ依リ独逸ニ對シ軍事行動ニ出テ之カ為獨露交戦状態ニアル事實ニ鑑ミ自今露国ト戦争關係ニ在ルモノト認ムト声明セリ

八月八日露帝ハ埃洪国ノ宣戦布告ニ對シ埃洪国ニ向ツテ宣戦ノ詔勅ヲ下シタリ此日露国ニ於テハ臨時議會開会セラレ同日午前十一時皇帝ハ冬宮ニ於テ上下兩院議員ヲ集メ詔語ヲ下サレタリ兩院議長ハ之ニ對シ各自ニ奉答文ヲ朗読セリ同日午後三時下院ニ於テ開院式行ハレ式後議長ハ一場ノ愛国的演說ヲナシ滿場各派議員ノ喝采ヲ博セリ議長ハ塞爾比及黒山国兩議會ヨリ露国議會ニ送リタル電報ヲ朗読シ又傍聴席ニ在リタル英仏兩大使及塞白兩公使ニ挨拶ヲナスヘキノ提議ヲナシ滿場ノ贊同ヲ得全院議員ハ外交官席ニ於ケル右外国使臣ニ挨拶ヲナシタリ同日議會ニ於テハ總理外務及大蔵三大臣ノ演說アリ三大臣ノ演說ハ滿場議員ニ喝采セラ

ノ一トナレリトシテ我態度ヲ歡迎シ露国民ハ挙テ赤心ヨリ欣喜ノ色ヲ漏ラシ有力ナル新聞ニシテ日露同盟締結ノ必要ヲ論スルモノ少カラス

八三 十月二十九日 在露国本野大使ヨリ 加藤外務大臣宛(電報)

露土兩國間国交断絶ニ関スル件

露国政府ハ在土耳其其露国大使ニ引揚ケテ命シタリ露国駐劄土耳其公使ハ二三日中ニ引揚クルコトトナルヘシ

八四 十一月二日 在仏国石井大使ヨリ 加藤外務大臣宛(電報)

仏露英三国ト土国トノ国交断絶ニ関スル仏国政府ノ「コムミュニケ」要領報告ノ件

第九九号 (十一月四日接受)

十一月二日発表仏国政府 Communiqué 要領

開戦以來仏国政府ハ英露政府ト共ニ頻次土耳其其政府ニ向ツテ土耳其カ中立ヲ守ルニ於テハ戦後ニ至ルモ其独立ト領土保全トヲ尊重スヘシトノ確保ヲ与ヘタリ其後不幸ニモ土耳其

レ議會ハ政府ノ政策ヲ是認シ滿場一致ヲ以テ政府ノ提出ニ係ル戦時財政政策ニ関スル二法律ハ之ヲ委員會ニ附スルコトナク討議ヲ用ヒス即座ニ可決シ之ヲ上院ニ廻ハシ上院モ亦直ニ之ヲ可決シ即日兩院ノ閉会ヲ見タリ兩院ヲ通過シタル二法案(一)戦時財政措置ニ関スル法律(二)戦時国庫財源増加措置ニ関スル法律ハ八月九日裁可セラレタリ先是独逸カ露国ニ宣戦ヲ布告スルヤ独逸ハ波蘭ニ於テ露国防備策アラサルヲ機トシ直ニ軍隊ヲ同地方ニ入レ同月四日独逸斥候隊ハ「カリレ」「ベンジン」「チェンストホーフ」諸市ヲ占領シタリ独逸ハ埃洪国ト共ニ兵ヲ露領波蘭ニ進ムルト同時ニ波蘭人ヲシテ独逸ノ治下ニ立タシムルノ目的ヲ以テ波蘭地方ニ檄文ヲ配布シタリ其後露国ノ作戦計畫ハ着々行ハルルニ至リタルヲ以テ露国ハ波蘭ヨリ独埃兩國兵ヲ驱逐スルノ作戦ニ出ツルト同時ニ八月十四日総軍司令官尼古來親王ハ波蘭ニ檄文ヲ配布シ波蘭人ニ広大ナル自治ヲ与フヘキヲ約シ「スラブ」民族ハ須ラク一致シテ共同ノ敵ト戦フヘシト宣セリ

八月十六日我日本カ独逸ニ最後通牒ヲ交付シタルコトハ露国朝野ニ好感ヲ与ヘ同二十三日日本ハ独逸ニ宣戦布告シタリトノ報露京ニ達スルニ至ルヤ露国ノ輿論ハ日本ハ同盟軍其ハ屢々中立違反ノ行為ヲ敢テシ陸海ノ要職ヲ独逸士官ニ与ヘ Goeben Breslau ニ對スル処置ニ至リ殊ニ怪愕ニ堪ヘタリ十月二十九日土耳其軍艦ハ乱暴ニモ黒海ノ露領ヲ砲撃シ仏国郵船 Portugal 船員ノ多数ヲ殺セリ仏露英三国政府ハ土耳其ノ斯カル行為ヲ以テ或ハ土耳其ノ主權ヲ窺奪セントセル独逸士官ノ発意ニ出テタルヲ推察シテ十月三十一日土耳其ニ向ツテ直ニ独逸士官全部ヲ解雇シテ独逸ト分離スヘキコトヲ提議セルニ土耳其ノ回答ハ其軍艦ヲ海峡内ニ召還シテ英露仏三国ト平和ヲ維持セント欲スル旨ニ止マリリスク土耳其カ誠意ヲ表セス我要求ニ応セサルカ故ニ三国大使ハ各本国政府ノ命ニ依リ任地ヲ去リ外交關係ヲ断絶セリ土耳其ニ於ケル仏国人ノ利益ハ米国外交關係ヲ保護ニ

Palastine ニ於ケル同利益保護ハ西班牙代表者ニ託セリ

八五 十一月三日 在露国本野大使ヨリ 加藤外務大臣宛(電報)

露国ノ對土国宣戦布告ノ件

第六三〇号

露国ハ土耳其ニ對シ十一月二日宣戦ヲ布告セリ

八六 十一月五日 在本邦英国大使館ヨリ
日本外務大臣宛

英土兩國交戦状態宣言ニ関スル英国外務大臣ノ
訓電写送附越ノ件

London, dated Nov. 4th, 1914.

Telegram from Sir E. Grey,

You should inform Minister for Foreign Affairs that a proclamation will be issued announcing that a state of war exists between us and Turkey owing to the hostile acts which the Turkish forces under German officers have committed. The date of issue will probably be to-morrow.

The Turkish Ambassador in London has asked for his passports and will leave the same day. His Excellency has been informed by me that unless Turkey sends away the German Military and Naval Missions there is no chance that the hostilities between Turkey and the Allies can be terminated, for, as long as they remain in Turkey, the German Officers will not abstain from making war.

British Embassy
Tokyo

Tokio, November 5th, 1914.

八九 十一月二十一日 在英国井上大使ヨリ
加藤外務大臣宛

英土兩國間国交断絶ノ顛末並ニ右ニ関スル英国
白書送付ノ件

附屬書 英土国交断絶顛末ニ関スル英国政府白書摘要

公第二三四号 (大正四年一月四日接受)

大正三年十一月二十一日

在英

特命全權大使 井上勝之助(印)

外務大臣男爵 加藤高明殿

英土国交断絶ノ經過ニ関スル英国政府ノ白書今般公表相成候処右ハ土国ノ歐洲戦争参加ニ最モ重大ナル利害關係ヲ有スル英国政府カ如何ニカシテ土国ノ中立ヲ維持セシメントシ再三土国カ中立違反ノ行為アリタルニ拘ハラス隱忍之ヲ寛恕シ強硬手段ニ出ヅルヲ避ケタルト土国総理大臣以下平和論者カ頻ニ土国中立ヲ云謂シツツアル間ニ独逸ヲ背後ニセル陸軍大臣以下ノ一派カ隠然其勢力ヲ張り遂ニ土国ヲシテ歐洲戦乱ノ渦中ニ投セシメタル跡ヲ明ニスルモノニ有之候ニ付御参考ノ一端迄ニ別紙ノ通其概梗ヲ訳出致シ候尚右ニ関スル白書十部ハ以別便及御送付候間御査収相成度此段
申進候 敬具

八七 十一月六日 在本邦英国大使館ヨリ
加藤外務大臣宛

英土開戦通告ノ件

November 6, 1914.

Dear Excellency

In continuation of my Communication of yesterday I beg to inform you that I have received a telegram from Sir Ed. Grey stating that Great Britain is at War with Turkey.

Yours Sincerely
(Signed) Conyngham Greene

八八 十一月六日 在仏国石井大使ヨリ
加藤外務大臣宛(電報)

仏国ノ仏土兩國間交戦状態公表ノ件

第一〇〇号

仏国外務大臣ハ仏土間戦争状態ニアル旨十一月六日公表セリ

(附屬書)

英土国交断絶顛末ニ関スル英国政府白書摘要

独仏露ノ開戦ト共ニ英国政府ハ八月三日駐土代理大使ヲシテ土国カ「アームストロング」会社ニ注文中ナル「オスマン」一世ヲ英国政府ニ引取ルヘキ旨ヲ土国政府ニ申入レシメタルニ土国総理大臣ハ土国カ戦争ニ加ハラサルニ英国政府カ此ノ如キ行動ニ出テタルハ友好的ナラストテ不満ノ意ヲ表シ且ツ今次ノ戦乱ニ際シ土国ハ厳正中立ヲ守ルヘク動員実行ノコトニ決定シタレトモ右ハ其完成ニ数ヶ月ノ時日ヲ要シ将来万一ノ場合ニ備フルノ必要上已ムヲ得サルニ出テタルモノナルコト並ニ独逸軍事顧問ノ存在ハ何等政治上ノ意味ナキモノナルコトヲ明言セリ英国政府ハ土国軍艦ノ引取ニ対シテハ本意トスル所ナルモ右ハ此際ノ危機ニ際シ英国ニ在ル使用シ得ヘキ軍艦ヲ保有スルノ必要ニ迫ラレタルニ因ルモノニシテ土国カ受クル金銭上其他一切ノ損害ニ対シテハ英政府ニ於テ十分ノ考量ヲ加フヘキ旨ヲ土国政府ニ申入レタルカ土国人民ノ英国ニ対スル敵愾心ハ本件ノ為頗ル熾盛トナレリ

八月十一日独国軍艦「ゲーベン」「ブレスラウ」カ「ダーダネルス」ニ入ルヤ英国政府ハ直ニ土国政府ニ対シ独国軍

艦ヲシテ海峡ヲ通過セシメサルヘキコト、二十四時間内ニ立去ルカ然ラサレハ武装ヲ解除セシムヘキコトヲ申入ルヘキ旨ヲ駐土代理大使ニ訓令シタルニ之ト行違ニ土国政府ハ英国政府ニ対シ前記二艦ヲ買入レタルコト其乗組員ハ総テ独逸本国ニ帰還セシムヘキコト並ニ右二艦ノ購買ハ英国註文中ノ軍艦ニ代ルモノニシテ多島海問題ニ関シ希臘ト折衝上互角ノ地步ヲ占ムルノ必要ニ出テ敢テ露国ニ對抗スルノ考ニ出テタルニ非ル旨ヲ申入レタリ而シテ土国海軍大臣ハ英国海軍顧問「アドミラル・リムパス」ニ右二艦ノ艦装方ヲ依頼シ且ツ之ヲ同提督ノ麾下ニ置クヘキ旨ヲ約束シタルニ拘ハラヌ数日ヲ出テスシテ同提督以下英国海軍將校ノ転職ヲ命シ土国將校ヲ以テ之ニ代ヘ之カ説明トシテ八月十六日総理大臣ハ英国代理大使ニ対シ土国ハ中立ヲ嚴守スヘク且ツ「ゲーベン」「ブレスラウ」ハ土国將校ニ於テ之カ操縦ニ不便ヲ感スルヨリ若干独逸將校ヲ乗組マシメ置クノ必要アリ英国提督ノ下ニ土独兩國ノ將校ヲ置クハ不便ナルヲ以テ余儀ナク提督以下ノ転職ヲ見ルニ至リタル次第ナリト弁解セリ

先是前記独逸軍艦ノ「ダーダネルス」ニ入ルヤ海峡内ノ英国商船ノ臨検ヲ行ヒ仏国商船内ノ無線電信機械ヲ破壊シ英

際トナリ越エテ同二十日土国海軍大臣ハ英国大使ニ対シ左ノ如キ提議ヲ行フニ至レリ

一、「カピチュレーション」ノ撤廃

二、英国ニ註文中ノ軍艦二隻ヲ直ニ土国ニ返還スルコト

三、土国ノ内政ニ干渉セサルコト

四、「ブルガリア」カ三国協商側ニ反対シテ戦争ニ加入スル場合ニハ土国ハ西部「スレース」ノ返還ヲ得ヘキヤ否ヤ

五、希臘諸島ノ返還

形勢右ノ如クナルヲ以テ英国政府ハ仏露兩國政府ト協同シ其各自駐土大使ヲシテ土国政府ニ於テ直ニ「ゲーベン」「ブレスラウ」乗組ノ独逸將校水兵ヲ帰国セシメ又商船ノ平和的且ツ故障ナキ通航ニ関スル一切ノ便宜ヲ与ヘ且ツ戦争中一切ノ中立義務ヲ遵守スヘキコトヲ文書ヲ以テ保証スルニ於テハ三国政府ハ「カピチュレーション」ニ関シテハ現代ノ須要ニ適合スヘキ司法制度ノ確立次第直ニ領事裁判制度ヲ撤回スルコトニ同意スヘク尚三国ハ土国ノ独立ト領土保全ヲ尊重スヘク且ツ戦後講和条件ニモ何等土国ノ独立ト領土保全ヲ害スルカ如キ事項ヲ加ヘサルヘキ旨保障ヲ協同ニ書面ヲ以テ与フヘキコトヲ土廷ニ申入レシメタル処八月

国商船ヲ抑留スル等ノ不法行為アリ英国政府ハ直ニ嚴重ナル抗議ヲ申込ミタル処土国総理大臣ハ右ハ一切自分ノ与リ知ラサル処全ク陸軍側ノ処置ナリト弁疏シ八月十三日在英大使ヲシテ公文ヲ以テ土国ハ今次ノ戦乱ニ際シ敵正中立ヲ維持スル決心ナル旨ヲ英国政府ニ申入レシメタリ次ニ駐土英国大使「サー・ルイ・マレット」土都ニ帰任土国首相ニ面会ノ際改メテ独逸軍艦ニ関スル土国ノ中立違反ヲ責メ且ツ現時ノ土国政府ハ全然独逸ノ願使スル処トナレル觀アル旨ヲ述ヘタルニ同大臣ハ土国ノ中立違反ヲ認メ頗ル之ヲ遺憾トシ暫時ノ猶予ヲ得テ必ス独逸乗組員ヲ本国ニ帰還セシムヘキ旨ヲ述ヘタルヲ以テ同大使ハ土国ニシテ敵ニ中立ヲ維持スルニ於テハ三国政府ハ土国ノ独立及領土主權ヲ擁護スヘキ旨ノ保障ヲ与フヘシトノ本国政府ノ内訓ヲ受ケ居ルコトヲ答ヘ尚英国外務大臣ハ土国大使ニ対シ土国ハ何等英国ニ対シテ危惧スル理由ナキ旨並ニ土国カ中立ヲ嚴守シ「ゲーベン」「ブレスラウ」ヲ完全ニ土国ノ有トシ独逸乗組員ヲ本国ニ帰還セシメ英国商船ニ対シテ通商航海ノ便宜ヲ与フルニ於テハ英国政府ハ土国ノ領土主權ヲ保持スヘキ考ナル旨ヲ申聞ケタルニ拘ハラヌ八月十六日「ダーダネルス」ニ水雷ヲ敷設シ並ニ土国カ着着戦備ヲ整ヘ居ル証跡明

二十一日土国総理大臣ハ英国大使ニ対シ土国ハ此際三国協商側ヨリ出来得ル丈ノ援助ヲ得タク土国ノ独立ト領土保全ニ関スル文書ノ宣言ヲ得ルコト早ケレハ早キ丈好都合ナリト述べ且ツ「ゲーベン」「ブレスラウ」ノ独逸乗員ハ速ニ之ヲ帰還セシムヘク土国ハ毫モ其ノ艦隊ヲ独逸化スルノ意図ナキコトヲ言明セリ於是英国大使ハ八月二十五日附ヲ以テ本国政府ニ対シ土国ニ於テ中立維持派ノ勢力漸次加ハリツツアル様觀測セラルトノ見込ヲ報告シタル次第ナルカ而カモ此ノ間「ダーダネルス」ニハ水雷ヲ敷設セラルルコト一再ニシテ止マラス海峡ノ兩岸ニハ巨砲ヲ据ヘ付ケ且ツ独逸海陸兵及軍需品ノ土都ニ向ツテ輸送セラルルモノ陸續踵ヲ接シ更ニ八月二十八日在「カイロ」英国代表者ヨリ埃及方面ニ向ヘル土国ノ軍事的活動ノ敏活ヲ加ヘ来レルト並ニ英国反対ノ氣勢ヲ昂ムル為ニ印度「イーメン」埃及方面ニ密使ヲ派遣セリトノ風説アル旨ノ電報到達スルニ至リタルヲ以テ英国政府ハ九月一日土国政府ニ対シ埃及政府カ「スエズ」運河兩岸ノ警備ニ関スル必要ナル措置ヲ執リタルコト右ハ運河ノ安全ト其故障ナキ運用ノ為必要ナルコト並ニ「シナイ」地方ニハ英国側ニ於テ何等軍事的措置ヲ執ル意思ナキコトヲ通牒セシメ其後更ニ「ゲーベン」「ブ

レスラウ」二艦ハ独国乗組員ノ搭乗シ居ル間ハ英国側ニ於テ之ヲ独国軍艦ト認メ適応ノ措置ヲ執ルヘシトノ旨ヲ警告セシメタルカ英国大使カ時局ハ尚救済ノ望ナキモノニアラスト累次報告ヲ繰返シツツアル間ニ形勢ハ日々險悪ヲ加ヘ遂ニ九月八日英国政府ハ其海軍顧問ヲ引揚クルコトヲ安全ト認メ駐土大使ノ意見ヲ徴シ之ヲ撤退セシムルコトニ決シタリ

越エテ九月九日土国ハ「カピチュレーション」撤廃ノ通告ヲ各国代表者ニ交付シ列国ハ之ニ対シ協同抗議ヲ申入ルル処アリシカ英国政府ハ九月二十三日駐土大使ヲシテ土国政府ニ対シ左ノ意味ノ警告ヲ与ヘシメタリ

英国政府ハ其艦隊ヲ以テ土国ニ対シ何等ノ抗敵行為ヲ開始セントスルノ意図ナシ英国カ何等抗敵行為ヲ執ラザリシトノ故ヲ以テ土国政府ニ於テ英国カ土国ノ行為ヲ以テ中立違反ニアラスト認メ居ルモノナリトノ誤想ニ陥ルカ如キコトアルヘカラス独国ノ将校士卒ハ今ヤ土国艦隊及「ダーダネルス」防備ニ増遣セラレツツアリ土国ハ独国海軍将卒ヲ本国ニ帰還セシムル旨ヲ約束シ乍ラ之ヲ履行スルコトヲナサス却テ陸路ヨリ益々独逸ノ士卒ヲ招致シ「ゲーベン」「プレスラウ」ハ今ヤ現実ニ独人ノ掌中ニア

ル総理大臣ノ誠意ヲ諒トシ尚引続キ従来ノ隱忍政策ヲ執ルヲ可トス総理ハ非常ナル圧迫ニ堪ヘテ平和ヲ維持シ且ツ漸次其勢力ヲ得ツツアルモノノ如シ」ト報告セリ

然ルニ「シリア」方面ニ於ケル「モスル」「ダマスカス」軍団ハ動員以來益々其兵ヲ南方ニ送り埃及及「スエズ」運河方面侵入ノ計画並ニ其ノ歩武ヲ進メ軍需品ノ聚積、道路ノ改修、各地ニ於ケル独逸將校ノ活動一層ノ敏活ヲ加ヘ遂ニ十月二十八日在「カイロー」英国代表者ヨリ二千ノ武装セル「ベドウィン」カ埃及国境内二十哩ノ地「マクダバ」ニ到レルヲ報シ又土国砲艦四隻「アレキサンドレット」ヲ出テントストノ情報ヲ電致スルニ至リタルヲ以テ英国政府モ遂ニ駐土大使ヲシテ土国政府ニ対シ「ゲーベン」「プレスラウ」ニ独国人ノ乗リ組ミ居ル間ハ土国艦隊ハ事実独逸ノ管理ノ下ニアル次第ニ付其行動ハ戰意ヲ以テスルモノト看做ササルヘカラス從テ土国ノ砲艦ニシテ海洋ニ出動スルコトアル場合ニハ英国側ニ於テハ自衛上之ヲ遮止スヘキ旨

リ土都ハ隱忍土国政府内平和主義ノ勝利ヲ得ルノ日ヲ待チツツ何等ノ措置ニ出テサル次第ナルモ総理大臣以下ノ平和主義者カ其ノ勢力ヲ利用シ以テ土国ノ行動ヲシテ中立ノ限界内ニ止メシメサルニ於テハ土都ハ遂ニ独逸派ノ掌中ニ帰シ結局独逸ノ為ニ戰爭スルノ余儀ナキニ至ルヘシトハ総理大臣及其党与ノ篤ト了解ヲ要スル所ナリ然ルニ土国首相カ再三英国大使ニ対シ土国カ中立ヲ敵守スヘキ旨ノ証言ヲ与ヘツツアル間ニ埃及方面ニ対スル土国軍隊ノ活動ハ益々盛ニシテ武装セル「アラビア」人カ土耳其兵ノ煽動ニヨリ埃及国境内ニ侵入セリトノ報サヘ伝ヘラルルニ至リシヲ以テ英国政府ハ九月二十五日重ネテ土国政府ニ警告スル処アリシニ総理大臣ハ土国ノ中立維持ノ為ニ今日ニ至ル迄自ラ其全力ヲ尽シ居ル旨及埃及国境侵迫ノ報ニ関シテハ陸相ノ説明ヲ得タル上回答スヘキモ事端ノ發生スルカ如キコトハ万々之ナカルヘキ旨ヲ断言シ英国大使ハ本国政府ニ対シ「総理大臣ノ地位ハ目下頗ル困難ナリ同大臣ハ逐日發展シツツアル土地ノ時局ニ対シ之ヲ黙過セサルヲ得サルノ立場ニアリ左レトモ土国側ニ於テ甚シキ敵対行為ヲ起ササル限り我ハ目下独逸兩國カ頻リニ煽動ヲ試ミツツアルニ拘ハラス全力ヲ挙げケテ中立維持ノ為努力シツツア

ヲ警告セシメ同大使ハ尚土軍ノ埃及侵入ニ関シテハ土国首相ニ対シ土国ニ於テ直ニ侵入軍ヲ引返ヘササルニ於テハ大使ハ何時本国政府ヨリ旅券請求ノ訓令ヲ受クルニ至ルヤモ難計ト痛切ニ警告スル所アリシカ翌二十九日土国軍艦ハ突如トシテ「オデッサ」ヲ砲撃シ且ツ露国砲艦ヲ撃沈シ露国ニ対シ戰鬪行為ヲ開始シタルヲ以テ英国政府ハ十月三十日駐土大使ニ対シ土国カ独逸軍事顧問ヲ解雇シ且ツ「ゲーベン」「プレスラウ」ノ独国乗組員ヲ即時本国ニ帰還セシムヘキ旨ヲ申入レ十二時間ヲ期シテ回答ヲ迫リ満足ナル回答ヲ得サル場合ニハ宜シク旅券ヲ請求シテ館員随帶土都ヲ引揚クヘキ旨ヲ電訓シタルカ之ト行違ニ同日附ヲ以テ同大使ヨリハ露国大使ハ同日午後旅券ヲ交付ヲ請求シタルヲ以テ自分モ亦仏国大使ト共ニ旅券ヲ請求シタル旨ノ電報アリ越エテ十一月四日在英土国大使モ亦本国政府ノ電訓ニ基キ旅券ヲ交付ヲ英国政府ニ請求セリ